
妖げんげん

ヒロユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖げんげん

【Nコード】

N1676R

【作者名】

ヒロユキ

【あらすじ】

絢爛豪華な高度文明に彩られた現代の夜。その昔、人と共にあったはずの存在、？妖^{あやかし}？は、今や棲むべき闇を奪われ、その勢力を大きく減退させていた。そんな人と妖のバランスを保つために、幻^{げん}妖界^{ようかい}よりこの世に遣されてきた無愛想な白狐^{びゃっこ}の少女、葛葉^{くずは}。そして、その彼女の元に次々と奇妙な話を持ち込んでくるのは、ちよつと変わった怪談マニアの少年、夜彦^{よるひこ}。彼は葛葉と共に、人と妖にまつわる様々な事件を解決しようとするのだが、その思いとは裏腹に、彼女は非常に気まぐれな性格で、会う度にいざこざばかり……。種族

の違う、人と妖のアンバランスな凹凸コンビは、この世に蔓延る奇妙奇天烈な怪事件を解決できるのか！？

—— 第四話 ——

—— 夜彦の住む町で連続通り魔事件が発生。夜彦はその事件の異常性から、犯人は妖と考え、葛葉に調査の協力を頼むが、なぜか、門前払いに近い扱いを受けてしまう。落胆する夜彦、しかし、そんな彼の前に現れたのは黒い毛並みの狐。その妖狐は、ヒチセと名乗り、夜彦に協力したいと言い出すが……。

其の一（前書き）

どうも、初めましての方は初めまして。

他作品から引き続きお読み頂いている方は、また改めまして、よろしくお願ひします。

作者のヒロユキというものです。

今回は作者初めてのホラーに挑戦してみることになりました。全くの未開のジャンルであるために、これからどのような展開に向かっているのか、全く検討もつきませんが、読者の方々にとって、少しでもいい暇つぶしにでもなればと願っています。

それでは、物語のはじまり、はじまり――。

其の一

どこからか、桜の匂いがしている。

そんな優美な魅力に満ちた、春の夜だった。

少女は、学校のある教室にいた。

生徒の下校時間は、もうとつくに過ぎている。窓の向こうには、足音を立てず、忍び寄るような夜の闇が満ちてきていた。

早く帰らなければ。

少女は焦っていた。

気がつかないうちに、もうこんなに時間が経つていようとは思わなかった。

もしも教室にいることが教師に知れてしまえば、問題にされ、自分の所属している部が注意を受けてしまうだろう。そのためにも、早く教室を出ないといけない。

それに――。

少女は、そつと窓の向こうに目を遣った。

その教室から、校庭の脇に桜の花が植えてあるのが見えるのである。外灯に照らされた、見事な桜並木だ。

と、急な夜風に吹かれて、花びらがきらきらと光るように舞い散った。

高く、遙か空まで飛んでいく。闇に、吸い込まれていく。

それは誰が見ても、惚れ惚れとため息を零してしまうほどに、美しい絶景だった。

しかし、その少女は、身震いをする。

彼女は、その薄紅の闇の向こうに、得体の知れない何かが迫って

いるような気がしていたのである。

言葉では言い表せないが、何か、人にとって不吉なもの。人知を越えた、何か黒いものである。

少女は、それが来てしまう前に、逃げなくてはいけないと切実に感じていた。

心なしか、背筋に寒気が走る。幾分か、先ほどより、空気が冷たくなったようだった。

嫌な予感が、さらに色濃く少女の周囲を取り巻いた。周囲が、紫色に歪んでみえるような気もした。

急がなければ。

しばらくして、ようやく少女は荷物をまとめ終えた。後は帰るだけである。カバンを抱えると、焦って足に椅子がぶつかるのも気にせず、出口まで走った。スイッチで明かりを消す。

よし、これで安心だ。

そう思って、教室の扉を開いた時だった。

少女の背中に、

突如、

何者かの声が聞こえた。

「――」

びくり、と少女の首筋の筋肉が引きつる。踏み出そうとした足が硬直した。

気のせい、ではない。

確かに、聞こえる。

「――」

寂しげな、恨めしげな、『歌声』が。

「――」

背後の空間をじわじわと歪ませるように、それは響く。

少女は、背後の教室の闇に、確かに、何者かの気配を感じた。

しかし、そんなはずはない。部屋には、自分以外の誰もいないはずなのだ。

誰も、何も、いないはず、なのだ。

その事実が、少女の脳内で、やまびこのように、幾度も繰り返された。

でも確かに、不思議な桜の匂いと、寥々《りょうりょう》たる歌声が、漂っている。

嘘、嘘よ。

早く、逃げなくちゃ。

そう思った瞬間、背後の闇に追い立てられるように、少女は走り出した。ただ、何も振り向かずに、逃げ出した。声にならない悲鳴を上げて。

そして、再び、教室に沈黙が満ちる。

少女の背後の闇に潜んでいたのは、果たして人か化物か。それは、とある高校に起こった、一つの怪事件である。

其の二

匂いがする。

やすなかよるひこ

八守中夜彦はそう思った。

麗らかなる春の日の午後のことである。

夜彦は自身が通う逢間おつま高校の陽の当たる廊下に立っていた。ぽかぽかとした平和な陽気のためか、廊下に面する窓はところどころ、無造作に開け放たれている。その向こうには、学生達によって手入れがされた、綺麗な花壇が見えた。和やかな景色だ。

おそらく、新入生を歓迎するためであろう、その花壇には色とりどりの花々が植えられ、それらは皆誇らしげに太陽の光を纏い、その香りを存分に周囲に振り撒いていた。それが、春の穏やかな風に漂い、開け放たれた窓から、夜彦のいる廊下まで届いてくる。

しかし、生憎、夜彦が嗅いでいるのは、そんな甘い香りではなかった。

もつと、繊細微妙で、奇妙奇天烈な匂いである。くんくん、と夜彦の鼻が犬のように鳴った。

どうやら、その匂いの元は、近くの教室から漂ってくるようである。昼の休憩時間でもあり、その教室からは生徒たちが頻繁に出入りしている。仲間と共に連れ立って学食に向かう者、次の授業の教科書を借りに来た者、ただ意味もなく数名で喋り、大騒ぎしている者。そこに引き寄せられるように、夜彦は教室の入り口から中を覗いた。

すると――。

乱雑に机を寄せ合って昼食を楽しんでいる生徒達の中で、なぜか少し離れた教室の隅に、陣取っている集団がいた。彼らは、何やら

真剣な面持ちで周囲を憚るはばるように、話し込んでいるようだった。

怪しい。直感的に、夜彦はそう思った。もしかすると、アレなのかもしれないと期待した。

昔から、夜彦は『そういう』類の話に敏感だった。超能力、という大げさだが、それに近いものではないか、と個人的に考えている。夜彦の鼻は、自分の周囲で、ある特定のジャンルの話題が集団の中で取り沙汰されている時に、反応するのである。

そのセンサーは耳で聞こえるよりも広い範囲を網羅しており、たとえ、多少壁で阻まれていたとしても、感知することが出来る。

そして、今日はその鼻が夜彦をこの教室にいる生徒達の集団に導いたのである。

夜彦はいつものその直感に従い、ためらわずその教室に入ると、早速その集団の中に身体を割り込ませた。

「なあなあ、何の話をしてんだよ」

すると、当然のことながら、その部外者である夜彦の闖入ちんぷうにより、その場の全員の視線が夜彦に向けられた。それは明らかに同士を迎え入れるような友好的な眼差しではなく、場の空気を乱した者への怒りに満ちた視線だった。

中でも、その集団の中央で得意げに話を披露していたと思しき少年は、夜彦の姿を見て、露骨に不快な表情を見せた。おそらく突然の夜彦の出現により、話の腰を折られたせいだろう。

「何だよ、まーた夜彦かよ」

とつんざりした様子で、口を尖らせる。

「お前、どうやって嗅ぎつけるのか知らないが、こういう話をする
と、いつもどこからともなく現れるよな」

「お、ってことはやっぱり——」

ぞわり、と心の水面に不気味なさざ波が立つ。その、背筋をひんやりとした冷気が舐めるような気配に、夜彦は俄に浮き足立つような興奮を感じた。

「——怪談、なのか？」

すると、案の定、少年は頷いた。

「まあ、な。俺がついさっき聞いてきた話よ」

そして、得意げに鼻の頭を掻き、集まっている生徒達を見た。

「それを皆にさ、こうして、いち早く報告してあげてるわけ」

その様子は豪華な邸宅に住まう富豪が、客人たちを家に招いて、我が家の自慢をしているように見えた。

と、いきなり、夜彦は隣から軽く小突かれた。見ると、横で座って聞いていた少女に睨まれていた。

「もう、いきなり入って来て邪魔しないでほしいわね」

そう鋭い口調で文句を言われる。

「私、早く話を聞きたいんだから」

ああ、ごめんごめん。

夜彦は素直に頭を下げ、謝罪をした。確かに、これは話に割り込むというマナー違反をした夜彦の方が悪い。

ちなみに、夜彦はその少女を同じ学年で見かけたことがなかった。一瞬どこのクラスの生徒なのか記憶を探るが、おそらく他学年の生徒なのだろうと思った。怪談が聞けると聞いて、わざわざこちらにやってきたに違いない。怪談には、そういう不思議な魅力がある、と夜彦はつくづく思う。

「さてさて、それで、どこまで話したっけ」

怪談を披露していた少年が大仰な咳払いをして皆の視線を集めた。気を取り直して、話を再開するつもりなのだ。

「ああ、その女の子が、三階の音楽室で居残りで練習をしてたところだったよな……」

そして、少年がおもむろに話し出すと、その場の全員が興味津々に息を潜めて、聞き耳を立てた。夜彦も同じように、身を乗り出して話を聞く。

どうやら、彼の話のあらまははこういう感じだった。

二日前のことである。

とある吹奏楽部の女子生徒が、部活の活動後、一人居残って練習をしていた。それは、校舎の三階の隅の音楽室で練習をしていたのだが、練習に熱中するあまり、時間が経ち、下校時間が過ぎてしまったのに気がつかなかった。はっとした時には、外はもうすっかり暗闇で、それを見た少女は急に心細い気持ちになったのだと言う。

「ほら、あそこに見えるだろ」

話していた少年が教室の窓から外を指差した。そこには、校庭の端に沿って植えられた見事な桜並み木が見える。

「あの桜の木から花びらが舞い散るのをぼうつと見てたらさ、何だか薄気味悪い気持ちになったんだってよ」

へえ、と夜彦は相槌を打った。

今見える桜の花は、柔らかく、薄い霞みに包まれていて、恐ろしさのようなものは微塵にも感じられない。それは誰の目にも明らかだろう。

しかし、

しかし、夜彦は知っている。

その桜の持つ美しさというものは、時に、人に恐怖を与える不気味さを兼ね備えているのだ。物言わぬ闇が、その効果を引き出すのである。

まあ、それはさておき。

その少女は、下校時刻も過ぎているということで、一先ず、荷物を片付け早く帰宅しようと思ったのだそうだ。

だが、そこで、ある異変に気がついた。

急に周囲の空気がひんやりと冷たくなってきたような気がしたのだという。それまでは寒さなど全く感じていなかったため、その異様な雰囲気、少女はますます気味が悪くなったらしい。まるで、見えない何かが凍りつくような息を吐き、少女に近づいてくるようであったそうだ。

もはや、一刻も早く逃げ出したい気持ちを抑え、少女はようやく、片付けを済ませると、部屋を出ようとした。そして、音楽室の扉を開けた時だった。

急に背後から――。

「……誰かの歌声が聞こえたんだと」

少年が、いきなり大声を出して言った。すると、話を聞いていた少年達は「おお」とどよめき、少女たちは「きゃあ、こわーい」と悲鳴を上げた。夜彦だけが、むむむ、と顎の先を指で摘んだ。

暗闇から、歌声。

なるほど。それは確かに面妖である。

話をしている少年は周りをそっと見渡し、満足そうに一度笑うと、また話に戻った。

「もちろん、教室に人なんているわけないから、その女の子は驚いてそのまま逃げたんだってさ……」

そして、その奇妙な出来事に怯えた少女は翌日、吹奏楽部の部長にその話を打ち明けたそうだ。

闇の中から、誰かの歌声が聞こえた、と。

すると、その部長は血相を変えて、少女に音楽教室に伝わる恐ろしい話をした。

「何でもな、数十年前のことらしいんだがな、その教室で自殺した生徒がいたらしい」

少年が言うと、全員の顔色が変わった。

「じ、自殺した？」

穏やかでない言葉である。

「ああ、窓からの飛び降り自殺だ」

「……な、なんだってまた、そんなことを」

訊いた夜彦の視線と話していた少年の視線が交わる。

「その自殺した生徒ってのは合唱部の生徒でさ、毎日のように学校で歌を歌っていたそうだ。熱心な生徒だったらしくてさ、誰よりも練習しててな、いつかは歌手になるのが夢だったんだ。だが、不幸にも、あるとき、喉の病気をわずらったらしい。そのせいでろくに声が出せなくなり、将来に絶望したその生徒は……」

少年が意味ありげに言葉を濁らせると、その場の全員が息を呑んだ。皆がその先を想像したのだろう。

つまり、思い悩んだその生徒は、教室から身を投げて……死んだ。

「じゃ、じゃあ、その女の子が聞いたっていう歌声は……」

興奮した様子の一人の男子生徒がそう口走ると、話をしていた少年は力強く頷く。

「ああ、間違いない。その自殺した生徒の歌声だよ。きっと無念で成仏することが出来ずに、音楽室をさ迷い、毎晩毎晩、歌の練習をしてるんだ。歌手になる夢を捨てきれずに、な」

少年はそこで、一息つくと、

「でな、まあそういう感じでよ、吹奏楽部の奴らすっかりびびっちゃって、しばらく放課後は屋上で練習することにしたって話だぜ」

「はあ……」

夜彦はぼかんと目を瞬かせた。

すると、話をしていた少年が、身を乗り出して夜彦に顔を寄せてきた。どうやら一人だけ反応の鈍い夜彦のことが気に入らないようだ。

「はあ、ってなんだよ。お前、怖くないのかよ」

「いやあ、怖いけどさ。実際どんなものか、その子見てないわけだろう？」

「あん？」

「その歌を歌うつて幽霊さ」

「そりゃ、びびって逃げたんだからよ」

ふうむ、と夜彦は考え込む。

「正体不明かあ……」

そんな夜彦の様子をその少年はしばらく眺めていたが、ややあつて、合点がいったように頷いた。

「お前、まさか、見に行くつもりじゃないだろうな」

「え？」

まさかの図星に夜彦はたじろぐ。

「い、いや、そういうわけじゃ」

「お前ならありえそうなんだよな。夜の校舎に居残って、とかさ。でも、やめとけよ」

「え？」

「そういう遊び半分だっていうのは一番まずいんだぜ」

幽霊に呪われるぞお。

少年がそれっぽく両手を上げると、それにつられて何人かの生徒が笑った。

しかし、夜彦はそんなことなどお構いなしに、こう思っていた。

こいつはもしかすると、
妖あやかしの仕業かもしれないな。

妖あやかし――。

この世には、そう呼ばれる存在がある。

それは、闇を棲家とする者たちのことである。

彼らは人間の力を遥かに凌駕した者たちのことであり、人間たちが畏怖し、なるべく関わることをしないよう、忌避する者たちなのだ。いったいいつから彼らはこの世に存在していたのか、それは定かではないが、彼らという存在は古来より、人間と密接な関わりがあった。

怪異、妖怪、化物、物の怪もののけ……。

彼らの呼び名がこうして幾つも世に知られているように、彼らという存在が人々に大きな影響を与えていることは明白であるだろう。人間が陽の者だとするならば、彼らは陰の者であり、互いの力によって、牽制をしあって生きてきた。妖が人を喰らうならば、人は光を持って彼らに対抗し、人が妖の領域に踏み込もうとするのならば、妖はその不思議な力によって彼らを怯えさせた。

人と妖が互いの領域を守り続けることで世界は安定し、この世は繁栄していたのである。人と妖は古より、切っても切り離せない存在なのだ。

しかし、

時代は変わった。

人類の技術は、今や日進月歩。

押し寄せる近代化の波は、世界から闇を切り取り、妖の居場所を

根こそぎ奪い始めた。人々は夜でも昼間に近い快適な環境で生活をするようになり、その反面、妖の存在は消されていった。妖は人間たちの技術に対抗する術もなく、闇と光の境界線をじりじりと後退させていくしかなかったのである。

今や、人々の中では、もはや妖の存在を認めず、存在を否定し続けている者たちも多く出始め、古き過去の遺物として、馬鹿らしいと笑い飛ばしてしまう者もいる。

が、しかし。

妖は、今でも現代の世界に息づいている。滅びてしまったのではない。以前よりも遥かに勢力の規模は縮小してしまったものの。まだ確かに、この世に存在しているのである。

八守中夜彦は、その事実を知る数少ない人間たちの一人だった。

夜彦は昔から妖という存在に親しみを抱き、いつでも、彼らの話を聞くことが好きだったのである。

そして、夜彦は彼らの話を聞くと、必ず訪れる場所がある。今日も聞いたばかりの怪談を土産にそこに向かおうとしていた。

あの無愛想で、ひねくれもので、みょうちくりんなあいつに、その話を聞かせるために。

其の二（後書き）

続きは二日後を予定しています。

其の三

その日の放課後――。

夜彦は逢間高校を後にすると、真っ直ぐにとある場所を目指した。下校中の生徒たちで賑わう通りを逸れ、一人、川沿いに伸びる広々とした道を走り歩きで進む。

夜彦が住んでいる町はさほど大きな町ではない。近代化した巨大なビルが立ち並ぶ都会とは違い、住宅地と田畑、小さなスーパーや数店のコンビニくらいが敷き詰められたほどの、簡素な田舎の町だ。町の北側には青々とした海が広がり、漁船が浮かぶ港があつて、一日中穏やかな波が岸に打ち寄せている。夜彦は釣りには興味が無いが、釣り人が多く訪れる魚に恵まれた釣り場なのだそうだ。

一方、町の南側、川の上流には森がある。山のすそ野に広がる平らなもつさりとした森で、奥へ入るほど険しくなり、薄暗くなる。普段はあまり人氣がなく、若者など、見向きもしないような場所だが、夜彦はそこへ向かった。その森の近くにある神社に用があるのである。

歩いていると、周囲は次第に民家が消え、その隙間を埋めるように木々が増えてくる。山が近づいてくると、どこか厳かな空気が漂ってきた。

すると、

見えてきた、朱色の鳥居の稲荷神社だ。鎮守の森に守られるようにして、ひっそりと佇んでいる。

夜彦は急ぎ足でその神社の入り口にまでたどり着くと、周囲を見回して様子を窺った。鳥居の向こうには苔が青く生した十数段の階段があり、すぐその上が境内となっている。どちらかというとそれ

ほど大きな神社ではない。管理している人間もいるのかもよく分からない、普段は人気の無い神社だ。

時折、子供達が境内で遊びまわっていることもあるが、今はその影もなく、ひっそりと静まり返っている。

石で作られた狐の像が石段の上からこちらを見下ろしていた。夜彦は、それがまるで、お前、また来たのか、と言いたげな表情をしているように見えた。

夜彦は一先ず鳥居に寄りかかって呼吸を整えた。急いできたので、息が乱れている。

しかし……。

誰も、いないのか。

折角話したいことがあって、走ってきたというのに、『あいつ』はどこをぶらついているのだろう。全く、肝心なときにこれだ。

がっかりした気持ちで、夜彦が、空を見上げたとき。

「あ、あれ？」

夜彦の目が、鳥居の上、反った笠置に伏せっている、銀色に光る巨大な何かを捉えた。

その巨大な何かは、まん丸としていて、ふさふさとした毛を生やし、先から尻尾をだらんと垂らしている。時折、体を膨らませたり、萎ませたりしているところを見るに、どうやらその何かは眠っているようだ。

こんな所にいたのか。夜彦は思った。

どこにも行っていないようで、安心する。そして、

「おい、葛葉」

そう呼びかけた。

その巨大な何かを起こそうとしたのである。すると、その物体から、ピヨコンと二本の耳が生えた。いや、違う。耳は元からあったのだらう。正確には、その銀色の何者かから、耳が立ったというベキだ。

そして、その耳は一瞬、機敏に反応し、周囲の音を聞いていたようだ。すぐにぺたんと曲がり、見えなくなる。単に無意識に反応しただけで、まだ眠っているらしい。

そう思った夜彦は、今度はもつと大声で呼ぶ。

「葛葉、俺だよー!!」

ややあつて、その物体の耳がまたしても動き、声のする方を向いたと思うと、そこでむっくりと細長い顔が持ち上がった。

それはなんと、見事な銀色の体毛に覆われた、白い狐の顔だった。そして、その狐は後ろ足で耳のあたりを掻くと、のっそりと立ち上がった。狐の全体の姿が分かる。

普通の狐とは違う、その大きめの体と、たくましく、それでいて細くしなやかな手足。どこか凄まじいオーラを感じさせる瞳は、今、キラキラと光っていた。

普通の人間ならその巨大で超然とした姿に、怯えて逃げ出してしまふようなものである。だが、夜彦には恐怖している様子は微塵にもない。むしろ、ほっとした表情でその狐を見上げている。

「おーい、葛葉!」

すると、その白い狐は、夜彦を一瞥すると、忌々しげに、

「ふん」

と鼻息を飛ばし、

「また、お前か」

なんと、言葉を話した。

「ああ、今日も用があつてな」

しかし、狐が言葉を話すという驚愕の事態にも関わらず、夜彦は未だ冷静である。

「降りてこいよ」

と暢気に手を振る。

狐は、一度、詰まらなさそうに顔を背けた。

そして、何かを考えたのか、いきなり振りむ向き様に牙をむき、その場から、跳ねた。

夜彦に飛びかかって来た！

え？

夜彦は、その瞬間、茫然自失とした。そのあまりにも唐突でためらいがない動きに、その場を動けなかったのである。

何が起こつた？

状況判断もできないまま、思考が停止し、棒立ちになる。逃げられない。

そうこうしているうちに、見る見るその狐が近づいて来た。白い狐は、空中で前足を夜彦に向かって突き出すと、全体重を前にかけるように体勢を細く保ち、一本の矢のようになって突っ込んでくる。そして、止まらぬ勢いのまま、

「とりやつ」

夜彦の胸に、蹴りが炸裂した。

「うがつ！」

たまらず、絶叫した。

夜彦の体が問答無用で、後ろに吹き飛ばされる——かと、思いきや。

そうではない。

通常、これほどの巨体の動物が襲い掛かってくれば、人間などひとたまりもないはずのだが、その狐の蹴りは不思議なほどふわりと軽く、夜彦は僅かに後ろによるめき、鳥居の柱で強かに頭をぶつけるだけで済んだ。

「いっつつてえええ!!」

激痛に夜彦は頭を抑え、顔を歪めた。
すると、

「夜彦、邪魔だ」

と、白い狐の声がする。

どうやら、着地を終えたようで、夜彦は視線を向けた。しかし、そこに立っていたのは、巨大な白い狐ではない。

なんと、一人の古風な服装をした——少女だった。

「どうだ、痛かったか？」

いったい、狐はどこへ消えたのか、彼女は、暢気にあふあふと涙

目で欠伸をしながら、ぐつと背伸びをしている。一方夜彦は、同じ涙目ではあるが、痛みのある後頭部を摩りながら、言い返す。

「あのなあ、葛葉」

と先ほどの狐に呼びかけたのと同じ名で、彼女を呼ぶ。

「冗談きついで。幾ら知り合いのお前でも、狐の姿のまま飛びかかって来られたら、普通は卒倒ものだぞ」

「そんなに私が怖かったか？」

「あ、当たり前だ。おかげで変な汗を掻いたじゃないか」

「ふふ」

すると、葛葉と呼ばれた少女は静かに微笑む。

「まあ、人間である夜彦がそう思うのも無理はない。私は本来人間に恐れを与えるべき存在、妖。白狐だからな」

そうなのである。

彼女こそ、つい数瞬前、夜彦に飛びかかってきた白い狐なのだ。

夜彦はそのことを初めから知っていた。彼女は妖であるため、その持ち前の不思議な力を駆使し、今は人間の姿に変化している。

夜彦は彼女の姿をじっと見た。

彼女は、すらりとした細身に、古風な印象の強い身軽すいかんそうな水干姿で立っていて、絹のような光を放つ白銀の髪を揺らしている。春だというのに、冬の日に降り積もった雪を想起させるような、美麗な白い肌をしており、夜彦より背が低く幼い印象があるのに、どこか大人のような妖艶さを醸し出す顔立ちが、見とれてしまうほどの美しさだった。

その不釣り合いで奇妙な魅力も、彼女が常人ではないことを示している。

「全く……仕方ない奴だな」

夜彦はため息をつく。彼女のイタズラ好きな性格も困ったものである。

しかし、葛葉はそんな夜彦を横目で見ると、不機嫌そうに睨んだ。

「あの子、夜彦」

「何だよ」

「そもそもは、折角の私の睡眠をお前の声が邪魔してきたことが悪いのだぞ」

「え？」

「お前がのんびりくつろいでいる私の昼寝を邪魔などするから、私は仕返しにお前を驚かせてやろうという考えに行き着いたのだ」

「ああ、そうだったか？」

それは気が廻らなかった。つい、彼女を発見できた嬉しさで夜彦は、大きな声を出してしまったのだ。

彼女は鳥居の上を見上げる。

「あの子、あそこは心地よい風を感じることが出来る、私だけのくつろぎの場所なんだ」

「そ、それは、ごめん」

素直に謝罪するが、葛葉の方は、むんと腕を組み、未だご機嫌ななめのご様子だ。片足で地面を叩き、唇を突き出す。

「ふん。大体、お前の声は大きいんだ。普通じゃないほどにな。お

前の周りの者は驚いたりしないのか、その馬鹿声に」

「ば、馬鹿声え！」

この言われ方には、夜彦も怒った。

「馬鹿声ってなんだよ！」

「そのままだ。おそらくお前が馬鹿だから、そんな声になるんじゃないのか？ 声の調整が効かないのだな」

「何だとお！」

夜彦が憤慨すると、彼女はわざとらしく縮こまり、両耳を塞いで、ぶるぶると頭を振った。

「おお、うるさいうるさい。うるさくてかなわん。頼むからもう少し自重できないのか？」

「俺は馬鹿なんかじゃない。断じてな。葛葉、前言撤回してもらおうか」

ここで適当に受け流してしまうと、これから先もそう呼ばれ続け、てしまうかもしれない。そう思った夜彦は、彼女にそう迫る。

すると、普段は簡単に要求を呑む彼女ではないのだが、何かを考えた素振りを見せると、案外しおらしく頷いた。

「そうか、そうか。分かった。私が悪かった」

「よし」

「じゃあ、その馬鹿ではない何か別の物。百二十円を貸せ」

夜彦は思わず、ずっとけてしまうかと思った。これには、さすがに、ツッコミを入れざるを得ない。

「おい。何だよその、そこはかたなく癪に障る呼び名は」

「何だよとは何だ。お前は馬鹿と呼ばれたくないのだろう。だから、そうではないものを指す呼び方を、私なりに考えたのだ」

彼女は腕組をし、飄々と答える。

「た、たしかに、その通りではあるけれど……むう。まあ、それは一度置いておくとして、最後に言った百二十円って何だよ」

「ジュースを買うお金だ。私は目覚めたばかりで喉が渴いているのだ」

見ると、道の向こう側の電信柱の側に丁度良く自販機がある。おそらく何かを飲みたいのだろう。

正直、何で自分がそんな金を払わなければならないのか、と夜彦は思う。拒否したい気持ちだ。

しかし、そこで夜彦は考える。

これは自分の頼みを聞いてもらうための方便として使えないだろうか。

夜彦は財布から小銭を取り出すと、手のひらに乗せ、彼女に差し出す。そして、彼女が手を伸ばすタイミングを見計らって、ぱつと引っ込めた。当然、葛葉の手は宙を掻く。

彼女は不愉快そうに目を釣り上げた。

「何の真似だ？ 夜彦、今私は寝起きであまり機嫌が良くない。お前とおふざけをしたい気分ではないんだぞ」

それに対して、夜彦は余裕の笑みを浮かべ、こう言った。

「金を出してやるから、俺の話を聞け」

すると、彼女はあからさまにがっかりした顔になって肩を落とし、大きなため息をついた。

「何だ、また夜彦は下らない話を持ってきたのか？」

「下らないとは何だ！」

「どうせまた、怪しい話だろう」

彼女は横目で夜彦を見上げた。

「おお、そうだ。妖が絡んでるかもしれない話なんだ」

それみる、と彼女は眉を吊り上げた。

「胸を張るな。お前は私の許可なく、また余計なことをしてくれているようだな」

「余計なこととは何だ、葛葉の仕事の手伝いをしているだけだろう？　むしろ感謝してほしいくらいだ」

しかし、そんな夜彦の胸を人差し指で突きながら、彼女は言う。

「それを余計なお世話というのだ、夜彦。お前は何か勘違いしているようだ、お前が持つてくる話はな、本来仕事などではない。聞く必要も無い他愛ない世間話なのだ。お前はそんなものを持つてきては、私にやるつもりもない余計な仕事を増やそうとしているんだ」「そんな馬鹿な。この町の調査は葛葉の列記とした仕事だろう。怪しい話があるなら、きちんと調べない」と

しかし、彼女は不真面目な様子で鼻を鳴らす。

「ふん、そんな細かいことまでいちいち構っていられるものか。私はもっと大きな重大な事件の解決を任されている。些末な事柄など構ってられないのだ。下らないことなど抜かさず、さつさと、ほれ」

と手の平を突き出した。

夜彦は顔をしかめる。

「何だよ」

「二百五十円」

「おい、さらつとさつきより金額上げてるじゃねえか」

「気がついたか。あながち馬鹿でもないんだな」

と、彼女は妙に感心したように目を見開く。その様子が何とも腹立たしい。

「だから、馬鹿じゃねえよ」

「よし、では馬鹿から少しマシな馬鹿に昇格させてやろう。さあ、手を叩いて喜べ」

「何だよそれ、全然嬉しくねえし！ 何でそんなに上から目線なんだよ！ それに、二百五十円なんて、何するんだ？」

「向こうのコンビニでケーキを買うのだ」

彼女は道の向こうに視線を向ける。少し離れた場所に、利用客などいるのかどうか分らない、看板の汚れたコンビニがあった。

まあ、それは良いとして。

「おい、じゃあ喉が渴いたのはどうしたんだ？」

「ああ、そういえばそうだったな。じゃあ三百七十円だ」

何食わぬ顔でそう要求する葛葉に、夜彦はほとほと呆れて、ため息をついた。

其の三（後書き）

次回も二日後の予定です。

其の四

神社の石段に腰掛け、持っていたコンビ二袋を開けると、葛葉は満足そうに頬を緩ませた。

中からクリームにたっぷりココアパウダーのかかったケーキを取り出し、フタを開けると、ひとまず、クンクンと匂いを嗅ぐ。

少々常識で不躰な行動だが、それは彼女が本来人間ではなく、狐であるが故の本能的な行動なのだろう。手にした獲物が上等な物であるか、確かめているに違いない。

ややあつて、彼女は何かに納得したように頷くと、むふうと鼻をふくらませ、嬉しそうにスプーンでケーキを頬張った。

夜彦は、その様子を同じくコンビ二で買ってきた唐揚げをつまみながら、眺めていた。彼女の寝起きの機嫌の悪さがどうなるかと思っていたが、とりあえず、反応は悪くないようで、安心する。

そして、唐揚げを一つ飲み込むと、

「ほら、ケーキを買ってやったんだからさ。俺の話を聞けよ」

こう訊いた。

すると、それまでスプーンを咥えて、至福の一時に浸っていた彼女だったが、急に表情を曇らせ、不愉快そうに口元にシワを寄せた。

「おい、その少しマシな馬鹿。誰がそんなことを約束した？」

と、半眼で夜彦を睨みつける。

彼女の再びの馬鹿発言に、夜彦はカチンとくるものの、そこは言葉には出さずに抑えこむ。ここで言い

争っては、今日の計画は丸つぶれなのだ。それに、紳士というものは常に冷静で在らねばならない。

「たしかに、約束はしていないが、こういう時は、ケーキを奢ってもらった恩返しとして、話くらい聞くのが礼儀だろう」

と、彼女の機嫌をこれ以上損なわないよう、ゆっくり焦らないよう話す。

しかし、彼女はそれを鼻で笑った。

「あのなあ、夜彦。恩返しというものは、だ」

そう言って、スプーンを夜彦の顔に突きつけるように向ける。

「あ、あん？」

「本来誰かから強要されるものではなく、自らの良心に従い、自発的に行うものだ。違うか？」

「……うへえ」

まさか、そこにツツコミが入るとは。予想していなかった夜彦は、唐揚げを落としてしまいそうになった。

葛葉はというと、スプーンで着々とケーキを口に運びつつ話す。

「はむ、もぐもぐ……私はだな、夜彦。お前に言われるまでもなく、私がお前から受けた恩を返すにあたり、何が適正であり、何が適正でないのか、見極めるだけの力がある。それはお前にいちいち指摘されるまでもないことだ」

「じゃあ、適正な判断を下した結果、現時点で俺の話聞く気はない、と」

「うむ。まあ、そういうことだな……はむ、もぐもぐ」

これにはとりつく島もない様子で、夜彦はうんざりする。

どうやら、彼女の気分は、すこぶる悪いらしい。睡眠を妨げられたことをまだ根に持っているに違いない。

それくらい、もう許してくれよ、と夜彦は思う。今日は話をするためにここに来たっていうのに。

「じゃあ、ちなみに聞くが、葛葉にとって俺に対する恩返しってなんだよ」

「うむ？」

「だから、適正に、判断するんだろ？」

「そうだな……ふうむ」

すると、彼女は考えに迷っているようで、ずっと目を伏せた。

しかし、その仕草はそれっぽく見せているだけで、内心、面倒くさそうだった。いちいち真面目にそんなことなど考えていられるかという彼女の心情が微妙な仕草から見え隠れしているように、夜彦には感じたのだ。

彼女は元来、いい加減な所がある。何をするにも適当だし、どうにもやる気を感じない。いつ会ってもこの近所をぶらぶらしているだけで、生きるということにすら、何ら目的を持っていないように見えるのだ。今回も、わざわざケーキくらいで夜彦に恩を返そうなどとは、本気で思っていないに違いない。

適当にはぐらかされるかと思ったが、

しばらくして、ふう、と彼女はため息をつく、意外にも、

「仕方がない」

と夜彦を見た。

「今度来るときまでに、お前の分のねずみの肉を用意しておこう」「いらねえよ！ー！」

思わず、夜彦はそう叫んで彼女の傍から飛び退いてしまう。
冗談ではない。ねずみの死骸なんて！

「おや？ 私は食べ物のお返しには、やはり食べ物がいいかと思っ
たのだが。気に入らなかつたか？」

「ああ、お前は何か、俺の体が未知の感染症に侵されちまえばいい
とも思ってるのか。冷や汗もんだぞ」

夜彦は額を拭う。腕には鳥肌が立っていた。

彼女のニヤケ顔を見るに、明らかに冗談ではあるだろうが、夜彦
は彼女が本来獣であり、妖であることを改めて実感した。

「そうかそうか、葛葉は普段そういう物を食べてるんだよな」

見た目は、たしかに人間の少女であるが、その中身は紛れもない
人外の生命体なのである。つまり基本的に、人間とは食べるものが
違う。夜彦たちが普段、汚らしくて、見るのも不快なほどの物体を
彼らは貴重なエネルギー源として、食しているのだ。

夜彦が遠巻きに彼女を見ていると、

「何だ、軽蔑するような目で私を見るな」

失礼だな、夜彦は、と葛葉は口を尖らした。

「いやあ、軽蔑っていうか、気味が悪いっていうか、不潔っていう
か」

「何を言うか。もっと尊敬の眼差しを向ける。褒め称えよ。私ほど
グルメな妖はざらにはおらんぞ」

「はあ？」

「私はだな、夜彦。この世のありとあらゆる食べ物に興味があるのだ」

彼女はそう言って大げさに胸を張る。まるで、世界に向けて演説をする博愛主義者のように、その両腕を広げて見せる。

しかし、一方で、夜彦は彼女の普段の食事風景を想像してしまい、気分が悪くなっていた。そっと袋に入った唐揚げをつまみかけるが、上手く飲み込める気がなくなり、そっと袋に戻す。すっかり胃が縮こまってしまったようだ。

「ほ、ほら」

「何だ？」

「こ、これもやるよ」

夜彦は彼女に残りの唐揚げを差し出していた。これ以上はとてもしゃないが、口に入れられる気がしない。それを見た葛葉はきょとんとした。

「どうした。まさか夜彦、お腹がいつぱいなのか？」

「あ、ああ、まあな」

「いったいどうした、育ち盛りの高校生男子ともあろうものが、こんな少食では、勉強と運動は両立できないぞ」

「ああ、あいにく勉強の方は半分諦めてるんでね」

「はあ……」

彼女は少しだけ不思議そうに夜彦の顔を覗き込んで、

「では、ありがたくもらおうか」

と受け取った。

そして、彼女は早速、唐揚げを口に入れる。その瞬間、彼女の小さく薄紅色をした可憐な唇に、夜彦の視線が注がれた。まだどこか子供のようなあどけなさの残るその可愛い同じ唇で、身の毛もよだつ血みどろのハラワタをはむはむ食い漁っているところを想像すると、ゾットする。

夜彦は頭を振って、その嫌なイメージを脳内から振り払った。

「うむ、なかなか美味だな。コンビニの食べ物は、やはり日に一度は食すべきだ」

「……グルメを名乗ってる奴が言うことかよ。おもいつきり不健康そうだが」

夜彦はげっそりしながら指摘する。

「何を言うか、夜彦。食事はおいしくなければ始まらないのだ。体に良いか悪いかは、はっきり言ってどうでもいい。そんなことは後回しなのだ、夜彦。食事とは、第一に、楽しむべきものなのだぞ」

「へえ」

「最近、ダイエットだの、時間がないだの、満足に胃の腑を満たす食事をしない人間がいると言うが、これは由々しき事態だぞ。ただ養分を補給するためだけに食事をするなら、栄養ドリンクを点滴でもしておればよい。食べ物を楽しめぬ食事は食事とは言わん」

ここでまさか、食事について一講釈垂れるとは。彼女は怒ったように次々と唐揚げを口に入れていく。

「はあ、左様か」

「そうだ。夜彦、あそこを見るのだ、あのコンビニの自動ドアから漏れてくるおいしそうな匂いを嗅げ。あの香しい、フライドチキンの……」

食べ物を口に入れたまま下品にもあれこれ喋っている彼女に対し、

「……匂いに、ねえ」

と相槌を打って、そこで、夜彦はあることを思い出した。

「そうそう、匂いといえばな。今日はいい匂いだよな」

「うん？ いきなりどうした？」

彼女が話しながら、唐揚げを口に運ぼうとして、その手を止めた。

「いや、桜の匂いだよ。学校の校庭にさ、桜が植えてあつて、ちょうど今、満開なんだよな」

突然何を話したのかと、彼女は目を瞬かせた。はむ、と不審げに唐揚げをまた一つ食べる。

「学校の音楽室からも、その桜が見えるんだけど、実はさ、二日前にな……」

そこで、びっくり、と彼女の鼻が怪訝そうに動いた。

「お前、それはもしや、先ほど聞いてきた、という話ではないのか？」

「ああ、そうだが」

すると、彼女はずっしりとした、重い溜息を吐く。

「私は聞かないと言ったはずだが」

しかし、ここまできて夜彦も引き下がれない。

「まあまあ、葛葉、ケーキの残りもあるんだし。ゆっくり食べながら聞けばいいじゃないか」

「……仕方ない。聞くだけだぞ」

すると、放っておいても夜彦が喋ると察知したのか、彼女は渋々了承した。

そして、ようやく彼女の許可を得た夜彦は意気揚々と昼間に聞いたばかりの話を嬉々として彼女に話し始めた。夜彦としては、この事件がいかに不可思議な魅力に満ちていて、そこに、真実を見出す必要性があることを精一杯表現した。

その間、彼女はというと、始終、ケーキをつつきながら、相槌を打っていた。

そして、話が終わって……。

「どうだ？　なかなかエキセントリックで、ゾクゾクするだろ？」

興奮覚めやらぬといった風に夜彦が訊くと、彼女は暢気に大きなあくびをした。

「えきせんと……？　いや、ただ、退屈で、眠ってしまいそうな話だなあつと。ふわあああ」

「俺の話は子守唄か！　きちんと話聞いたら。実害が出てるんだ。吹奏楽部の皆さんが困ってるの。調査に行かないと」

これには、夜彦も憤慨する。あれほど必死に話したというのに、彼女はほとんど上の空だったのだろうか。

しかし、彼女は意外にも、

「……分かった、分かった」

と俯いたまま、降参するように手をひらひらさせた。

「え、い、いいのか？」

「はあ、何だか行かなければお前がいつまでもうるさそうだし、な」

と肩をすくめる。

「やったああ！」

夜彦は両手を上げて石段から飛び上がった。これで、話の中に出てきた妖に会いに行けるのである。いやが上にも気持ちは盛り上がる。

そんな夜彦に対し、葛葉は胡乱な目つきを向ける。

「しかし、お前はあれだな、つくづく物好きな奴だな」

「え？」

「普通の人間はそんなに怪談や妖に執着したりしない」

「執着って……みんな怖い話好きだぜ？」

「夜彦の場合はその一線を越えている。そういう話に興味を持つだけでなく、妖という存在に日常的に接し、これほど慣れ親しんでいるというのがおかしいと言っただ。ドがつく物好きなのだ、お前は変態だな、変態」

横目で睨まれて、夜彦は持ち上げた腕をだらんと垂らす。

「酷い言われようだな」

自分はそんなにおかしいのだろうか。確かに、怪談話の匂いを嗅ぎとるという常人離れの能力はあるが。

「おかげでこっちはいい迷惑なんだ。少しは察してくれると助かる。妖と関わるのは面倒なことが多い」

「自分もその妖の仲間じゃないか」

「そうだ。だからこそ、分かるし、嫌なんだ。私はもっと自由奔放に暮らしていきたい。面倒ごとは御免だ」

「でも、なんだかんだ言っただけ……」

「うん？」

「調査には協力してくれるんだろ」

夜彦が念を押して訊くと、彼女は渋々首を縦に振った。

「ふん。仕方なくな」

その仕草を見ながら、夜彦は、やはり本質的な部分で彼女は優しいのだと改めて感じる。

神社の階段に、そっと春の風が吹いた。見上げた空はほんのり赤く染まった夕暮れで、カラスが山へと飛び去っていくのが見える。穏やかな一時である。夜彦はなんとなく、空を眺めていた。

と、ふいに、こちらをぼうつと見ていた彼女の視線に気がついた。なにやら、不思議そうな顔をしていたが、夜彦と目が合ったことに気がつく、ムツとした表情になり、目をそらす。

何かあったのか、訪ねようと肩を叩こうとしたが、それを彼女は察知していて、たちまち手を叩かれた。

全く、嫌われたもんだ。

夜彦は仕方なく、彼女の綺麗な髪を眺めることにした。彼女に気がつかれないよう、上から下から慎重に見つめる。

うん、今日はいつにも増して、とびつきりにさらさらだな。

それに、シャンプーをしているわけではないのに、相変わらずの、この不思議な甘い匂いだ。嗚呼、いいなあ。いいなあ、彼女の銀髪触りたいなあ。

そして、そんなことを思っていると、しばらく、無言の時間だけが過ぎた。

唐突に、葛葉が口を開いた。

「しかし、逢間高校ねえ」

何の脈絡もなかったので、夜彦は一瞬ぼかんと呆けた。

「あん？ 高校がどうかしたか？」

「いやあ、あそこはいつ見てもおんぼろで、いかにも妖が好みそうなものだと思つてな」

「……？ あ、ああそうかもな」

夜彦は頷く。彼女の言うとおり、夜彦の通っている逢間高校は、かなり古い歴史がある建築物で、ずいぶん前に一度校舎が建て替えられたものの、それ以降、一度も改修などの補強工事行われていない。

そのため現在では、壁はひび割れ、廊下は様々な傷でぼこぼこ、部屋は湿った埃の匂いがする。生徒たちからは、何度か綺麗にしてほしいという要望が出ているはずなのだが、予算がないのか、そもそもやる気がないのか、未だ実現する気配はない。

「夜彦、私はやるならさっさと決着^{けり}をつけるつもりだ」

急に彼女は立ち上がって言った。

「え？」

「調査は今夜にする。夜の十一時に学校の前に集合だ」
「い、いきなりかよ」

彼女の唐突な宣言に夜彦は目を白黒とさせた。

「さ、さすがに急すぎないか？」

「お前、善は急げという言葉を知らないのか？」

「し、知ってるけどもさ」

「じゃあ、決定だ」

一度決めたら、夜彦にろくに言い返す暇も与えない。相変わらずの彼女だった。

しかし、こんなにも急に決めるなどと、彼女は何か考えても思いついたのだから。立ち上がった彼女を見上げながら、夜彦は思う。しかし、考えたところで分かるはずもなかった。

まあ、そんなこんなで、計画は今夜に決まった。

其の四（後書き）

この先しばらくは、二日間隔で更新していこうと思います。

其の五

山間に太陽の残光が消え去ると、町は物言わぬ闇の海に沈んだ。穏やかな春の日の名残は消え去り、代わりに、心細い冷たさをまとった夜の影が辺りを覆い始める。

夜彦は、その夜、自宅で夕食を済ませると、家族の目を盗んで、こっそり家を出、自転車を走らせた。

目的地は、自分の通う高校である。坂道を下り、見慣れた通学路を風を切って進んでいった。暗い夜道には、人影はほとんどない。世界はひっそりとしている。

しばらくして、道が海に近づくと、人気のない校舎が暗闇から、のっそりと現れた。その様子は、まるで息をひそめて町を見渡す巨大な怪物のようで、闇を縁取った教室の窓は、その怪物の岩窟のような、黒々とした目のようだった。

夜彦は自転車を降り、校舎の塀に沿って歩いていった。

と、夜彦の鼻先を、何かがかすめた。

咄嗟に手で掴み取る。見ると、それは桜の花びらだ。

校庭の周りには、ちょうど散り始めたばかりの桜が静かに佇んでいる。外灯の光に照らされて、その桜の薄紅色が、淡く輝いているような印象を受ける。

夜彦は何だかその魅力に吸い込まれるようにして、近づいた。夜の桜は、単なる美しさとは違う、どこか不気味な魔力に満ちているようだった。夜彦の心が、渦のような、その幻想的な雰囲気飲み込まれていく。

「やっぱり、昼間見たときとは、違うな……」

つい、そう呟いていた。

その時、

「何が違うというんだ？ 夜彦」

何者かの声が聞こえた。思わぬことに、体に緊張が走った。
誰だ？

すると、見上げた桜の枝の上に、ぼんやりと薄い影が見えた。それは瞬きの間に消えてしまったのだが、間髪入れず、夜彦の傍に誰かが降り立ったような気配があった。

「さては、私の美貌か？」

その、誰かが言った。

咄嗟にそちらを振り向いて、その人物を確認し、

「く、葛葉かよ……」

驚かすなつて、と大きく深呼吸をしながら、気持ちを落ち着かせた。

夜彦の目の前には、つい夕方まで一緒にいた、白狐の少女が立っていたのである。どうやら、桜の木の上で自分が来るのを悠々と待っていたらしい。

彼女の流れる星屑のような銀髪は、相変わらず神秘的な光を放っているのを夜彦は見る。こんな少女はそこら辺を見渡しても、他にいるはずがない。間違はなく、葛葉である。

しかし、彼女の容姿は、それ以外のある部分において、先ほどと、明らかに異なっていた。

それが――。

服の下から覗いた、白狐の艶やかな一本の長い尾と、頭上の銀髪

の間からちょこんと生えている、二つのふつくらした毛並みの狐の耳だった。

それらは少女の姿の彼女と不釣り合いなもので、普通の人が見れば、何かの見間違いかと二度見してしまうほど、珍妙な出で立ちである。もちろん断っておくが、それは彼女が自身の可愛らしさを存分にアピールするためのアクセサリーとして、柄にもなく、身につけているものではない。正真正銘、彼女自身、白狐の体の一部なのである。

そしてそれは、同時にあることを示す、一つのサインでもあった。「力、開放してるのか？」

夜彦は、彼女に向けてそう訊いた。

「もちろんだ。何が起こつてもいいようにな」

彼女は、自慢気に自分の尻尾を一振りしならせる。

「普通の人間の姿では、本来の力をほとんど封じているわけだし、ある程度力を発揮するには、このくらい白狐の姿を発現させているのがよい。予期せぬ事態に備えてな」

彼女はそう言った。夜彦もふうんと頷く。

実は、先ほどと違う、彼女から生えた尻尾と耳には、彼女が言うとおり、白狐の力の開放のためという理由があるのである。

妖には、人間にはない超常現象を操る特別な能力があるが、白狐の場合、人間に変化してしまうと、より完全に化けるために、その力を自ら封じてしまうのだ。

そのため、元の力を開放するためには、再び白狐の姿に戻る必要があるのだが、面倒臭がりな彼女はそこまではせず、体の一部を元

に戻すだけに止め、およそ、半分ほどの能力を開放する。その状態が、これなのだ。

ちなみに夜彦は彼女には内緒で、その状態の彼女を「狐っ娘形態」と名付けている。

「しかしな、夜彦。いま何時だと思っている」

と、そこで急に彼女は声色に怒気を混ぜた。

「え？」

夜彦は首筋に冷たいものを感じながら、答える。

「じ、十一時半、だけど」

「確か、約束は十一時だったはずだぞ」

彼女は不満そうに、近づいてきた。彼女の二つの耳がその感情を表すように、ピクリピクリ、と神経質そうに動く。

「いやあ、すまん。中々家を抜け出すチャンスがなくなつて——」

「あのな、夜彦」

「へ？」

「私はお前が必要なことだと言っているからこそ、わざわざ付き合つてやっているのだぞ。ならば、常識的に考えて、待ち合わせ場所には、お前が先に来ておくべきなのだ。ましてや、のこのこ後から遅れてきて、私を待たせるなど……言語道断だ！」

ヒュン——。

鋭く空気を裂く音がして、何かが、夜彦の耳元を掠めた。今度は桜の花びらなんかではない。

「う、うわっ」

それは、針の先端のように鋭利に尖った彼女の尻尾だった。自身の体の後ろからくると、向きを変え、夜彦の頬の横、数ミリの空間を突き刺すように伸ばしている。もしも、数センチ右であつたら、夜彦の顔は無残にも蜂の巣になっていたことだろう。

「夜彦、するべきことは分かるな？」

「は、はい、ごめんなさい」

震えながら、夜彦は謝罪した。

こっそり学校の塀をよじ登ると、夜彦と葛葉は校庭の脇を通った。校舎の中にはすでに生徒も教師もない時間である。教室は当然ながら、明かりはついていないし、駐輪場にも駐車場にも、停めてある車も自転車もない。

特にだれもないので、そのまま校舎まで走り抜けてもいいのだが、夜彦はあることを思い出す。

確か、夜の構内には、警備員が常駐しているのだ。唯一、守衛室から光が漏れているのが見えた。夜彦たちはそれを避けて、校舎の裏側まで走ると、一階の男子トイレの窓から中に侵入することにした。

そこまで葛葉を案内し、早速夜彦は事もなげに慣れた手つきで窓を開ける。

「お前、ピッキングの訓練でもしているのか？」

不思議そうな顔をして、その様子を見ながら、葛葉が聞いた。

「人聞きの悪いこと言つなよ。もちろん、違うさ。ここはもともと鍵が壊れてるんだ」

苦笑いしながら答える。

「なにしろ、この校舎はずいぶん古いし」

よつと、勢いをつけて、夜彦は窓をよじ登った。転がり込むように中に入る。

そして、振り返って外にいる葛葉に手を伸ばそうとすると、彼女は、軽い跳躍でもって、夜彦の頭上をすり抜け、難なくトイレ内に降り立った。

伸ばしたままの夜彦の手がだらんと力なく垂れる。

「何だよ、かわいくねえな。そういう時は、可愛らしく上目遣いでありがとうつて感謝を述べ、俺に手を伸ばすのが一つのマナーってもんだろ」

「ふん、どこの世界のマナーだ？」

「万国共通、由緒正しき紳士と淑女のマナーさ」

えっへん、と胸を張って答えると、肘で胸を突かれた。

「なら、お前はまず、レディーを待たせないことから学べ」

「うへえ……全く、冷たいなあ」

「そうだな。しかし、夜彦の無駄口につき合っていたら、私のための貴重な夜が終わってしまうんだ。ほら、早く行くぞ」

「へいへい」

夜彦は体についた埃を払って、葛葉の後を追った。

トイレから出て、夜の校舎を走る。幸いにも見回りの人間はいないようで、移動はスムーズに行うことが出来た。一番近い階段を上り、目的地のある三階を目指す。

しかし、さすがに夜の校舎は不気味だ。夜彦はそう思う。

昼間の生徒たちで賑わっている間は、ちっとも怖くなんてないのに、いざ、誰もいなくなると、これほど恐ろしいものもない。

闇に満ちた空間というのは、存在しているだけで恐ろしいものなのだ。何か潜在的に、得体の知れないものを人に想像させるところがあると思う。

だが、それは夜彦にとっては、たまらない楽しみでもあった。

いったいその空間には何がいるのだろうか。いや、何もいないのか。いずれにせよ。

それを覗いてみたいという、どうしようもなく堪えようのない衝動に駆られるのである。それは酷く子供じみていて無邪気な感情だった。

そして、その願望こそが、夜彦を怪談といった摩訶不思議なものに興味を向けさせる。

しかし、そういう夜彦に対し、葛葉は先ほど――。

『お前は異常なのだ』

そう、言った。

果たして、本当に自分は異常なのだろうか。夜彦は自問する。昔から、夜彦は不思議な体験を求めることが好きだった。それを特別おかしいとは思わなかったし、あるがままの自分であることを否定しようなどとは一切発想すらなかった。

だが、それが最初から変だったということなのだろうか。

昼間の少年は、この先の音楽室で、以前一人の生徒が自殺したと言っていた。

もはや、人ではないその存在は、本当に今でも歌を歌い続けているのだろうか。

どこまでも、どこまでも、終わらない旋律の中で、その身をうずめているのだろうか。

その存在は、いつか気がつくのだろうか。自分がもはや生きていく人間ではなく、死んだ人間だと。

他とは違う、全く異質な存在だと。

そして、それに気がついたとき、彼は何を思うのだろうか。

絶望だろうか、悲しみだろうか。それとも再び、人間に生まれ変わりたいと願うのだろうか。このまま跡形もなく消え去りたいと考えるのだろうか。

そんなことを想像していると、夜彦は、なんとなく切ない気持ちに駆られた。

「着いたぞ」

葛葉が言った。

気がつけばそこは既に音楽室の入り口だった。

「ここが、その歌を歌う霊がいるという音楽室だな」

「ああ」

葛葉は躊躇いもなく扉に手をかける。

がらり。戸が開いた。

教室の中はがらんとしていて、誰かがいる気配はない。夜彦は耳を澄ました。どこからか、何者かの苦悶に満ちた歌声が聞こえてくるかもしれないと思ったが、特に何も聞こえない。室内はしんとし

た静寂に満たされている。
となりの、葛葉を見た。

「どうだ、何か、感じるか？」

すると彼女は、

「む？」

と目を動かした後に、ふっと、息を吐き出し、ずいずいと教室の中に進んでいった。どうやら、暗い部屋の様子を見ているようだ。夜彦はあえて、教室の明かりはつけなかった。既に暗闇に目が慣れていくというのもあるし、不用意につければ、警備員に気づかれてしまう可能性があった。

しばらくして――。

ふいに葛葉が、何かに気がついたように窓に近づき、外を見た。そこからは、誰もいない真っ暗な校庭が見渡せた。来るときに見かけた桜並木も見える。

夜彦は再び葛葉を見た。彼女の髪から出た耳先が微かな気配を拾い取るように機敏に動いている。ふわ、ふわ、とうごめく様は、見ていて飽きない可愛らしさがあり、つい、触ってしまいそうになる自分を抑えた。

今はそんなことをしている場合ではない。

と、彼女が教室のとある場所で立ち止まった。

「おっ！」

声を上げる。夜彦はすぐに駆け寄った。緊張が走る。

「どうした、何かいるのか？」
「ふふふ」

すると、彼女は不気味に笑った。

「幽霊の、正体見たり、枯れ尾花。かな」

「なに？」

「夜彦、残念だがこれは外れだ」

「は、外れ？」

「うむ、その少女とやらが聞いたという歌声はおそらく、妖などではない」

妖、じゃない？

その答えに、夜彦は混乱する。

「え、ちょっと待ってよ。じゃあ、その女の子が聞いたっていう歌声って、一体」

「答えは驚くほど単純だぞ」

まるで夜彦を見下すように目元を細めた彼女は目の前の窓枠を掴んで言った。

「え？」

「風の音だ」

「はあ？」

「ほら、ここを見る」

葛葉が指さしたのは、窓枠と窓の間の僅かな隙間だった。

「この窓は建物の老朽化のためか、かなり閉まりにくくなっている。

どうやら、窓枠の方が歪んでいるのだな。そうすると、こんな風に、窓と枠の間にスペースが出来る」

つまりだな、と彼女。

「ここに風が吹き込んで、音が鳴ったのだ。それも、あたかも何者かが歌っているように、な」

「え、ええええええええ！？」

それはにわかには信じられない言葉だった。風の音を人の歌声だと思っただって。

葛葉は、説明を続ける。

「お前は、事件は二日前にあつたのだと言った。あの日、私はいつものようにお気に入りの鳥居の上にいたのだが、特に風が強かったのをよく覚えている。見てみる、ここに、桜の花びらが挟まっている。これはおそらくその日の風で挟まったのだな」

「ああ、そういえばそうだったな。俺も髪の毛がぐしゃぐしゃになったんだっけ」

ぼんやりと思い出しながら、夜彦は頭をさすった。二日前の記憶を辿っている。

葛葉がぼんと手を叩いた。

「まあ、論より証拠だ。私の力で少しでも風を吹かせてみよう」

そう言つて、彼女はその場で軽く両足を広げる。

「夜彦、少し離れておけ」

「あ、ああ」

そして、尾を大きくしなせると、ぶうんと音が出た。ばさりと重量感のあるそれが横に広がり、一枚の扇のようになる。それに見とれていると、

「触るなよ。触ったら十万ボルトの電流を流して、お前を消し炭にしてやるからな」

彼女に釘を刺された。夜彦はさらに後ずさった。

「お、おっかねえな」

「わたしの自慢の尻尾だ。汚されてしまうのはかなわないからな」

それだけ言つて、彼女は目を伏せた。

すると、仄かに彼女の周囲に光が満ちていく。おそらく力を溜めているのだろう。彼女の尻尾が右へ左へ、ふさふさと空気をかき混ぜるように動いた。

そして、

カタカタ、ガタガタガタ――。

小さな地鳴りのようなものが聞こえたかと思うと、遠くの方から一気に校舎に向けて、何かが向かってくるのを、夜彦は感じた。

バリバリと窓ガラスが揺れる。

そして、

「――」

甲高い、風の音が、鳴った。

「――」

「ほら、鳴っただろう」

風が止むと、彼女はしたり顔で聞いてきた。夜彦はこれには頷くしかなかった。確かに、あの窓ガラスの隙間は風によって音を鳴らしたのだ。

それは、動かない真実なのだけれど。

「うーん……」

「何だ、不満か？」

葛葉が眉をひそめる。往生際が悪いな、と舌打ちする。

しかし、夜彦にはどうしても納得できないのだ。

「だって、どう聞いても人が歌っているようには聞こえないぜ」

そうなのだ。夜彦の耳では、どう聞いてもそれは単なる風の音であって、百歩譲っても人間の歌声には聞こえない。甲高い叫び声には似ているかもしれないが、それは、歌っているのではないのだ。すると、それを聞いた彼女は、

「そうだな」

「あっさり認めた！」

これにはさすがに拍子抜けした気分になる。ならば、少女が聞いた歌声の秘密は、以前説明されていないことにはなるのでは、と思ったが、葛葉は語気を強めてこう言った。

「しかし、少女はこれを人の声だと思ったのだ」
「ど、どうしてさ」

当然の疑問だった。

彼女は意味ありげにピンと人差し指を立てる。

「それは簡単な理由だ、夜彦。話によると、その歌声を聞いたという少女は、音楽室から帰ろうとしていた時、何かに『恐怖していた』のだろっ」

「え？」

「夜彦、これは実に重要な点だぞ。おそらくこの少女は、そう思うことによって、自分自身に、一種の暗示をかけていたのだ。『もしかすると、これから何か恐ろしいことが起こるかもしれない』と」

彼女は意味ありげに声をひそめながら喋る。

「つまりだな、ここで問題なのは、風の音がどれだけ人の声に似ているかではなく、彼女が怯えている状況で、何か奇妙なことが起こったかどうかなのだ。そして、この場合、突然、予期せぬ風の音が鳴ったことで、彼女はそれを、幽霊の声だと思ったのだ」
「はあ」

それは要するに、障子に映った木の影を幽霊の手だと思うようなものか。

「まあ、事実ここに来て分かったが、ここには何の気も感じない。ここには妖は存在しない。おそらく、その何十年前に自殺した生徒が本当にいたとしても、魂はこの世界に存在してない」

「えええ！」

「結論を出すと、ここで起こった事件は、単なる勘違いということ

だ」

「そ、そんなあ」

夜彦は膝から地面に体をつけた。そんな夜彦を見下ろして、葛葉が言葉を続ける。

「残念だが夜彦。怪談というものはだ、不透明な流説であるが故に、虚実入り乱れ易いものなのだ。いつでも嘘と真が紙一重。火のないところに煙は立たぬというのが、怪談の場合、火の無いところに煙が立つこともある」

そして、彼女は校庭に咲く桜を見下ろしながら言う。

「花のない場所に、匂いだけが香ることもあるのだ」

それじゃ、自分が嗅いだ怪談の匂いも、偽りのものだったということか。がっかりした夜彦の頭に重々しい葛葉の言葉がのしかかる。

「全ては人の『恐れ』の心が作り出すことだ。そこから実際に新たな妖が作り上げられることもあるが、ここで起こった怪事件には、少なくとも実は無い。人の心が闇を生み、そこにあるはずのない妖を形作つたのだよ」

そして、はあ、と彼女は退屈そうに息を吐いて、こっん、と夜彦の頭を小突いた。

「いてっ！」

「いいか、これに懲りたら、いい加減、むやみやたらに、次から次へと、私のところに怪しげな話を持ってくるのを止める。さっきも言っただが、お前は異常だ」

その言葉が、再び、夜彦の心を抉った。

自分は、おかしいのか。

でも、確かに、彼女の言うとおり、自分は馬鹿らしい。何から何まで見境なく怪談の類を拾ってくる自分は、本当に何も分かっていない子供のようなだった。

「ご、ごめん」

脱力したまま、そう返す。葛葉に申し訳ない気持ちだった。

「ふん、私は最初からこの話の根拠が怪しいと思っていたのだ。全くこれでは、くたびれもうけの骨折り損だな。いつまでもここにいても仕方ない、夜彦、帰るぞ」

しかし、彼女がそう言って踵を返した時、教室に、ふうわりと、花の匂いが香った。

「あれ？」

それを怪訝に思った夜彦の耳に、

「――」

今度は本当に、何者かの歌声が、響いた。

其の五（後書き）

次回、第一話完結です。

其の六

「歌、声？」

そう驚いて振り向いた夜彦の目に、一つの影が映りこんだ。その影は、古びた教室の窓を開け放ち、その歪な窓枠に腰掛けている。そして、機嫌よく伸ばした足をぶらつかせつつ、歌を歌っているのである。

「え！？」

当然ながら、夜彦は驚愕した。

そんなはずは、ない。

ここには、

ここには、夜彦たち以外、誰もいないはずなのだから。先ほどこら教室の明かりを付けていなかったとはいえ、夜彦たちに気取られず、この部屋に入ってくることなど、出来るわけがない。

たとえ、夜彦が気がつかなかったとしても、葛葉がいる。人間ではない、妖の力を持った彼女ならば、暗闇に潜む第三者の気配に気がつかないはずがないのだ。

だとすれば、今、目の前にいる影は何者なのか。

「幽霊？」

暗闇に慣れた夜彦の目はすぐにその人物の容姿を認識した。

その人物はどうやら、この逢間高校の制服を着た少女のようだった。特に姿が半分透けていることもなく、実体を伴ってそこに存在している。

そして、相変わらず優雅に歌を歌っていた。伸びやかに、儚く…

…声が響いている。

それが何の歌なのか、春臣は知らなかったが、どこか淋しげで、か細く消えていきそうな歌だった。

と、そこで夜彦は彼女の顔を見ながら、あることに気がついた。

あれ、見覚えがある。

そう、彼女は昼間、夜彦と共に怪談を聞いていた隣の少女だったのである。

驚いて、口を開けて、

「あ、あなたは！？」

しかし、その言葉に被さって、

「むじな、む、か」

という葛葉の言葉が聞こえた。驚いて振り向く。葛葉の目はまっすぐに窓辺の少女を見ていて、夜彦が見ている人物が幻ではないことを告げていた。

いや、

いやいや、それよりも、

今、葛葉は何と言った？

「む、かだつて！？」

夜彦は驚嘆した。

「む、む、かつて、狐や狸と同じように、人を化かすって言われる動物の妖じゃねえか！」

「そうだ」

事もなげに彼女は言う。

「そ、その、猥が、彼女？」

震える指で夜彦は窓辺の少女を指さした。すると、歌が止んだ。

「」名答よ」

窓枠に座っていた少女が、喋った。夜彦の言葉を、肯定した。

彼女は微笑を浮かべると、ふわりと窓枠から降り立ち、そつと夜彦たちと向かい合った。そして、スカートの端をつまんで上品にお辞儀をする。

「今はご覧の通り、人間の少女に化けてるの。どう、可愛いでしょう？」

急にそんなことを聞かれても、状況に困惑している夜彦は、返事に窮してしまう。

「え、ええと……」

まごついていると、葛葉が先に喋った。

「私の予想通り、やはり、来たようだな」

「え？ やはりって、知ってたのかよ！！」

それはまたしても驚愕の事実だった。

「な、なんで、どうして！？」

しかし、その大声に驚いたのか、葛葉は頭の両耳をすぐさま塞ぐ。ただでさえ人間よりも敏感な白狐の耳の近くで大きな声を出してしまったので、刺激が強すぎたのだろう。彼女の顔が苦痛に歪んでいる。

「——っく。全く、性懲りも無くうるさい奴だ。少しは自重しろと言ったはずだぞ！」

そうして、「えいつ！」とばかりに、夜彦の向こう脛を思い切り蹴りあげた。

「いつつつてええ！」

強烈な痛みには耐えられず、夜彦は足を抱えながら片足立ちで跳ね回った。ひいひい声が出て、涙が出る。全く葛葉は加減というものを知らない。

「馬鹿夜彦！ お前は少しは静かにしろ。でないと説明してやらんぞ」

「わ、分かった、静かにするから。どうして知ってたのか、説明してくれ」

ふん、と彼女は腕組みをして、ようやく落ち着いた夜彦の肩辺りを見る。

「なあに、簡単なことだ。夜彦の服についていたんだよ。僅かに妖力の含んだ貉の毛がね」

「え？」

そう言われてみれば、と夜彦は思いだす。

夕方、葛葉が自分の方を不思議そうに見つめていたことを思い出す。あの時は、夜彦と目が合うと視線を逸らしてしまったが、あれは夜彦の服についていた物を見ていたのか。

「それがまだ新しいものだったから、おそらく、昼間、お前がどこかで知らぬうちに付けてきたのだろ」と私は推測した。そして、昼間といえば、お前は逢間高校にいる時間帯だ。だから、私はこの高校に何か普通ではない、妖の類がいると判断したのだよ」

「ああ、なるほど。それが、気になってたわけだ」

だから、急にやる気になり、今日学校に見に行こうなどと言いだしたのか。

「ふん、まあな」

「あなた、白狐ね」

窓辺に座っている少女、貉が話しかけてきた。葛葉が答える。

「いかにも」

「もしかして、ここはあなたの縄張りなの？」

その言葉に、葛葉は一瞬意外そうに目を見張った。そして、すぐに首を振る。

「いや、縄張りというよりも、私の管轄内、と言った方がいいか」
「管轄？ 面白いことを言うのね」

「そうだ、この町に住む妖たちは全て、私の管轄になる。なにか揉め事が発生したり、危機に瀕した妖たちがいたら救済するのが私の役目なのだ」

すると、それを聞いた貉の少女は不思議そうに目をぱちくりさせた。

「救済役ですって？」

「そうだ。私はこの世ではない、別世界から遣わされた白狐だ。この世とその別世界、幻妖界げんようかいを結ぶ門の守護を任された幻門白狐だ」
「幻門白狐……聞いたことがあるわね」

ふむう、と貉の少女は思案顔になる。記憶を掘り返しているようだった。

しかし、せっかちな葛葉は、詳しく説明してやらない上、彼女が思い出すのも待たずに、そのまま話を進めた。

「さっきの言い方だと、そっちもここに居座っているわけではないようだな」

「うん？」

貉の少女は、思考を止め、すぐに考えを切り替えたようで、

「ええ。私はいろいろなところを巡っているから。同じ場所にいるのは好きではないの」

「特に縄張りを持っていないのか」

「そうなるわね」

「では、居場所を奪われたり、という類の面倒事はないと？」

「もしそんな面倒事があつたら、あなたがどうにかしてくれるの？」

まるで試すような表情で、貉の少女が聞いた。それに対し、葛葉は自信に満ちた顔で答える。

「もちろんだ。私はそのためにここにいる。居場所がなければ、安

全な幻妖界へ案内してやるぞ。その他も出来ることなら支援してやる」

「あら、頼もしいのね。私の知らない内に、こんな便利なサービス屋さんがこの世界に来てたなんて、時代は変わったものね」

ふっと、彼女はため息をつく。

そうして、桜並木の向こう、夜彦たちの住む、町を見た。そこは消えることのない町の灯りが煌々と光っていて、それは常に絶えることなく、闇を、遮っている。

彼女はそれを見て、そつとまぶしそくに目を細めてから、俯いて、目を閉じた。

「困っていることはないわ。私は毎日楽しいもの」

しかし、夜彦には、その言葉の端に、どこか悲しみの欠片があったような気がした。それがどういう物なのか、よく、分からなかったけれども。

そして、それきり、三人が黙ってしまった。なにも動かない沈黙の中で、闇だけが生きて呼吸しているように感じる。どうにも気まずい。夜彦は生唾を飲み込む。
と、

「そついえば、あなた。昼間の教室にいたわよね」

急に貉の少女が夜彦に顔を向けた。いきなりだったので、夜彦はどぎまぎした。

「は、はい」

「またこんな場所で会うなんて奇遇だね。お互い、気が合うのかしら」

「え？」

「二人とも、怪談が好きみたいだし」

そう言つて、彼女はにこりと笑う。その表情には邪気がなく、まるで普通の友人と接しているかのような親近感を、夜彦は感じた。

「そうですね」

と相槌を打った。

しかし、夜彦には疑問がある。そもそも彼女はここに何をしにきたのだろうか。

「あのう、あなたは、昼間の怪談を聞いて、たまたま今日ここへ？」
「そうよ。何だか面白そうだったし」

と、彼女は答えたが、夜彦の表情を見て、驚いたように口元に手を当てた。

「あら、もしかして、私が怪談に登場した、歌を歌う妖だと思ったの？」

「ええ、まあ」

「ふふ、残念だけど、それは違うわ。私は、さっきも言った通り、単なる通りすがりよ。ここに妖が出現したというのは、そっちの推理通り、単なる勘違い。私は何もしてないわ」

「そ、そうですね」

夜彦は声を落として、さらに肩を落とす。やはり、妖などここにはいなかったのか。

「がっかり、した？」

「へ？ いえ、そんなわけないです」

と、慌ててぶんぶんと頭を振った。

「これで明日学校に来たら、歌声が単なる風の音だったって話せま
すし。それに、あなたにも、出会えましたし」

「あら？」

貉の少女が目を丸くして、微笑を浮かべた。

「それって口説いてるの？」

するりと、音もなく近寄ってきて、夜彦の瞳を覗きこむ。突然の
ことに、夜彦は身動きが取れなくなってしまった。

「え？ あ、あ、いやあ、そういうんじゃない、なくて、ですね……」

「夜彦、お前、顔が赤い」

葛葉はなぜかむすりと頬をふくらませている。

「ち、違うんですよ。ただ、ええと、俺は……ですね」

すると、

くすくす……。

気がつけば、貉の少女はとても我慢出来ないという風に、口元を
押さえて笑っていた。

「あ、あれ？ あのう？」

「ふふふ、ごめんなさい。いいわ、答えなくて。私が意地悪なことを
言ったのがいけなかったのね。ちょっとからかってみただけなの

よ」

「は、はあ」

夜彦は赤面したまま、頭を掻いた。ほっと安堵すると同時に、恥ずかしくなる。全く、夜彦はこの手の冗談に、昔から免疫がないので、どう扱っていいものか、いつも困るのである。

自分はどうか、彼女にいいように弄ばれてしまったようだった。

「じゃあ、話を変える意味で、ちよつと私から質問してもいい？」

笑い終わった貉の少女がそう言った。

「は、はあ」

特に構わないので、夜彦は頷く。

「あなたたち、二人のことなんだけど」

「なんですか？」

「あなたたちって、どう見ても普通の人間と妖よね」

「そうですけど。それが？」

「あのね、妖の私から見れば、とても不自然に見えるのだけれど、どうして、人と妖が一緒にいるの？」

彼女は心底不思議そうに目を細めて夜彦たちを見ていた。夜彦は合点がいく。

ああ、そうか。そりゃ、本来、存在的に相反する人と妖が一緒にいたら驚くよな。

「ああ、これは——」

「別に、一緒にいたくて一緒にいるわけじゃない。私は付きまとわ

れてうんざりしてる」

説明しようとした矢先に、葛葉の素っ気ない言葉が被さった。

「お、おい、葛葉。そういう言い方すんなよ。俺はお前のためにいろいろ怪談を聞き集めてるだろ」

「それをお前に頼んだ覚えは無い。何度言ったら分かる。私は静かに暮らしたいのだ」

「お前なあ……俺がいなかったら、今頃どうなってた？ うん？」

「私はお前がいらないほうが、もっと健やかにのびのびと生活していたことだろう」

「な、なにをおおお！」

夜彦と葛葉がそう睨み合っていると、それを見ていた貉の少女はまたしても、愉快げに笑った。

「ふふふふ。あなたたちって面白いのね」

それに対し、

「全然面白くないです」

「全然面白くない」

二人で同時にそう返してしまい、夜彦と葛葉は一瞬それに驚いた後、もう一度睨み合った。

「じゃあ、そろそろお別れにしましょうか」

しばらく三人で昼間の怪談の話に花を咲かせた後、狛がそう切り出した。その表情は満足気で、夜彦は彼女の本来の姿が妖であることをすっかり忘れそうになっていた。まるで、もうすっかり、旧友と語らっているような気がしていた。

彼女は言う。

「私はここに来たら面白いモノに出会えるかと思ってきたけど。これはよっぽど不思議な体験が出来たわね。そう、人と妖が、ねえ……どういう事情なのかは知らないけれど、貴方達は二人で一緒にいるのが似合っている気がするわ」

「なるほど、それは慧眼けいがんだな。それだけ頭のいいあんたなら、私の助けはいらなそうだ」

顔をしかめた葛葉が嫌味たっぷりに言う。それに対しても、狛の少女はにこやかで、くるりと方向を変えると、教室の窓の方へ歩みだした。

「今夜は楽しかったわ。あなたたちに出会えただけでもね……ねえ、あなた」

すると、狛の少女は、首だけ夜彦に向けた。

「はい？」

「あなたは、この世の不思議な事に興味があるのね？」

「はい」

そう答えるが、ちよつと迷ってから葛葉をちらりと見て、

「でも、ちよつと興味があり過ぎかもしれませんけど」

と、今日の失敗を思い出し、苦笑気味に付け足した。
しかし、

「そんなことはないと思うわ」

「え？」

「私は、嬉しいのよ」

彼女は実に軽やかに、明るく、そう言った。その表情には、先ほど、窓の向こうを眺めながら見せた悲しみの気配は、ちっとも感じられなくなっていた。

「まだこの世界にそういう人間がいてくれるのが。本来ならば妖なんて、恐れてくれる方が、普通なのかもしれないけれど。それが、一番いいのかもしれないけれど……」

「……」

「でも、あなたのような人がいてくれてもいい。私はそう思うの。私はね、あなたが気に入ったの。だから、この世の不思議を求めるその心、大事にして、失わないでね」

そう言われた途端、夜彦は心がそつと軽くなるような気がした。

「は、はい」

このままの自分でも、悪くはないのかもしれない。何だか、救われたような心地である。

すると、葛葉が白い目をして貉の少女を睨んだ。

「あまりこいつを迂闊に褒めないで欲しい。簡単に増長する奴なんだ」

「お、俺は増長なんかしないぞ。勝手に決め付けるな」

夜彦が声を荒げると、狒が頬を緩ませる。

「あらあら、また仲の良い喧嘩が始まりそうね。それを見ているといいんだけど、私はそろそろ帰るわ」

「そうだな、それがいい。私もそろそろこの男との不毛なやりとりで飽きてきたころだしな」

夜彦はそれに対し、また言い返そうとしたが、それではもはや本格的に終わりがこない。いい加減に口を閉じた。

そして、窓辺に顔を向けると、狒の少女と目が合った。

「じゃあ、また会えたらいいわね」

一度、夜彦にウィンクをして、彼女は、窓から飛び降りる。すると、ふわりと風にその髪が舞い上がって、ぱっと霧散した。彼女は跡形もなく、風の中に消えてしまったようだった。

後にはただ、桜の花びらだけが宙に舞っている。

もう、彼女は風に乗って、どこかに行ってしまったのだろう。

夜彦は、なんとなく名残惜しい気持ちになって、しばらく窓の向こうを眺めていたが、目を閉じて、ずっと一度深呼吸をすると、葛葉の方に向き直った。

「いい匂いだなあ。桜の匂い」

「む、まあ、そうだな」

すると、タイミングよく、くうっ、と彼女の腹の虫が鳴いた。

「おお、ちょうどお腹も減った」

彼女の眼の色が変わる。どうやら、わがままスイッチがオンになっ
てしまったようだった。

「肉まんでも食いたいな」

そのあからさまな要求に、夜彦はうんざりしながらも、それを呑
む。

「いいぜ。それもまた、おいしそうな匂いがする物だしな」

「私は、そうだな……中華まんと豚まんの二つでいいぞ」

「げ、二つ買うこと前提かよ」

「当たり前だ。学校まで来て、結局のところ全くの無駄骨だったの
だからな。なんならもう一つ追加してやってもいいんだぞ」

「いや、さすがにそれは勘弁して下さい」

「ふふふ、ようし。それでは先にコンビ二で待っているぞ」

「え、おい、ちょっと待てよ。俺を置いてくなって」

急に背を向けて走りだした葛葉の後を追って、夜彦の影は、夜の
校舎に消えていく。

教室には、もはや、誰の影もない。

開け放たれたままの窓から、香しい春の風が吹き込んでいた。

其の六（後書き）

第二話は一ヶ月後辺りの完成を目安に書こうと考えています。
早ければ3月の下旬には更新できるかなー？ あくまで予定ですが。
それでは、また近いうちに会いましょう。ヒロユキでした。

其の一

釜の中から濛々と白い湯気が立ち上っていた。京極秋正は、その様子を無言で眺めながら立っている。

現在の時刻は、夜の十一時。

うどん処「和泉^{いずみ}」が閉店してから、もうずいぶん経っていた。店の中には客の姿はなく、明かりも消えているため、調理場以外の空間は闇で埋まっていた。静かなものである。

さて。

秋正はそこで、今からすべきことを考える。まずは、目の前の釜のうどんが茹で上がるのを待ち、そこで、味見を試みなければならぬ。

それが終われば、もう一度麺を打つ練習をして、それから、片付けをして、後は頭の中でイメージトレーニングだ。

それは、秋正が毎日繰り返している、練習のメニューである。もう、かれこれ数年間、同じメニューを繰り返していた。営業が終わった店内で、ひたすら夜遅くまで麺を打つ。秋正にとって、それは全ては絶品のうどんをつくるための修行だった。周りの人間にそれを話せば、よく続くものだと言われることが多いのだが、今や秋正にとって、それは普通のことであり、毎日学校に行くのと同じように、何の疑問も抱かない日課となっていた。

うどん打ちのことを頭の中でぐるぐると考えていると、ふいに、店の奥の階段から、ひょっこりと父の顔が覗いた。生真面目そうな顔で、額にシワを寄せて、秋正を見ている。

「なんだ、また練習しているのか？」

その声には、感心半分と呆れ半分の気持ちが混在しているように聞こえた。

「うん」

秋正は返事をする。一度だけ父親のいる階段を一瞥するが、すぐに視線を釜に戻す。意識は集中させておかねばならない。

「もう少しで、何かが掴めそうなんだ」

「全く、お前のうどんへの熱中具合には、心底驚くばかりだな」

そう言った後で、父親は夏生をたしなめるように言う。

「頑張ることはいいことだが、あんまり根を詰めすぎるなよ。お前はまだ学生の身だ。うどんに熱中するのもいいが、勉強もおろそかにしないようにな」

そして、階段先の奥のドアを指さしながら、

「それと、風呂が開いてるから、それが終わったら、入りなさい」

「うん、分かったよ」

返事をする、父親の足音が、二階に消えていく、が、それが途中で止まった。

妙に思っていると、どうやら、階段を引き返してきたようだった。

「秋正」

再び、父親が顔を覗かせる。

「何？」

「忘れていたが、調理場のゴミを裏の勝手口に出しておいてくれ。明日の朝、出しに行くからな」

「ゴミ、ね。分かったよ」

秋正は、そつと横目でポリバケツの中のビニール袋を確認した。そつと意識のメモ帳に書き記す。

全部が終わったら、ゴミ出し、と。

そう思っていると、傍らのキッチンタイマーのアラームが鳴った。慌てて、止める。

よし、これくらいで麺が茹で上がるはずだ。

秋正は麺の固さを確かめるために、箸で一本すくった。

全ての練習が終わると、秋正は調理台の片付けをした。汚れてしまった食器や調理具をスポンジで洗い、台に立てかける。換気扇を切って、流れっぱなしになっていた水道の蛇口を止めた。

ふつ……これでやるべきことは全て終わっただろうか。

パンパンと手を払い、汚れたエプロンを外す。すると、同時にそれまで引き締まっていた気持ちがふつと緩んだ。急に眠気が襲ってくる。

時刻は既に夜中の一時だった。

風呂に入れと言われていたはずだが、どうにも面倒くさい。明日の朝でもいいか。

そう考えた秋正は、ゆつくりと調理場を後にしようとして、そこで、あることを思い出した。

そうだ。ゴミを勝手口の外に出しておかなくちゃ。

父親にそう言われていたのだった。それを忘れてはいけけない。秋正は階段に向かいかけた足を再び戻して、ゴミ袋を掴み、調理場の奥にある勝手口のドアノブを捻った。

暗闇に包まれた外の通りに人気はない。ぽつぽつと闇を遮る外灯が道に沿って並んでいるだけで、何とも言えない雰囲気漂っていた。

うーん、静かな夜だ。人々の喧騒はちつとも聞こえない。

ま、深夜だし、それもそうか。

秋正はそこで深呼吸を一度し、ドアの傍にゴミを置いて、そして中に戻るうとした。

しかし――。

振り返る瞬間、何かが視界の端に映った。驚いて、もう一度、その方向に目をやると、そこには、誰かが、いた。

暗闇でぼんやりとしているため、よく分からないが、草臥れた青いシャツを着た、中年の男性らしき人物である。

道の端にしゃがみ込んで、何かを、している。

こんな時間に、妙だな。秋正はそう思う。

人気のない、こんな場所で。

普通に考えれば、そんな人物は十中八九、不審者だろう。秋正のいる場所から見ると、警察に通報しなければならないほどのことを、しているようには見えないが、あまり近づくべきではない。

しかし、だとしても、一体何をしているのだろうか。

気になった秋正は、数歩、その人物に近づく。それでも尚、危険な空気は感じられなかったので、そのまま、その人物につかつかと歩み寄ってみた。

一度、声をかけてみよう。

しかし、その人物の肩に手を伸ばしかけて、気がつく。その男性が、何か小さな声でぶつぶつとつぶやいているのだ。

「ない……ない……ないなあ……」

「あの、何が無いですか？」

秋正はその人物に声をかけた。

すると、男性はそれに気がついたようで、おもむろに立ち上がる。そして、無言のまま、まるで首の骨がないように、ぐにゅりとねじ曲げるように、顔を秋正に向けた。

「え？」

秋正は、その瞬間、前髪の間から覗いた、その人物の顔を、見た。凝視した。

その顔は、なんと、その顔は――。

それは、京極秋正の身に起こった、ひとつの怪事件である。

其の一（後書き）

現時点の予定では、次回は二日後となっております。

其の二

春の日の放課後のことである。

八守中夜彦は自宅から少し離れた町の中通りにある、とある小さな店を訪れていた。

うどん処「和泉」と暖簾のかかったその店は、夜彦がたまに向かうことがある、馴染みの場所である。

近所の住民からもおいしいうどんという事で昔から名を知られているその店は、うん十年という歴史があるということで、全体的に魅力に欠ける古びた店ではあるものの、その安定した味の良さから、客足の途絶えることのない人気を維持している。

夜彦はそのカウンター席に座っていた。

「ふう、ふう、ふう……」

熱い湯気の上がる麺に息を吹きかけながら、一気にうどんを啜る。もっちりとした何ともいえない腰のある麺が喉を通り抜けていく。うむ、いつもながらに絶品である。

ふと、目を横にやると、夜彦の隣には、どこか異質な雰囲気を感じた、一人の少女が席に座っていた。流水の輝きのごとき美麗な銀髪に、白くふんわりとした古風な印象の水干を着ているその少女の名は、葛葉と言う。

あまりおおっぴらに公表出来るわけではない彼女の正体は、実は人ではない、妖と呼ばれる存在である。今でこそ、彼女は人間の姿をしているが、本来は白い毛並みをした白狐なのだ。

ちなみに、妖とは、闇に生き、不思議な力を操る者たちのことであり、怪異、物の怪、妖怪、などという別称でも世に広く知られている。彼らはその昔、人々とともにその縄張りを争い、それでいて

共生をしていた存在なのである。

しかし、昨今は急速に発達した人間の文明の力によって、その勢力を失い、すっかりその数も減らしているのが現状だった。

そのため、白狐である彼女は、別世界（正確に言えば、幻妖界と呼ばれる場所）からこの地に舞い降り、人と妖のバランスを図るという極めて重要な使命を帯びているのだ。

が、当の彼女は、現在、夜彦と同じように店のカウンターにおいて、暢気にも、うどんを啜っている。そう、暢気にも。

つい数十分前、学校からの帰り道、いつものように夜彦はちよつと神社に寄って、葛葉の様子を見た後、去り際にこのうどん屋に行くと言つと、暇を持て余していたらしい彼女は、嬉々としてついてきたのである。

これが過激な職務に、ほんのひと時だけ訪れる心やすまる休息というのならば、理解できるものであるが、彼女の場合、万事が万事この調子で、妖の調査などの基本的な仕事をまともにする気もなく、お気楽に人間の世界を楽しんでいるのだから、呆れてしまう。

夜彦はこのため、やる気のない彼女を日々刺激しつつ、彼女の代わりとなつて、妖と人に対する危機的な意識を持たざるを得ないのが常である。

少なくとも、夜彦は自分ができるだけ彼女の隣にいて、そうあることが自分の使命であると思つている。

毎日のように怪談話を彼女のためにこここで聞き集めてくることも、その一環だった（そもそもそれ自体が、夜彦の個人的な趣味であるという事実も否めないが）。

しかし、その一方で、そんな夜彦の不安に満ちた胸中の苦悩など、まるで気がつく様子などなく、なんとも言えない至福の表情で、葛葉は油揚げに食いついている。

ちなみに彼女が頼む品物はいつも決まっていて、きつねうどんだった。

その理由については、言わずもがなだ。

ところで――。

そもそも、一体全体どうして、夜彦がこのような妖の少女と接点を持つようになったのか、という事態の成り行きについては、物語を進める上で、大いに重要で且つ、早急に語るべき事柄なのだろうが、それは後々に話すこととして、今は置いておこう。

「うーん、やっぱりうまいなあ、ここのうどんは」

しばらくして、うどんを食べ終わり、夜彦は器を置きながら言った。

「全国、いや、世界に通用するレベルといっても過言ではないね」

すると、カウンターの向こうから、少年の顔が覗く。

「毎度、どうも」

そう頭を下げた彼は、夜彦と同じクラスで、友人の京極秋正という少年だった。

「いつも来てくれてありがとうね」

彼は夜彦からの褒め言葉を喜んでいいのか分からない無表情で、そうお礼を言った。もしかすると、怒っているのではないかと普通の人なら勘違いされるのだろうが、夜彦は知っている。

彼は元来、あまり感情を表に出さない人間なのだ。何をしたって、能面のような顔のまま、ぴくりともしないものだから、周りでは不思議がる人間も多い。

しかし、表情は変わらないものの、自分の言葉は喜んでくれてい

るはずだ、と夜彦には分かっていた。

何しろ、夜彦と秋正の関係は、もう長年続いており、彼が何を思っているのかは、その極端に薄い感情表現からも夜彦には、全て感じ取ることが出来るのである。

仲が良いから、こうして、暇があれば放課後に遊びに行く感覚で、よくこの店を訪れる。

そういえば、最近はこのように葛葉を伴っていくことも増えているのだが、もちろん葛葉の正体については、夜彦以外は知らない。彼には、葛葉が、夜彦の友人だということ、ふんわりとオブラートに包んだ説明しかしていないのが現状である。

「秋正、そう言えばさあ」

夜彦は、隣の葛葉が食べ終わるまでの時間を秋正と雑談しながら待とうと、いつもの調子で、彼に話しかけた。

「おとといの数学の小テストの結果、どうだった？」

「小テスト？」

「ああ、俺さっぱり分からなくてさ、適当に書いて出したら、後で先生に呼び出し食らってさ、追試を受けろって言われて。お前はどうだったのかなって思ってたさ」

「ああ、僕も、ちょっと……」

と、苦々しい反応が返ってくる。

「悪かったのか？」

「うん、途中で寝ちゃってね」

「寝た？ テスト中にか？」

これには、夜彦も驚いた。

「お前って、勉強は得意そうじゃないけど、そんな不真面目な奴だったか？」

「ちよっと、寝不足でさ」

彼は苦笑いをしたのか、鼻を少しだけ動かして、夜彦を見た。

「寝不足？」

「そうそう」

そこで口を挟んできたのは、レジ台に座っていた、秋正の母親だった。彼女は無表情で何を考えているのか分からないと揶揄される秋正に、本当に半分遣伝子が行き届いているのかと疑問を抱いてしまっほどにさっぱりハキハキとした性格の女性である。

「この子、よく夜中までうどんづくりの練習してるのよ。知ってるでしょう？」

その母親が言う。

「ああ、それで」

「それが、ここ数日は何かあったのか、うどん作りにますます熱が入っちゃったみたいで、毎日朝方まで練習してて、困ってるのよ」

「それでいつもよりさらに寝不足に？」

訊くと、秋正の母親は困ったように額に皺を寄せた。

「そうなの。ねえ、夜彦君、何か言ってあげてよ」

「え、ええと、そうですね。勉強は学生の本分。それをおろそかにするようではいかんぞ、秋正君」

「テストを適当に書いて投げ出しているお前が言っても、これっばちも説得力はないがな」

「う、うう……」

葛葉に痛いところを突かれた夜彦は、へなへなとカウンターに突っ伏した。

それを見て笑った秋正の母親は、用事が出来たのか、調理場の奥に消えていく。

しばらくして、夜彦は疑問を口にした。

「っていつか、秋正」

「うん？」

「何で最近、そんなにうどん作りに熱が入ってるんだ？ そりゃ、今までだってうどんの修行してたのは知ってるけどよ」

彼がいつかは両親の店を継ぐ、という高い志があることは夜彦も知っていた。

すると、

「え、ええと、それは……」

彼はもごもごと口の中で言葉を転がしている。

何とも釈然としない。妙だな。

と、そこで夜彦は、彼の辺りから漂ってくる、妙な匂いに気がついた。

あれ、これって、もしかして？

「あ、葛葉ちゃん」

急に、明るい声で秋正がそう呼んだ。

「うん？ 何だ、秋正」

きつねうどんを食べ終わったのか、満足そうに腹をさすっている葛葉が顔を上げる。

「実はね、僕が作った新作のうどんがたった今出来上がったんだ。もし良かったら、食べてみてくれない？」

「新作のうどん？ いいぞ！」

子供のように興奮して、葛葉は目を輝かせた。

「うん、これはタダでいいから」

そうして、彼がカウンターに置いた器には、色とりどりの具が散りばめられた豪華なうどんだった。油揚げが好きな葛葉のためか、通常一枚のところか、二枚入っている。

「おお、これはまた豪勢だな」

「ぜひ、食べて感想を聞かせて欲しいんだ」

「了解だ。こんなに旨そうなうどん。遠慮無くいかせてもらうぞ」

ずるずると、周りをはばかりことなく、彼女は豪快に麺を吸い込んでいく。

しかし、その間も、夜彦はカウンターの向こうにいる秋正だけを見ていた。

「なあ、秋正。お前さあ……」

「うん？」

「最近、何か妙なことがあったんじゃないか？」

「妙なこと？ 何のことかな？」

「例えばだが、お化けに、会ったとか」

「……」

急に、秋正は口ごもる。夜彦はピンと来た。鼻がムズついたのである。

「図星か？」

「うーん、まあ、多分ね。母さんたちには話ただけど、信じてもらえなくて」

なるほど、それで、怪談の匂いが彼からしたわけだ。

「おい、それを聞かせてくれ」

夜彦はカウンターから身を乗り出した。怪談と来れば、黙っているわけにはいかない。

「そんな必死にならなくても」

「聞かせてくれるのか？」

「い、いいけど」

数日前のことなんだ。

と、前置きして、彼は話し始めた。

其の二（後書き）

以降、二日間隔で更新する予定でございます。しかし、あくまで予定なので、急遽更新日時を変更することがあります。ご注意ください。

其の三

僕はその日、夜中までうどん作りの練習をしていたんだ。

あの時は、確か、夜中の一時だった気がする。もうだいぶ時間が遅くなっていたし、たっぷり練習して疲れていたから、寝ようと思つて、調理場を出ようとした。

けれど、そこで勝手口にゴミを出しに行くのを父さんに言われたのを思い出したんだ。

あそこにゴミを置いておかないと、明日の朝、収集場に出しに行くのを忘れてしまうからね。

だから僕は、眠いのを我慢して、外にゴミを置きに行つただけ
れど、

そこで――。

一人の人物に出会つたんだ。

もう夜もすっかり深まっている時間帯だったし、僕も変だと思つただけけれど、その人物は、電柱の脇に前かがみになってしゃがみこんでいて、必死に何かを探している様子なんだ。

こんな夜中に、酔っ払つて財布でも落としてしまったのかと僕は考えてさ。もし、良ければ一緒に探してあげようと思つて、それでその人に近づいていった。

すると、案の定、その人物は小声で、

「無い……無い……無いなあ」

そうつぶやいている。

僕はその人の肩を叩いた。何を無くしたのか、訊ねようとしたん

だ。

するとき、その人が立ち上がって、僕の方を見たんだ。
そしたら、

その人の顔、のっぺりした卵みたいな顔でさ。

なんと、目も耳も鼻もなかったんだ。

口だけはあるんだけれど、それ以外のそこにあるべき顔の
パーツが全然見当たらなくてさ。

そして、

「目と耳と鼻を無くしてしまったんです」

って言うわけさ。

だから僕は彼に、

「一緒に探しましょう。どこら辺に落としましたか？」

って――。

「そこは驚けよ――！」

話の途中に、夜彦の突っ込みが割って入った。

「え、え？ 何が？」

面食らっている秋正を尻目に、夜彦はバンバンとカウンターを叩く。

「そこは普通、悲鳴を上げて驚くところだろ！ お前、驚かなかったのかよ」

「それは、まあ、びつくりはしたけれど」

「なら、驚くべきだ。お前のその口は何のために付いてるんだよ。悲鳴を上げるためだろうが」

「そんな極端な……っていうかさ、驚くって、どう驚けばいいのかな？」

「え？」

急に真顔で秋正がそう聞いてきたので、夜彦は焦った。

「ええと、そうだな。うぎゃああああ、とか、ちょえええええ、とか」

「う、うぎゃああああ」

相変わらずの無表情のまま、秋正は夜彦の真似をしてみせる。それは評価するにも値しない、何ともぎこちなく、さらにわざとらしく、間の抜けたリアクションだった。

夜彦は嘆息する。

「あのなあ、今頃そんなリアクションしてどうするんだよ。その場じゃないと意味ないの、その場じゃないとー！」

「うーん、面倒な世の中だね」

「つたく、妖に対する礼儀がなっていないんじゃないか？」

「れ、礼儀って……そういう問題なの？」

「そついう問題なんだよ」

夜彦は肩肘をついて、口をむっと突き出す。

まあ、秋正のリアクションの鈍感さはこの際、横に置いておいて……。

また、妖かと夜彦は思う。

しかも今度は、つい先日のもの（音楽室の幽霊事件）とは違い、正体はつきりしている。

のっぺらぼう、ねえ。

これは言わずと知れた、とても有名な妖である。

よくある話としては、まさに秋正が体験したように、真夜中に、人通りの少ない通りの角で、しゃがみ込み、物を探している人がいる。

その人物に声をかけると、なんとその顔には、目や耳といった、人間の顔にはなくてはならないパーツが無く、それを見た人間はとても驚いて気絶してしまうのである。

その妖に、秋正はこの町で出会ったのだ。これは十分に、検証に値する事例ではないだろうか。

そこで夜彦は隣で、相変わらずうどんをおいしそうに啜っている妖の少女に顔を向けた。

「つで、葛葉はどう思う、今の話」

「うっつ?」

彼女はうどんを口に入れたまま、夜彦を向いた。その顔は楽しい食事の時間を邪魔するなという怒りに満ちているようだったが、ふん、と一度鼻を鳴らすと、うどんを噛み切って、口を開けた。

「別に、私は今の話からでは、どうということもないと思うがな。意見は特にないぞ」

どこかつんけんした言い方なのが夜彦の癪に障る。

「おい、俺のクラスメイトが妖と遭遇してるんだよ。調査が必要だろっ」

「調査？ お前はいつも二言目にはそれだな」

葛葉は箸を置く。

「いいか、落ち着け。今回の事件は、秋正が数日前の夜にのっぺらぼうと出会った、ただそれだけの話だろう。これだけ分ければ、調査資料としては十分だ」

「お、おい。それは職務怠慢ってやつだろう。伝聞の情報だけで、きちんとした実態を把握せずに決め付けるのは、あまりにもいい加減じゃないのか？」

「職務怠慢？ あのな、我々の中では、人間たちのようにしち面倒臭いがんじがらめにされた仕事上のルールなど存在しないのだよ、夜彦。はつきり言って、ただ妖が出たからといって、馬鹿正直にいちいち現場に向かうなど愚の骨頂だな。わざわざそんなことをしていたら、身がやつれてしまうぞ。私が本格的に動くのは、人と妖の間のバランスが大きく崩れた時だけでいいのだ、分かるか？ それに、お前だってこの前学んだだろう？」

「あん？」

「先日の学校の音楽室での件だ。忘れたとは言わせんぞ。私にあんな無駄足を踏ませおいて」

葛葉が夜彦に睨みを利かせる。これにはさすがにぐうの音もでなかった。確かにあの一件では、夜彦があれだけ大口を叩いておきながら、結局、事件と妖の関与を匂わせる証拠は、何一つも見当たらなかったのである。今思い出しても、面目ない。

と、そのやりとりを不思議に思ったのか、秋正が口を挟んできた。

「あの、さつきから二人とも何の話をしてるの？」
「い、いや、こっちの話だよ」

夜彦は一瞬ヒヤリとする。葛葉が白狐であることは、他の誰にも秘密なのだ。

「ところで、秋正」

器から顔を上げて、葛葉が言う。

「うん、なんだい？」

「私は、この男の余計な突っ込みによって遮られたお前の話の続きが聞きたいんだがな。そののっぺらぼうに驚かなかったお前は、その後どうしたんだ？ いろいろ検証するのは、それからでも遅くはあるまい」

「続きかい？」

「そ、そうだ、俺もそれが気になっていたんだ！」

と、夜彦は慌てて指を鳴らす。

「ふん、調子がいい奴だ」

「で、秋正、お前は本当にそののっぺらぼうと顔のパーツを探したのか？」

夜彦が訊くと、秋正は首を振る。

「いや、違うよ。二人とも興味があるなら、続きを話すから……」

そうして、再び、話をはじめた。

其の四

「一緒に探しましょう。どこら辺に落としましたか？」

秋正がそう話しかけると、のっぺらぼうは大いに驚いたようだった。

時が止まるとは、まさしくこのことを言うのだろう。

上から襲いかかるように両腕を宙に広げ、秋正の上に黒い影を落としたのっぺらぼうが巨大に口を大きく開けたまま、動きを止めているのである。それが、秋正には、落ち流れてくる滝の水が宙でその場に留まり、固まってしまったような不自然な印象を与えた。

同時に、まるで体に覆っている感情の糸が全て解けて、酷く現実感を喪失するような感じがする。

分かりやすく言うと、秋正は目の前ののっぺらぼうに対して、今更ながら恐怖したのである。

本来であれば、数テンポ前にそう感じるのが普通であるのだろうが、元来、秋正には、人と比べて感情の到着が遅いところがあり、その実感にこのようなタイムラグが生じることが多々あった。ちなみにそれが、秋正が感情の発露が薄いと思われる一つの原因でもある。

ともかく、そんな虚脱感に襲われた秋正は、急に、もしかすると、自分が奇妙な夢を見ているのではないかと直感した。

本当の自分は今も調理場にいて、台の上でぐうぐうといびきをかいて眠っているのだ。そんな妄想が瞬時に膨らむ。

全く、暢気なものだ。それから、うどんを作っていて眠ったのならば、うどんの夢を見ればいいものを、どうしてこんなものを見ているのだろうと能天気にはんやりと思う。

しかし、それは夢ではなかった。

眼前ののっぺらぼうはそのまま幻の露と消えるのではなく、確か

に、今も存在しているのだ。

すると、ふいに目の前で今にも襲いかかるうとしていたのっぺらぼうが動き出した。

そうして、何をするのかと思っていると、いきなり、大きく体を仰け反らせて、彼は笑いだす。

「がっはっはっは」

と、勢いよくバシバシと夏生の背中を叩いた。

「こりゃあ、肝が座ったにいちやんだ」

その力があまりにも加減を知らないので、危うく秋正は向こうの電柱のあたりまで吹き飛ばされそうになる。

踏ん張りながら、答えた。

「い、いえ、まあ」

すると、そのっぺらぼうは秋正の顔をぐつと覗き込んできて、「ぐわばあ」と口を開いてみせ、不気味ににんやりと笑った。

「はは、兄ちゃんは、おいらが化物だってこと、分かってるんだろ？」

「はあ、やっぱりそうなんですか？」

「そうさね。おいらが、言わずと知れた目鼻の無い妖、のっぺらぼうだよ」

そうして、自信あり気にポンと胸を叩く。と思つたら、なぜかそこでモーションが止まり、のっぺらぼうは気が抜けたように立ち尽くした。それまでの貫禄のある立ち振る舞いはどこへやら、急にど

こか雨にぬれた子犬のような侘しさを秋正は感じた。これには、それまで抱いていたのつぺらぼうに対する恐怖がすっかり失せ、

「あの、どうかしたんですか？」

と、思わず、秋正はそう訊いていた。

すると、のつぺらぼうはうつむきつつ、ちらりと秋正の方を見て、

「うん、いやね、別になんということもないんだよ。ただ、ちょいとおいら、悲しくなっちまったんだよ」

「はい？」

「自分で言わずと知れた妖なんて、声高に言っておきながら、こんな兄ちゃんも驚かせなくなっちまったのかと思うとね、何だか、急に寂しくなっちまったのさ」

そうして、彼は見えない涙でも拭くように、腕で顔をこすり、ぶつぶつと呟く。

「最近はず、どこにも行くあてなんてなくなちまったしよ。ぶらぶら歩き回るばかりで……久々に驚かしてやろうと思ったたらこれとはな。まあ、仕方ねえよな。昔からワンパターンの驚かし方だし。こんなんじゃ、今時赤ん坊だって泣きやしない。はあ、こりゃあ、一族の恥だな」

「ええと、どういうことでしょう」

秋正には彼が言っていることがよく分からない。

「ハハ、兄ちゃんには関係ねえよ。とにかく、済まん、いきなり驚かせて……邪魔にならねえように向こうに行くからさ、安心して帰ってくれや」

そうして、彼は微笑んだつもりなのだろうか、少し口角を上げて会釈をし、くるりときびすを返すと、道の端をとぼとぼ歩いて行く。その背中がどこか寂しい。

「はあ、しかし、困ったなあ。もうすっかり行く宛もなくなっちゃまったし。これから、どうするかな」

と、まるで、職をなくしたサラリーマンのようなことを呟いていてるものだから、秋正も気になって追いかけた。さすがにのっぺらぼうと言えど、これほどひ弱な背中を見せられては、放っておけない。

「あの、僕に出来ることがあれば、言ってくれませんか？」

肩を叩いて、問いかけた。

すると、のっぺらぼうは、頭をぐうわりと半回転逆に捻り、秋正を見て、一瞬啞然としていたが、急に表情を綻ばせた（ように見えた）。

「何？ 兄ちゃん、おいらの力になってくれんのかい？」

「ええと、その、はい」

「ほ、本当に、かい？」

「ええ」

秋正は頷くが、本当は、つい勢いだけで言ってしまったことで、もしかすると、言うべきではなかっただろうか、と少し後悔し、

「僕に出来る範囲なら、ですけど」

と慌てて付け加えた。
のっぺらぼうはそれを聞いて、

「そうだよなあ。おいらは妖で、兄ちゃんは人間だし。頼めることは限られるよなあ。まさか、おいらの住処を探してもらうわけにもいかなえし……うん？」

すると、彼は急に何かに気づいたように、ぴくんと体を揺らし、まるで見えない鼻で物を嗅ぐように、くんくんと頭を動かした。

「もしかして、兄ちゃん。この匂い、うどんじゃねえか？」

「は、はい。そうですが？」

「もしかすると、そのうどん屋をやったりするかい？」

まさにその通りだったので、秋正は頭を上下に動かした。のっぺらぼうはそれを見て、期待に満ちた表情になり、

「じゃあ、すまねえけど、ちよっくらうどんをごちそうになってもいいかな？」

と、そう言った。

「それで、お前、そいつにうどんを食わせたのか？」

夜彦は何ともあきれ果てた様子で訊ねた。妖の存在にそれほど動じない秋正も秋正だが、人間を頼ろうとする妖というのも、おかし

なものである。今までそれなりに妖の話はいくつも聞いてきたが、これほど妙な話は聞いた試しがない。

「うん」

すると、秋正は素直な子どものように頷く。自分の行いに対して疑問などは持っていないようだ。

「タダで？」

と訊くと、

「まあ、困っていたみたいだし」

こう言う。

「はあ……」

夜彦がため息を吐くと、秋正は再び話の続きを始めた。

其の五

二階で眠っている両親を起こさないよう、秋正は店内の明かりを静かに付け、手際よく調理具を取り出すと、のっぺらぼうを席に座らせて、うどんを作る支度を始めた。

先程まではすぐにでもベッドに潜り込みたいほど睡魔に襲われていたはずなのだが、今はただ、この奇妙な状況に頭が混乱しているのか、目はすっかり覚めている。

さっそく調理に取り掛かるが、うどんが出来るまでの時間を待たせているというのも手持ち無沙汰にさせて悪いので、秋正は冷蔵庫にあった残り物の惣菜を取り出し、のっぺらぼうに差し出した。

「兄ちゃん、悪いね。いろいろ気を遣わせちゃって」

のっぺらぼうは、ぐるりと店内を見渡した後、箸で漬物をポリポリと食べつつ、そう言った。

「いい店だなあ。こりゃあ、お客さんがたくさん来てくれるんじゃないかい？」

「そう見えますか？」

「へへ、おいらはさ、こう見えても、うどん屋に目がないのよ」

としみじみと言った後で、思い出したように、

「ああ、文字通り目はないんだけれどよ」

などと言う。

これは何かの冗談なのだろうかと秋正は思い、笑うべきか否か、迷ったが、なんとなく「そうですね」と返事をしただけだった。

こういつ時どついう風に接したらいいのか、いつも秋正は迷い、中途半端なことをしてしまうことが多い。おそらく、周りに無愛想に見られるのも、こういう理由なのだろう。

しかし、のっぺらぼうはそんなことはどうでもいいのか、そもそも先程の言葉にユーモアの含みはなかったのか、構わず話を続ける。

「おいらはさ、さっき言った通り、妖だからよ。人を驚かすのが、言わば商売なわけさ。いろんなところを渡り歩いてさ、夜な夜な人を驚かすんだ」

「はあ……」

「まあ、昔っから、いろんな奴を驚かしてきたよ。別嬪な嬢ちゃんに、威張り腐った頑固じじい。兄ちゃんくれえの子供に、関取みてえな大男もおどろかしたっけな。あんまりビビってチビった奴も大勢いたもんだ……」

くっかっか。

大口を開けてのっぺらぼうは痛快に笑った。どうやら自分の武勇伝が披露できて、かなり気分が良いらしい。

「勢いがあるときなんてな、一晩で三十人くらいを驚かせるのはザラだったぜ。こっちの長屋でやったら、隣の横丁って感じでよ。あつちで女が叫べば、こっちで男が倒れるってな塩梅さ。おいらが行くとこ歩くとこ、片っぱしから悲鳴が上がるってなもんで、仲間内じゃそれなりに評判だったもんだ」

が、そこまで話して、急に我に返ったのか、萎むように彼は口を閉じた。

「おっと、いけねえ。いつの間にか自慢話に脱線しちゃった」

とぼりぼりと頭を搔く。

「すまねえ、おいらの悪い癖なんだ。こんなこと、人間の兄ちゃんが聞いても楽しくねえ話だったよな、ごめんよ」

「い、いえ……」

「まあ、ともかくよ。いろんな奴を驚かして渡り歩くわけだから、いろんな店にも行くわけよ。そんな中でもおいらは殊更うどんが好物だよ。新しい町に来れば、絶対にうめえ店を見つけに行くのさ。日本全国津々浦々ってな感じでな。ああ、もちろん、正体がバレねえように人間に変装してさ」

それを聞いて、秋正は麺を切る手がたと止まった。

「そんなに、うどんが好きなんですか？」

「ああ、そうよ。おいらのうどん好きは仲間内でも右にでるものはいねえと言われてるくらいだ」

のつぺらぼうは自信満々に頷き、秋正はごくんとつばを飲み込む。つまり、それは、こののつぺらぼうが、それだけうどんに舌が肥えているということである。そう思っただけでちやうど冷や汗が垂れ、俄に手のひらに緊張が走った。

果たして、そんな人物に対して、自分の作ったうどんなどで満足してもらえるのだろうか。それなりに秋正もうどん作りについては修行を積んできたつもりではあるが、それ故に、自身がまだまだ未熟者であることも熟知している。だからこの不安が秋正の中に生まれていた。

だが、この場合、のつぺらぼうの方だって、ただうどんが食べただけで飢えを満たされればそれでいいのだろうし、上等なものを要求しているわけではないのだから、気にすることは無いという考えもあるだろう。

けれど、それでも、一度意識してしまった以上はもはや、無視出来ない。さあ、いよいよ手の先が震える。

しかし、ちょっと待てよ。と秋正はもう一度頭を捻った。

それはもしかすると、これは、これまでの自分の修行の成果を見るためのいい機会ではないか？

何しろ、こののっぺらぼうは全国のうどんを愛し、またそれらを食べ歩いている、言わばうどんに関してはプロフェッショナルらしいのだ。

それは簡単には満足させることの出来ないうどん通であると同時に、裏をかえせば、いまいち自信を持てない秋正にとって、これ以上ないアドバイザーになってくれるかもしれない。そう思うと、秋正の目に力が入った。

しばらくして、完成したうどんを出すと、のっぺらぼうはうずうずしたように、手を叩いた。

「おおう、久しぶりだな、この匂い」

一瞬でも待てる気がしない様子で、割り箸を器に入れると、熱いままでうどんを囓り込んだ。

その様子を秋正は息を吞んで、見守った。

「あの、どうですか？」

つい、待ちきれずに、そう訊いた。

「おう、こいつはなかなか……うめえうどんだ」

のっぺらぼうは麺を切らずに、ずるずると吸い込んでいる。

「兄ちゃんが作ったんだよな」

「はい」

「その歳でこの味はてえしたもんだよ」

「おいしい、ですか？」

「ああ、うめえよ。こうつるつるっと食べちまう」

久しぶりのきちんとした食事だったのか、のっぺらぼうはとても嬉しそうだった。

しかし、秋正はそんなのっぺらぼうを見ながら、どうしてもさらに自分の評価を確かめてみたい気持ちになる。我慢できずに聞いた。

「これまで食べてきたうどん屋の中ではどうでしょう？」

「うん？ それはどういうことだい？」

「僕の腕前を詳しく評価していただきたいのです」

すると、うどんを啜っていた彼の手が止まった。おもむろに顔を上げる。

「なるほど、正直にどれほどのものか、言えってかい？ 確かにおいらは、味について、それなりに口うるさいつもりだが」

「はい、僕は将来、この店を継ぐつもりでいますから。正直なご意見を窺いたいです」

「と言っても、そんな偉そうなことを……おいらは、ごちそうになつてる身だぜ」

のっぺらぼうはそう言って遠慮しようとするが、秋正は首を振った。

「構いませんから、どうか、聞かせてください」

すると、この熱意には勝てないと思ったのか、のっぺらぼうは最

後のうどんをずりりと吸い込んだ後、しばらく沈黙したまま、腕を組んでから、口を開いた。

「そうさなあ。正直な話、味について言いたいことはある。なんていうか、兄ちゃんのうどんはちょっと雑な感じなのさ」

「雑、ですか……」

何かしら批判めいたことを言われることはもちろん覚悟していたが、やはり面と向かって言われるとショックだった。

雑、かあ。

決して、そんな風に作っているつもりはないのだけれど。

「いやいや、別に作ってる動作が乱れてるとか、そういうことを言いたいんじゃないのさ」

「というと？」

「うめえうどんが作りてえって気持ちほさ、痛いほど伝わってくるのよ。おそらく、兄ちゃんがうどんに掛ける魂の熱さってのはこういうもんなんだろうってな。けどな、もちろんそれだけじゃうめえうどんは作れねえ。その魂の主張が強すぎて、いろんな素材がよう、好き勝手散らばっちゃってるのよ」

のっぺらぼうは身振り手振りを交えて言う。

「ここにな、ホースがあるとするだろう。何もしいまま、水をだらだら流してみりゃ、水は下に落っこちるまでだ。しかし、こう、ホースの先っちょを指でつまんでみるとどうだい。勢い良く遠くまで飛び出さるう。水の量は変わらずとも、力がまとまってるおかげだわな。うめえうどんってのは、そういうところが分かりやすいわけよ。こう、食った瞬間に心に味がぶつかってくんのだ」

「ハア……」

確かに、言われていることはよくわかる気がする。つまり自分のうどんは、その力が散漫になっているというわけだ。味の統率性がないということだろう。

「抽象的なアドバイスで済まねえな。しかしよ、うめえうどんってのはさ、作り方は一つじゃねえからよ。俺がここであれこれ細かく口を出しちまうのは、遠慮してんだ。それは兄ちゃんが修行する上での創造の芽を摘んじまうことにながちまうしな。まあ、兄ちゃんは若い。うどんの道を極めるまでにはたんまり時間があることだし、じっくりこれから、兄ちゃんの中で答えを見つけるといい」

それだけ言って、のっぺらぼうは箸を置いた。食べ始めてどのくらいだったのか記憶していないが、あつという間だった気がする。ガタリ、と席を立った。

「済まねえな、兄ちゃん。こんな夜中に飯を奢ってくれてよ。迷惑かけたぜ」

「いえ、構いませんよ。これくらい」

「本当に助かったぜ。この恩は忘れないよ」

のっぺらぼうはぺこぺこお辞儀をしながら、先ほど入ってきた勝手口のドアノブに手をかける。

これで、お別れなのだろう。

しかし、そこで、

「あの」

秋正は堪らず、声をかけた。のっそりと、のっぺらぼうの影が振り返る。

「どうしたい？ 兄ちゃん」

「まだ、これから、この町にいらっしゃるんでしょうか」

訊くと、彼は少し顎を撫でて思案していたようだったが、すぐに、

「そうだね、おいら、当分行くべき場所を見つけられそうにないし」

そう言った。ならば、と秋正はたった今思いついたことを彼に告げる。

「でしたら、一週間後」

「うん？」

「一週間後、またここに来てくれませんか」

「ここへかい？」

「ええ、その時まで、新しいうどんを作っておきますから」

其の六

ひと通り話を聞き終わった後、葛葉は、ゲップと共にため息をついた。空っぽになった器にからん、と箸を放る。

「なるほどね」

と眼を閉じて頷く。

「事情は大体分かった」

夜彦はそんな彼女に隣から秋正に悟られないように、ひそひそ声で話しかけた。

「おい、葛葉」

「うむ？」

「話を聞くに、どうやら今回は救済が必要なんじゃねえか？」

「救済……」

小さく口を動かして、彼女がつばやく。

「そうだよ。なんだか、そののっぺらぼうのおっさん、行き場をなくして困ってるみたいだし」

夜彦は知っている。

そうした妖を救うのも、この葛葉、幻門白狐の大事な仕事のひとつなのだ。

人類の文明が発達してからというもの、闇を奪われ、居場所を無くす妖たちが急増している昨今、彼らに避難場所を提供することに

より、これ以上の種の数を減らすのを防ぐのである。人命救助ならぬ、妖命救助だ。これは、いつも夜彦が持つてくる下らないと言われる話と比べると、それなりに緊急性がある話である。

さすがに事がここまで及べば、彼女も放っておけないに違いない。すると、葛葉はふん、と鼻息を飛ばす。そして、面白くなさそうに口を尖らせて、

「そうだな」

と、渋々といった感じに頷いた。

「誠に遺憾ではあるが、この件については、詳しく調査をする必要があるようだ」

結局の所、困っている他者を見過ごせないくせに、そのひねくれた態度を見せるところが彼女らしいところだ。

「だろ？」

「場合によっては幻妖界につれていく必要もあるな」

夜彦は喜び勇んで手を叩く。

「よし、これで決まったぜ」

これでその妖と対面できるというわけだ。

しかし、それを見た彼女に、刺のように鋭い彼女の視線で睨まれる。

「おい、遊びに行くんじゃないんだぞ！」

「そ、それくらい分かってるよ」

慌てて言い返して、苦笑いする。危ない危ない。できるだけ感情は抑えないと。

ここで彼女の機嫌を損ねることはかなりまずい。場合によってはジヤマをするからという理由で、同伴を拒否されることもあるのだ。葛葉は未だ夜彦を牽制するように、じろじろとこちらを見ていたが、やがて、秋正に声を書けた。

「済まないが、秋正」

器を洗っていた秋正の手が止まる。

「何？」

「そののつぺらぼうとやらは一週間後に現れるのだろうか？」

「そうだけど」

「ならば、そいつがくる日、私たちもその場に同席しても、構わないか？」

急なことに驚いたのか、わずかに秋正の目が見開かれたのが分かる。

「え、別にいいけれど。どうするの？」

まあ、秋正からしてみれば、当然の疑問だろう。普通ならば、そんな恐ろしい妖などに積極的に近寄ろうとすることなどないのだ。さあ、果たして、葛葉はそれをどう上手くごまかすのか夜彦が見ていると、急に右足の甲に激痛が走った。

「いてっ！」

どうやら、葛葉に踏まれたようだった。

涙目で見れば、彼女が困ったように夜彦に目でサインを送ってくる。どうやら、自分では答えられないため、自分に代わりに答えるということらしい。

ったく、そういうことなら、最初から考えておけよ。

そう思いながらも、夜彦は渋々答える。

「ああ、その、な。俺達もそののつぺらぼつに会ってみたいな、なんちって……」

「はあ、いいと思うけど。変に騒いだりしなければ」

案外すんなりと了承を得ることが出来た。

「そうか、サンキューな、秋正。恩に着るぜ」

「ごちそうさま」

すると、そのタイミングで葛葉が空になった器を秋正に返す。

「このうどん、中々うまかったぞ」

感情のあまり込もらない声で感想を言う葛葉は、表情をあまり表に見せない秋正と似たり寄ったりで、無愛想である。もう少し、嬉しそうに言えばいいのに、と夜彦は思う。

しかし、彼女の顔をよく見れば、眉をびくびくときこちなく動かしている様子で緊張を隠しているようだった。やはり、彼女と言えど、きちんとした感想を言うとなれば、少なからず緊張するものらしい。

その様子が何とも微笑ましく、知らず、ニヤニヤしてしまう。

「そ、そう？」

「しかし、いかんせん具が多いな。料理というものは、あれこれ入ればいいというものでもないだろう」

秋正はそれを聞き、はっと口を押さえて、失態に気づいた表情になる。

「そ、そうだね。基本的なことを忘れていたよ」

やはり、あまり表情は変えないものの、少なくとも恥ずかしそうに、首筋を指で搔いた。すぐに目が泳いでいるところを見るに、何かそれに代わる新しい案を探しているのだろう。

「もしかして、それ、のっぺばうのおっさんに食べさせるのか？」

と夜彦が訊くと、秋正は自信なさ気に頷く。

「う、うん、そう思ってたさ、ここ数日頭を捻ってるわけさ」

「ふーん、それで前、テストの勉強もしないでひたすら打ち込んでいたわけだ」

それも、母親の話では、朝方までということらしい。つまり、ほとんど寝ないでうどん作りをしているわけだ。

しかし……。

そんな疲労など秋正は微塵も見せない動作で、キビキビと動いている。夜彦はそれを感じすると共に、不思議にも思った。

「よくそんなに熱中できるもんだな」

「……まあね」

と額の汗をぬぐいつつ、秋正が答える。

「うどん作りはさ、今の僕にとっては、人生の柱みたいなもんだからね」

「人生の、柱？」

「そう、それくらいに大事ってこと。だから、自分が納得出来なきや止められないんだ」

そう目を輝かせながら語る秋正はこれまで以上に生き生きしていた。これこそがひたむきというのだろうか。夜彦は思う。いつも表情の変わらぬ寡黙な少年のようであるが、その内には確かに一本の柱のような変わらぬ一念が宿っているのだろうか。

ふいに、隣の葛葉が肘で小突いてきた。

「この殊勝さを夜彦も見習ったらどうだ？」

「う、うるせえ」

ぶっきらぼうに言い放って、そばを向いた。何だか居心地が悪くなり、さつさと立ち上がると、二人分の勘定を台の上を置く。「こら、勝手に行くな」と、駆け寄ってくる葛葉の向こうの秋正に元氣よく手を振った。

「じゃあ、また明日、な」

「うん、じゃあね。毎度あり」

其の七

店を出て、しばらく道なりに歩きつつ、夜彦は顎に手を当てて、考えていた。

「うーん」

空を見上げたり、地面に目を落したり、視線をふらふらせつつ、考えている。そんなことをしているものだから、ふいに目の前に電柱が迫っていたので、慌てて避けた。

危つく正面衝突をすることである。

すると、その様子を見かねて、葛葉が口を出してきた。

「どうした、夜彦、何を柄にもなく悩んでいるのだ」

「あのな、それじゃ俺がいつも悩みがないみたいじゃないか」

夜彦が言い返すと、彼女はあっけらかんとした顔で、

「違ったのか？」

と聞き返す。そのいたずらっぽく白々しい様子がいかにも彼女らしい。

「おまえなあ……はあ、まあいいや。俺はのっぺらぼうのことを考えてたんだよ」

夜彦はそう白状した。

「なに？ のっぺらぼうだと？」

「ああ、そののっぺらぼうってさ。俺はもちろん実際には見たことがないけれど、目も鼻も耳もいろいろ無いわけだろう?」

「そうだな」

「それって、生活するのに、不便じゃないかって思ってたさ」

「不便?」

葛葉は眉間にシワを寄せる。夜彦の話している意味がわからないという感じだった。

「いや、あのさ、葛葉。俺は考えたんだよ。その容姿ってのは人を驚かせるのにはもってこいの姿形だけど、のっぺらぼうだって、年がら年中驚かせてるわけでもないんだろう?」

「そりゃあな」

「人を驚かせるのは仕事、けれど、それを支える普段の生活が成り立ってなければ、人を驚かしているどころじゃないんじゃないかな」

そう疑問を呈する夜彦に葛葉はますます皺を深くする。

「何を言っている?」

何だか怒っているようにも見えた。今にもさっさと分かりやすく話せ、と鉄拳が飛んできそうである。

「だから、体にとって重要な役割を果たすパーツがなければ、生活が不便だろう。目がなけりゃ、前が見えないし——」

と、その途端、

「ぶっ、はははは……」

吹き出すように葛葉が笑い出した。状況が理解出来ない夜彦に、
「全く何を言い出すかと思えば」と彼女は呆れながら言う。

「お前、さっきの秋正の話を聞いていたのだろう。のっぺらぼうが
少しでもその体を不便がつているようなことを言っていたか？」

「え、ええと……」

「いいか、夜彦。あの者たちは、あれで生きていけるものなのだ。
お前が心配するに及ばん。そもそも、あやつらはあのような姿で元
々生まれついておるのだから、初めから不便も何もない。人間から
の視点で妖の容姿についてあれこれ言うのは、意味のないことだ」

そして、そこで一度葛葉は言葉を止めてから、前を向き、

「それに、妖たちからすれば、よっぽどお前たちの体の方が生きに
くいものよ」

「そついうものかなあ？」

と頭を捻った夜彦に対し、

「そついうものだ」

と葛葉はとても簡単に返事をした。

しかし、その割には、彼女は人間の姿を気に入って、人前である
時以外にも、事あるごとに変化をしているように思う。全く、彼女
はこういうところがいい加減なのだ。夜彦は思った。

そのまま、二人の会話は途切れ、無言のまま歩いた。空は黄昏時
で、春のよく澄んだ青い空がじんわりと赤に染まっていく。町は次
第に、昼の世界から夜の世界に移り変わりつつあった。

近道で公園の真ん中を突っきっていく。人影の途絶えた公園のブ

ランコが揺れていた。すると、それに合わせるように、葛葉の綺麗な銀髪も風に乗って、ふわふわと揺れた。

それに見とれていると、公園の出口に差し掛かったところで、急に彼女が思い出したように口を開いた。

「ところで、私は秋正を見ていて、ふと思ったのだが」

「うん？」

「私はほんの最近の付き合いでしか知らないが、あいつは、昔からあなののか？」

「え？」

「だから、昔からあんなに、うどん馬鹿なのかと聞いている」

「馬鹿って……」

彼女は腕組みしながら真面目な顔で言う。

「あれは紛うことなき馬鹿だろう、夜彦。私にはあいつが四六時中うどんのことしか頭にないように見える。それを馬鹿と言わずなんと言う。もしくは、うどん狂いとも言つか？ 怪談マニアで変態のお前といい勝負だな」

「お、お前なあ」

「それで？ お前は何か知っているのか？」

よつぽど彼女の発言に対して、夜彦は何か言い返してやろうかと思ったが、続けて彼女にそう聞かれ、タイミングを逸してしまった。もごもごと口を動かした後で、答える。

「……そうだなあ…… あいつは、あいつはさ、昔から無口な奴だったよ」

昔のことを思い出す。あれは夜彦と秋正がまだ親密になる前の話

だった。

京極秋正。

彼と夜彦が出会ったのは、小学生のころだった。たまたま進級時のクラス替えて一緒のクラスになったのを夜彦は覚えていた。

しかし、どちらかと言えばひょうきん者でクラスの仲間たちとつるんでよく遊ぶことが多かった夜彦と違い、秋正は、クラスの中でもあまり友人たちに相手にされるような人間ではなかったため、夜彦と秋正との間に当初は親交はなかった。

「こつ、なんていうか、存在が希薄なんだよな」

夜彦は思い出しながら引っかかりながら語る。

「こんなことを言っちゃあいつに悪いけど、これと言った特徴もなかったし、物静かで、勉強も運動も中の中。パツとしないっていうか。俺も正直言って、最初は特に気にしていたわけじゃない」

「ふむふむ」

「学級委員に選出されるような人間でもなくてな、クラブで思い切り活躍できるような奴でもない。友達も少なかったみたいだし、俺もあの当時、あいつとはこれから先もずっと仲良くなることなんてないって思ってたんだ」

「しかし、今は仲が良いではないか」

「そうそう、それにはきつかけがあつただけだ……」

ある時のこと。

その転機が訪れた。それは、学校の授業、家庭科の調理実習の時

間のことだった。グループに別れて、夜彦たちは、指定された料理を作るようになったのである。

「その授業でさ、うどんを作ることになったんだよ」

「ほう、うどんなあ」

「あの時のことはよく覚えてるけれど、うどんを作るなんて、普段やらないことだからかなり戸惑ったんだよな。俺だけじゃなくて、皆初めてのことだったみたいだし。けれど、そこで登場するのが秋正だ」

夜彦は調子よく指を鳴らす。

「あいつの家はうどん屋だろ。皆そのことは知っていて、あいつを料理長にして、うどんを作らせたんだ。そしたら、皆に大好評でさ。俺も食べたんだけど、学校の授業で作ったとは思えないくらい、上出来だった」

「ほう」

「あの時の秋正の顔は覚えてるよ」

夜彦はそう言って、空を仰ぐ。ちょうど夕焼け空に、白い鳥が大きく両翼を広げ、気持よさそうに飛んでいくのが見えた。

「皆がおいしいおいしいうってってくれるのを、不思議そうにぼうつと見てた。目の前で起こっていることが信じられない、って感じでさ。相変わらず表情はパツとしなかったけど、きらきら目を光らせてて、めちゃくちゃ嬉しそうにしてたのを俺は覚えてる」

それからさ。夜彦は言う。

「あいつが、うどん作りに熱中し始めたのは……」

夜彦には秋正の胸の中で、あの時以来、どのような劇的な変化が訪れたのか、全くもって知らない。しかし、少なくとも、あの時のうどんによって、秋正は何か、他者に対して、心を開き、積極的な考え方をするようになったことは間違いないかった。

もちろん、調理実習でのがあつてから、彼はクラスでも、時々話題に上がるようになり、次第に、クラスの人間が彼に話しかける機会が増えたこともその要因の一つなのだろう。

そんな中、夜彦も秋正に興味を持ち、彼とあれこれと語るうちに、彼は相変わらず、無口で、無表情な少年ではあったものの、だからといって、他者に冷たい人間でもなく、むしろ、優しい人間だということも夜彦は知ったのだ。

夜彦が彼に、あの時のうどんが美味かったと話すと、彼は何を思ったのか、次の日の放課後から、うどんの材料をこっそり学校に持ち込み、放課後に調理室で、うどんを作り、夜彦たちにふるまってくれたこともあった。

「なるほどな」

葛葉が頷いた。

「きつとあの頃から、あいつはうどんをつくることの喜びを知ったんだよ。確かに傍から見りゃ、うどん狂いつてのもうなずける。でも、あいつは、糞真面目に誰かにうどんを食べてもらいたくて、いつも頑張ってるんだ。いつか、自分が店を任せてもらえるように、な」

「ふーん。興味深いエピソードだな」

「感動的、だろ？」

とにやりと笑いながら夜彦が聞く。

すると、彼女は小馬鹿にするような半眼で夜彦を見た。

「お前の話で感動することなどあるのか？」

「ああ、何しろ俺には天才的な話術があるからな」

「冗談はよせ。お前の話はいつだって退屈なのだ。私がそう断言する」

彼女は渋い顔を作って言う。そこからはいつもの夜彦が持つてくる怪談話にうんざりしている様子が窺えた。

「はあ、さいですか」

「まあいい。とにかく秋正についてはよく分かった」

気がつけば道はくねくねと折れ曲がり、前方で二つに分かれています。そこが彼女との別れの場所である。片方の道は神社へと続いているので、彼女はそちらに曲がるのだ。

そこに辿りつくまでの少しの間、特に話すこともなかったのですが、夜彦は再び未だ見ぬのっぺらぼうに想像を巡らせることにした。

のっぺらぼうに会えるのは数日後か。

一体、事の顛末はどうなってしまうのか、どんな妖なのかを再び想像して、夜彦は心が浮き立つのを感じた。

そうしていた時だった。夜彦はふいに、面白いことに気がついた。

「あれ？」

「今度はどうした、夜彦」

面倒くさそうに葛葉が顔を向けてくる。

「いや、もしかしたら、あいつとのっぺらぼうって似てるのかなっ

て」

「似ている？」

何をまた突飛なことを言い出すのだと、葛葉は片眉を釣り上げた。

「どこが似ているというのだ」

「いや、その二人が持っているものさ」

「持っているもの？」

「だって、のっぺらぼうには口しなくて、あいつには、うどんしかないだろう？」

「ほう」

葛葉は少しだけ目を丸くして、驚いたようだった。

「な？ な？ そう思うだろ。もしかすると、今回の怪談は類は友を呼ぶってことわざを証明してるんじゃないかねえのか？」

「ふうむ。お前は……」

「何だよ」

「時々、ちよっぴり面白く、どうしてもよいことを思いつくな」

「どうでもいいは余計だ」

夜彦は傍にあった小石を蹴飛ばした。

其の八（前書き）

少し投稿間隔が空きました。なるべく早く更新しようとは思っていますが、当初の予定であった二日間隔の更新が少々きつくなったので、今回からもう少し余裕を持って、更新していくことにします。最低でも五日に一回は更新していくつもりです。

其の八

ピリリリリ――。

キッチンタイマーのアラームが鳴っている。

その音で、秋正は目を覚ました。ガタリ、と椅子から勢い良く跳ね起き、即座に右手を伸ばしてタイマーを止める。

どうやら、いつの間にか眠ってしまったようだ。ぶるぶると頭を振って眠気を払う。

一体、どのくらい鳴っていたのだろう。数分だろうか。眠っていたからよく分からないことは当然なのだが、これはあってはならないことだった。

慌ててうどんの麺を茹でている釜の中を見る。丁度良く湯で上がっていればと願ったが、すぐに、まずいと分かる。失敗だ。麺が伸びてしまっていた。

秋正は頭を掻いた。

一体、何をやっているのだろう。調理中に眠るなんて……。これでは料理人失格だぞ。そう自分を戒める。

つい、椅子に座ってしまったのがまずかったのか。これでは作り直しだった。

重いため息を吐いて、壁のカレンダーに目を向けた。黒く塗りつぶされている日付を見る。

のっぺらぼうとの約束の日まで、もう二日しかなかった。そう思うと気が焦る。

急がなくては。自分は、それまでに、新しいうどんを作ると決めたのだ。その決意を貫き通せないようではどうする。

ふっと息を吐き、秋正は自分を鼓舞するつもりで、両手で思い切

り頬を叩いてみた。ビリビリとした痛みが脳を震わせ、わずかに意識を覚醒させた気がした。よし、これで大丈夫なはずだ。

秋正は隣の台の上を見る。残りの麺はまだ切り終わっていない。手早く切って、もう一度湯でなければ。

傍らに置いていた包丁に手を伸ばす。持ち上げると、それがいつもより重いことに気がつく。普段なら、こんなことはないのに。

やはり、疲れているのだろうか。

そう思った瞬間だった。ぐわんと大きく視界がたわみ、足元から力が抜けた。

あれ？

体が重力に引っ張られて……意識が途切れ――。

と、そこで秋正の体に何かがぶつかってきた。何かが、クッションになったようだ。

「おい、大丈夫かよ」

背後から聞き覚えのある声がする。その人物に脇の下から腕で持ち上げられて、秋正は何とか、地面衝突をまぬがれたようである。

「あれ？」

重たいまぶたを無理やりこじ開け、振り返ると、自分を支えてくれているのは、友人の夜彦であることが分かった。

「八守中……た、助かったよ」

「ったく、無茶してんじゃねえよ」

そうして、彼は秋正を引っ張り上げると、しっかりと立ったのを確認して、手を離れた。大きくため息をついて、呆れた顔で秋正を

見ている。

「こんな時間まで、うどん作りか？」

夜彦が時計を一度見てから聞いた。

「まあね。どうしても、中途半端で止めるわけにはいかなかったから」

そう答えた後で、秋正は彼の背後に、物珍しそうに調理場の内装を眺めている葛葉の姿もあった。どうやら、二人で来ていたようだった。

しかし、それには大いなる疑問が伴う。

「ところで、どうして、二人はここに？」

秋正は訊ねる。いくらなんでも、こんな時間に二人して店に来るのはおかしい。まさか、遊びに来るはずがないし、夕方に来た際に何か忘れ物をして取りに来たという雰囲気でもなかった。

すると、夜彦は、なぜか目を泳がせつつ、こめかみを指で掻いた。

「あ、ああ、そのなんつーかさ、お前のことが気になったんだよ」

彼の声が不自然に裏返った。

「気になった？」

「そうそう、夕方、お前がずいぶん遅くまでうどん作りの練習に力をいれてるって聞いてたしな。それで、様子を見に来たんだよ」

「そのために、わざわざ？」

「ああ」

「こんな時間に？」
「そうだぜ」

秋正は目を丸くした。それは他人から見ればほとんど表情に変化はない僅かな感情表現ではあったが、秋正にとっては、大きな驚きだった。

「わざわざ、ありがとう」

秋正は、夜彦がお人好しだということは知っているが、自分のためにこんな時間に見に来てくれるとは、思いもしなかったことだった。

「なに、このくらい、いいってことよ」

彼は照れくさそうに襟首の辺りを爪で掻いた。

「友達のことだしな」

しかし、秋正には再びある疑問が浮かぶ。

「でも、二人ともどこから入ってきたわけ？」

周囲を見渡す。

「うん？」

「だって、店の入口も、裏の勝手口も鍵を閉めていたはずなんだけど」

すると、そこで夜彦は予想以上の狼狽を見せる。

「そ、それは……」

と口をもごもごと動かし、言葉を探しているように、曖昧に何かを言いかけては止めることを繰り返した。

何だか、その視線が時々背後でうろろしている葛葉に向けられているような気もするが、何かあるのだろうか。

「どうしたの？」

「い、いや、たまたま鍵が開いてたんだよ。だから、ちょっと入っちゃったんだ」

「開いてた？」

「あ、ああ」

「おかしいな。確かに閉めたつもりだったんだけど」

秋正は記憶を手繰って確認する。しかし、施錠はいつもの癖なので、ほとんど無意識の内に済ませるために、記憶に明確に残っていなかった。

すると、ふいに――。

（まさか、葛葉に白狐の力で開けてもらったとは言えないよなあ）

ぼそり、と夜彦が何か言った気がした。

「うん？ 何か言った？」

と慌てて問い詰める。

「え、いやいや、言ってねえよ」

「本当に？」

「そ、それよりも、お前、本当に大丈夫なのか？」

「え？」

「え？　じゃなくてさ。今だってふらふらして、危なかつかしくて見てられなかったぞ。疲れてるんじゃないのか？」

「嫌だな、ハハハ……そんなわけないって」

秋正は苦笑いをしてみせる。無論、大丈夫ではなかったが、そうして元気であるところをアピールし、彼に心配させまいとしたのだ。しかし、彼はそんな秋正ににこりともせず、真面目なままでの表情で、というよりもかなり怒っているような顔つきでこう言った。

「何がハハハだよ。そんなもんで誤魔化すな。いいか、人間にはな、休息が必要な時があるんだよ。何でもがむしやらにやればいいってもんじゃない。こういう時は、体に正直に寝むつとけ」

「うん、心配してくれて、ありがとう」

心配してくれることは素直にうれしい。秋正はそう思う。しかし、秋正の手は再び台の上のうどん包丁を握った。

「お、おい。無茶するなって」

「大丈夫、今のはちょっと気が抜けてただけだから」

言いながら、今度は落とさないように、しっかりと指先に意識を集中させた。

途中で止めるつもりは毛頭ないのだ。最後まで自分が納得するまでやり切ることだ出来なければ、自分に負けてしまうような気がしているのである。

夜彦が横から口を出す。

「俺から見れば、ちよつとどころではないけどな」

「全然、問題ないよ」

そう言って、包丁を麵の上に下ろす。す、す、す、リズム良くうどんを切っていく。

うん、いつもの調子だ。

そのリズムを確認しながら、秋正は再び集中力を高める。後は意識をしなくても、体が勝手に動いてくれる。慣れたものだ。

しかし――。

しかし、そのリズムに急にノイズが入ったように、乱れてしまったのが分かった。

あれ、と思った次の瞬間、包丁の先が、秋正の指に触れていた。

「痛っ！」

指先に痛みが走る。

「ほら、言っただろうが」

慌てて、切れた指の先を見ると、そこからジワリと血が滲み出していた。じんじんと痛みが患部から伝わってくる。

「お前はもう疲れてるんだよ」

「そ、そうじゃないよ」

無茶はさせまいとする夜彦に対し、秋正はあくまで強がった。

すると、そこでそれまで調理場の様子を見ていただけだった葛葉がつかつかと秋正の方へ歩み寄ってきた。

「どれ、秋正、見せてみる」

と言つ。

「え？」

絆創膏でも張ってくれるのだろうか。秋正がそう思つて、指を突き出すと、彼女はその指の上に手をかざし、何やら、ふんと力を入れた。

途端、なぜか、指先から痛みが無くなった。もはや、消滅したといつてもいいくらい突然に、たちどころに、痛みが無くなった。

見てみると、傷口は塞がり、そこから溢れていた血は一滴も出ていない。彼女の行為は、超常現象レベルの治癒効果をもたらしたのである。

「そんな、どうやったの？」

秋正は目を丸くして驚いた。

「何でもない。単なる応急処置だ」

いつもと変わらない無愛想な表情で彼女は淡白な口調で言つ。そして、耳にかかつていた髪を手で払つた。綺麗な銀髪がしやりと宙に散る。

そんな彼女を秋正は不思議に思つて見つめていた。

彼女が手をかざした瞬間、彼女の頭の辺りに、一瞬、妙な影が見えたような気がしたのだが、気のせいだったのだろうか。

まるで、彼女に動物の耳が生えたように、見えたのだけれど。

うーん。それにしても、何だか葛葉ちゃんって、変わった子だな。よく考えたら、苗字も知らないし、人間じゃないみたい。

其の九

「秋正」

すると、急に彼女から名前を呼ばれる。

「何？」

「お前はそんなにまでして、うどんを作りたいのか？」

急にぐつと顔を寄せてくる。半眼で鋭く睨まれた。

なんだか、すごい迫力だ。途端、秋正は息が詰まったように感じる。まるで彼女のその瞳には、魔法のような不思議な力が宿っており、見るものを圧倒する光線を放っているようだったのだ。

蛇に睨まれた蛙とは、このことを言うのだろうか。迂闊に身動きが取れない。

変だな。秋正は思う。いつも昼間に見る時はそんな感じはしなかったようだけど、どうして今はこんな風に感じるのだろうか。

不思議に思いながらも、秋正は答えた。

「う、うん。それはもちろんさ」

「ほう」

「うどんを作ることは、僕の生きていく道そのものだからね。どうしても、自分で誇れるようなうどんを作りたいんだ。食べてくれる皆が喜んでくれるような。だから……だから、これは、そのための一つの試験だと思ってる」

すると、彼女は納得したように深々と頷く。

「なるほど、うどんはお前にとっての生きていく道、か。それは素

晴らしい志だな。秋正、私はお前のその高き志には敬意を表そう。
しかしだ――」

そこで言葉を切り、いきなり怒ったように秋正の鼻先に葛葉はつ
んと指を突きつける。

「自分の体調管理も出来ずに、無茶苦茶をやって寝こんでしまっ
てはうどん作りも何もないのではないか？」

「そ、それは……」

「いつでも最高の技術でうどんを作りたいのであれば、体調管理く
らいできて然るべきだろう。それが職人というものだ。それともお
前はなにか、眠い目をこすりながら作ったうどんに魂がこもるとで
も思っているのか？」

そう言われると、秋正は何も言えなくなる。彼女の言葉は全くも
って正論だった。反論の余地はないし、ぐうの音も出ない。

「確かに、そうだね」

秋正は素直に謝る。

「ごめん、僕が間違ってた」

「うむ。そうか、分かったならいい」

頭を垂れると、葛葉はまるで、教え子を見る厳しい教師のように
腕を組みつつそう言った。そして、「今日はもう眠れ」とほとんど
命令するようなつんとした口調で言う。

いまさら反抗するつもりなど毛頭ない秋正は従順にただ頷いた。

「う、うん。ありがとう。そうするよ」

それを見て、夜彦がやれやれという感じでため息をつく。

その後の片付けは夜彦たちの手伝いもあり、すぐに終わった。調理用具を仕舞って、調理台を拭いてしまうと、後にはもうやることもなかった。

おそらく三分もかからなかっただろう。

とはいえ、夜ももう深い。時計の針はすでに夜中の三時になるうとしていた。秋正はふらふらになり、すぐにでもベッドに転がり込みたい気持ちになる。

しかし、わざわざ手伝ってくれた二人をそのまま放っておくわけにはいかない。秋正は最後に二人にお礼を言い、店の入口まで送った。

「本当に、今日はありがとう」

「何、いいってことよ。俺とお前の仲だろう？」

夜彦は気さくな笑みを浮かべている。

「うん。ありがとう。もうずいぶん遅い時間だから、帰り道は十分気をつけてね。出来れば家まで送ってあげてもいいんだけど。特に葛葉ちゃんは女の子だし」

「うむ」

すると、彼女は秋正の心配が分かっているのか、どうでもいいことのように、クールにそう言っただけだった。

それはまるで、自分は絶体に何があっても、危険な目にだけは遭うはずがないと確信しているように見える。いや、むしろ、危険な

目に遭うとすれば、それは相手の方だとも言つてのけそうなオーラさえ感じた。

「ハハハ、秋正。葛葉なら大丈夫だよ」

「大丈夫って、格闘技でも出来るの？」

だとしたら、得心もいくのだが。

「まあ、そんなところだ。それに、そもそもこいつは怪しい人間から狙われるわけがない。何しろ、よっぽどこいつ自身の方が『怪しい』し、な……」

「え？」

それは、どういう意味だ？

夜彦にそう問いかけようとしたところで、

「時に、秋正よ」

当の葛葉が口を挟んできた。見れば、彼女は複雑な表情を作つて、何やら、周囲に目を配っている。

「そののっぺらぼうとやらが来るのは、まだ先のことであったはずだな」

「そうだけど、それがどうかした？」

すると、彼女は、

「ああ、いや、やはりそうなのか。だとすれば、変だな……」

とどこか腑に落ちない言い方をする。

そして、やはり、目をキョロキョロさせて、さらに、くんくんと匂いを嗅ぐような素振りもしている。まるで動物のような仕草だ。

「何か気になるのか？」

これは夜彦が訊いた。

「いや、一応確認しただけだ。大したことではない」
「ふうん」

夜彦はそれで溜飲を下げたようだったが、秋正は彼女の向けている視線の先が気になった。

彼女は一体何を探しているのだろうか。

秋正はその行動が、何を意味するのか少し考えたが、分からなかった。ともかく、それを考える余裕もないほどに、体力が低下していたのだ。

そして、彼らが通りの向こうの闇に消えるまで手を振り、戸を施錠すると、一直線にベッドに向かい、呼吸する間もないほどの短い時間で、溶けるように眠ってしまった。

「ほらな、定期的なパトロールしてて、正解だっただろう？」

うどん処「和泉」からの帰り道、夜彦はそう得意げに葛葉に話しかけた。

「たまたまあの店に立ち寄ったことで、あいつが無茶やってるのを止められたしな」

人通りの皆無な町の国道沿いを彼女と歩いている。彼女は人間よりも遥かに身軽なため、細いガードレールの上を器用にバランスを取りながら、進んでいた。

そんな彼女が、夜彦の言葉にむすりとした顔で、言い返す。

「ふん、何がパトロールだ。私はそんなもの続けるつもりはないぞ。お前が勝手に始めたのだしな」

「何言ってるんだよ。この地域の夜間の状況報告はお前の仕事なんだろうが。どんな妖がいるのか、きちんと把握する必要があるんだろ」

夜彦はいつだったか、彼女がそんな仕事の話をしていたことを話していたのを覚えていたのだ。

そのために週に一度はなるべくこうして、夜、適当に町をパトロールすることを繰り返しているのだが、その時、彼女を伴って行くのにはかなり苦心する。

なぜなら、その発言をした当の本人は、

「ああ、そうだったかな。全く記憶にないが」

と、毎回このようにごまかし、思い出そうと努力すらしないう子なのだ。

夜彦は深い溜息をついた。

こちらは毎度親に夜間の外出がバレないかひやひやしているというのに。まあ、それは誰に強制されるわけでもなく、夜彦の意思でしていることなのだから、彼女に文句を言うことはできないけれど。

「まったく、葛葉はいつもそうだよな。俺が目を見張るようなやる気を、一度くらい見せてみるよ」

「バカ言え、私がやる気を出してみろ。一つの都市が地図から消えることになるぞ。もし夜彦の指示でそうなった場合、その責任をお前は負えるのか？」

「あ、あのなあ……」

夜彦はそんな彼女の言い草に呆れてしまう。しかし、彼女は飄然と話を続けた。

「夜彦、私はやる気を出さないのではなく、やる気を出し過ぎないよう努力をしているのだ。何事もバランスを保つというのは重要だぞ。力の加減然り、妖と人の関係も然り。そして、それは実に困難で、同時にとても退屈なことだ。私がいつもこうして仏頂面をしているのには理由があるのだよ。お前にはその点を含めて評価してもらいたい」

「へえ、世の中にこんなに真摯でひたむきな努力があるとはお見それしたよ」

無論、この夜彦の言葉は棒読みである。彼女の詭弁にまともに付き合うほど、夜彦はお人好しではない。

「まあ、しかし、面倒とはいえ、妖の様子を探るパトロールとしては、今回は少しだけ意味があったかもしれない」

しばらくして、急に彼女が妙なことを言い出すので、夜彦は一瞬戸惑った。

「何の話だ？」

「いやなに、少しだけ、あのうどん屋の周囲で妙な気を感じたというだけよ」

そう言えば、秋正との別れ際、彼女が周囲を気にしていたの思
い出す。

「それって妖なのか？」

「まあ、妖だが……ふむ。どういっつもりなのだろうな」

「あん？ 何のことだ？」

夜彦には意味が分からない。

すると、彼女は詰まらなさそうに、

「まあ、お前が気にすることではない」

そう言っで、葛葉はガードレールから飛び降りる。長い尾のよう
な銀髪がその後にならっで、しゃらんと綺麗に揺れた。

「その日になれば、きっと分かるはずだ」

其の十

あののっぺらぼうと出会ってからちようど一週間が経った日の夜のこと――。

優しい春の夜風の吹き込む調理場で、秋正は一心不乱にうどんの麺を捏ねていた。ぐいぐいと指にそれが食い込む感触を確かめつつ、リズムよく力を入れていく。

時計の針は、もう既に深夜の一時を回っていた。当然、両親は二階の寝室ですっかり寝入っている頃だ。多少、階下で物音がしたとして、怒られる心配はないだろう。

秋正は、準備を続ける。

今度は麺棒でうどんの生地を伸ばしていった。凹凸が出来ぬように均一に厚みを揃えていく。頃合いを見計らって、出汁の味もみるよし、これで完璧だろう。

もてなしの準備は整った。後は、彼の到着を待つだけだ。

そうして、軽く手の汚れを拭きとった時だった。

店の入口がガラリと開く気配があつた。蛍光灯に照らされて、あのつるりとした顔がその入口の間からのそりと覗く。

「よお、兄ちゃん。約束通り来たぜ」

のっぺらぼうだった。一週間ぶりには見る彼は、以前と変わらず、草臥れたシャツを着ており、どこか怪しい雰囲気をもっていた。

「いらつしやいませ」

丁寧に腰を折って秋正は頭を下げる。

「お待ちしておりました。ご予約いただいております、のっぺらぼう様ですね」

そして、もう一度、お辞儀。

すると、おいおい、とのっぺらぼうは手刀を横に振った。

「よしてくれよ。何もそんな大げさにする必要はねえんだ。おいらはしがな小物の妖だぜ。それに、一度は兄ちゃんにうどんを奢ってもらったくちだ。そんなに畏まられると、こっちが恐縮するってもんだ」

しかし、そう言われようと、秋正はこの態度を変えるつもりはなかった。こうすることで、自分が本気であることを秋正は彼に伝えたかったのである。

すると、その異様な雰囲気吞まれたのか、おずおずとしているのっぺらぼうは秋正はカウンター席に案内すると、調理場に向かった。麺を湯で、調理が済むと、それを待っているのっぺらぼうの元へ運ぶ。

静かに、器を置く。それと同時に、温かな湯気が立ち上り、麺はまるで秋正の自信を表すように、光り輝いているようにも見えた。

「どうぞ」

「こいつを食って、感想を言えいいかい？」

「はい、お願いします」

秋正が頭を下げると、のっぺらぼうはそれから何も言わずに、割り箸を二つに割ると、用意していたうどんを食べはじめた。

ふわりと舞い立つ出汁の香りと、ズルズルといううどんが滑っていく音。深夜の静寂がその場を満たした。秋正には自分たちを包む周囲の闇が固唾を呑んでその様子を見守っているようにも感じられ

た。

つるりとしたのっぺらぼうの顔には感情は見えない。目も耳も鼻もない。微笑んでいるのか、顔を歪めているのか、それも分からない。ただ、黙々と、うどんを食べていく。

これが、この妖というものか。

秋正はなんとなくそう思う。

そして、秋正は次第に雑念を埋める無我の空白が脳内に満ち、自身の意識が研ぎ澄まされていくのが分かった。のっぺらぼうの一つの動作がいやに気になる。果たして、自分のうどんは彼に認めてもらえるのか、否か、その結論の間で宙ぶらりんになった心細さが、自分をそうさせているのだと秋正は思った。

どれくらい経ったのか、のっぺらぼうが、箸を置いた。見れば、器は空になっていた。

ついに、その時が来たのだ。秋正は身構えながら、恐る恐る、のっぺらぼうの顔を見た。

すると、やはりその表情には、何も映っておらず、真っ白な鏡と対峙しているような心地になる。

「うん」

やがて、のっぺらぼうが声を発した。

「この前よりは、だいぶ良くなってるなあ」

「ほ、本当ですか？」

思わず、叫びそうになるのを秋正はこらえた。

「ああ、兄ちゃんのうどん、いい味してるぜ。これは十分評価に値

するうどんだ」

そう言われた瞬間、秋正の中に彼に認められたことに対する喜びの気持ちが溢れた。この一週間の自分の努力は認められたのだ。頑張った甲斐があったのだ。

「しかしな……」

そこで、のっぺらぼうが言葉を付け足す。

「正直、おいらからすれば、まだまだひよっ子と言う感じがな」

「え？」

「以前と比べれば、かなりマシになったさ。でも、まだまだ、雑な感じは拭えねえ。素材をまだコントロール出来てない感じだな」

「コントロールです、か」

「……まあ、大丈夫さ」

不安気に眉をひそめる秋正に、のっぺらぼうはぽんと一つ、胸を叩く。

「兄ちゃんは、このまま地道に修行を続けてれば、きっといつかずげえ職人さんになるぜ。それは、おいらが保証する」

そして、彼なりの激励なのか、今度は出会った時のように、バシバシと肩を叩いた。

「だから、無理はせずに、これからも頑張ってくれよ」
「はい」

秋正は力いっぱい頷いた。もちろん、これでうどんの道を極める

ことが終わりであるなど思っていたわけではない。

自分は、まだまだ未熟者だ。発展途上なのだ。

それを再認識できたことが、秋正には、なんだか嬉しかった。なぜだろうか、不思議だ。

これで、心置きなく、これから頑張ることが出来るからだろうか？

「ごちそうさん。兄ちゃん。美味かったぜ」

のっぺらぼうが礼を言い、秋正も頭を下げた。

「ありがとうございます」

そして、顔を上げた時だった。

ふいに、秋正は不思議なことに、のっぺらぼうと“目が合った”気がした。

いや、確かに目が合った、のだ。

そして、目があつたまま、のっぺらぼうは相好を崩し、微笑んだ。ように、見えた。

それは、ほんの一瞬のことだったが、秋正の目に焼き付いた。そして、次の瞬間には、その幻は消え、元通りののっぺらぼうの顔がそこにあつた。

「おいらさ、兄ちゃんに会えて、よかったよ」

特に変わった様子もなく、のっぺらぼうはそう言う。

そして、彼がおもむろに立ち上がった時だった。

ガラリと再び店の戸が開いた。のっぺらぼうの動きがピタリと止まる。

その戸の向こうの闇から、二人の人物が現れたのだ。

其の十（後書き）

予定では次回で完結です。

其の十一

「何者だあ？ あんたら」

夜彦の目の前に立っていたのは、確かに話に聞いていた通りののっぺらぼうだった。目も鼻も耳もない、ちょうどむきたての卵のような顔をしたつんつるてんの男である。

その男がこちらに向けて、不思議そうに首を傾げていた。その仕草はまさに、普通の人間のそれであるが、一方で、その人物から漂ってくる並々ならぬ怪しい気配は、妖のそれであることが夜彦には分かる。

ああ、彼こそが待ち望んでいた妖だ！

夜彦の無邪気な心は浮き立った。

これがのっぺらぼうか。

確かに見れば見るほど、異様な出で立ちだ。

しかし、夜彦はその興奮を表には出さない。感情を抑えこむよう、夜彦は自分を律する。

葛葉の仕事の邪魔をすることは、いつだってタブーとされているのだ。

すると、不思議そうにこちらをキョロキョロと見ているのっぺらぼうに、横に立っていた葛葉が一步、前に進み出た。

その頭部には――。

普段の人間の姿をした彼女には不釣り合いな、ふさふさとした狐の耳が生えている。

夜彦にはその理由が分かる。

それはつまり、彼女が妖力を使うために、力の一部を開放していることを意味しているのだ。

彼女は機敏に狐の耳を動かして、のっぺらぼうのいる方へ向けた。どこか偉そうに腕を組みながら泰然と緩慢な動きで歩み寄る。

「私は、葛葉。この土地を監視する白狐だ」

「白狐、だつて？」

のっぺらぼうは仰天し、びくんとその場で跳ねる。夜彦は彼がそのまま後ろにひっくり返ってしまうかもしれないと思ったが、そうはならなかった。

彼は驚きを内に引つ込めると、すぐに表情を輝かせた。

「白狐様、白狐様！ うひゃあ、こりゃあ久々にお目にかかったぜ。縁起のいい日だなこりゃあ！」

と、葛葉が次の言葉を喋る前に、彼女にものすごい勢いで駆け寄り、ペコペコとお辞儀をしながら、握手を求める。

「どうも、どうも、おいらはしがなただののっぺらぼうですがね。どうぞ、よろしくお願いします。いやあ、こんなところでこんなに美しい白狐様に会えるなんて、こいつは吉瑞ってやつかな。近いうちに何か良い事でもありそうだぜ」

のっぺらぼうに手を掴まれ、為す術も無くぶんぶんと上下に揺すぶられていた葛葉が堪らず悲鳴に近い声を上げる。

「こ、こら、わたしの話を聞け。私はただ通りかかったのではない。お前に用事があったてきたのだ！」

途端、のっぺらぼうの動きが凍りつく。

「お、おいらに、用事？」

「そうだ。だから、その秋正との用事が終わるまで、店の外で待っていたのだ」

すると、彼はちつともそんな事など考えていなかったようで、すぐにパニックになったようだった。

両手で顔の表面を撫で回して、頭を揺する。その玉子のようなるつるの顔におかしな感じにシワが寄った。どうやら案外、肌はたぽたぽしているらしい。

「お、お偉い白狐様が、何だっておいらなんか……どんなご用件ですか？」

「うむ。実はな、私はお前が今置かれている窮状を聞いて、救済のためにここに参ったのだ。聞いたことはないか、私は幻門白狐という者だ」

すると、それを聞いたのっぺらぼうが奇声を上げる。

「げ、幻門白狐！？ そいつぁ、いつぞや聞いたぞ！」

記憶を掘り返そうと、彼は頭を小突く。

「そうそう、何でも、幻妖界とか言うところから来たっていう……」

「うむ。その通りだ」

「はあ、やっぱり」

「それで、話を戻すが……」

葛葉は腕を組み直す。

「聞くところによると、お前さんは行き場を無くしているらしいな」

「へ、へえ」

のっぺらぼうは自分のために白狐が駆けつけてくれたことに恐縮しているのか、平身低頭する勢いで何度も頭を下げつつ話す。

「実は、おいら、ここんとこ人を驚かすことがちつともできねえで、毎日当てもなく町をふらふらしてるんですよ。最近じゃ、どこに行っても自分みたいな妖なんて相手にされねえ感じで、まるで商売にならねえんです。それで、このままじゃ消えちまうってんで、かなり頭を抱えてたんで……まあ、白狐様が聞く価値もねえような情けねえ話ですよ」

恥ずかしそうにのっぺらぼうは頬をぽりぽりと掻く。葛葉はゆっくりと頷いた。

「そうか、お前も大変なようだなあ。しかし、わたしはそんなお前を助けるために今日は参ったのだ」

「とすると、白狐様は、何か名案があるんで？」

「ああ、簡単な話だ。私たちの住む世界に来ればいい。幻妖界と呼ばれているのだがな。そこならば、一先ずは安全だろうし、行き場に困ることはないだろう」

それを聞いたのっぺらぼうは両手を叩いて小躍りをする。

「そりゃありがてえ話だ。まさか、こんなところで助けてもらえるなんて、思ってもみなかったぜ。まさか、兄ちゃんが話をつけてくれたのかい？」

興奮気味ののっぺらぼうは背後を振り返り、今度はカウンター越しに秋正の手を握った。しかし、秋正には全く意味が分かっていな

いようで、目を点にしている。

それも当然だろう。彼にはこんな話は全くしていないのだ。
葛葉が続きを話す。

「まあな。その少年は私の友人だ。彼からいろいろ話を聞いてな。
お前のもとに來たのだ」

「いやあ、助かったぜ。恩に着るぜ」

「それでは、のっぺらぼう。一応訊ねよう」

言いながら、葛葉は両足を開く。ビン、と後ろに伸びた尻尾に力が入った。バチバチと火花が飛びそうなエネルギーを感じる。

夜彦はそれが何を意味するか知っていた。

彼女は別世界、幻妖界に通じる門を開くための準備をしているのだ。

凜々と周囲の空気を揺らして、彼女の声が響く。

「こちらの世界に来るのか、どうするのか？」

「そうですねえ……もちろん、そうお願いしたい、ところですが……」

すると、意外なことに、そこまで元気澆刺な様子であったのっぺらぼうが急に声を落とした。ふいに、彼が何か迷っているような仕草を見せるのに夜彦は気がついた。

なぜか、ちらちらと秋正の方をしきりに見ているのだ。

そして、ついに意を決したのか、彼はずっと息を吸うと、

「せつかくのことですが、ここは、お断りさせてもらいます」

そう言った。

明白に、言い切った。

「そうか。分かった」

それを聞いて、葛葉は尾を垂らす。張り詰めていた妖力は周囲に霧散していった。

しかし、夜彦にはその状況が信じられなかった。のっぺらぼうの発した言葉が、あまりにも予想外で、あんど口を開けてしまう。

「え？ ど、どうして？」

一体全体、こんな理想的な申し出を断ってしまうなどということがあるだろうか。今の今までどう見ても乗り気だったのに。しかし、のっぺらぼうはどこか清々しい様子で首を振る。

「どうしてって、おいらは、この兄ちゃん見てて、ちょいと思ったんですよ」

のっぺらぼうは背後の秋正を指差した。

「思った？」

「もうちょっとだけ、頑張ってみようかなってさ」

「どういう、意味ですか？」

すると、のっぺらぼうは苦笑いをしながら答えた。

「おいらはね、のっぺらぼうってのは、ワンパターンな妖なんですよ。通行人を顔がないことで驚かせるなんてね。昔っから何も変わらねえ驚かしの手法でさあ。それで、今まで妖として生きてきた。しかしね、ワンパターンてのは一番飽きられるもんだ。赤ん坊だって、おんなじことされてりゃいつかは飽きるように、いずれは廃れ

ていく運命にある妖なんですよ。だから、最近はてんでダメで、もう、おいらも潮時かと思ってた」

「なら、どうして？」

「……だから、その兄ちゃんの御蔭さ」

「ぼ、僕の？」

秋正は驚いているようで、何度も目を瞬かせた。のっぺらぼうは頷く。

「そうさ、兄ちゃんのさ、ただひたすらうどんにかける真っ直ぐな姿を見てたらよ。ちよっとおいらも、心が動かされたわけさね」

「ふん、そうだな。それで毎日秋正を見に来ていたのか？」

そこで口を挟んだのは、葛葉だった。夜彦は思わぬことに目を見張る。

「え、毎日って!？」

「そうだ、夜彦。数日前の夜、わたしがこの店の前で妖の気配を感じたのを覚えているか？ あれはこののっぺらぼうだったのだよ」

「え、ええ!！」

「あれから、わたしは気になってこの店を見張っていたのだが、こののっぺらぼうは毎晩、秋正の練習している姿を眺めているようだった」

「ははあ、さすが白狐様だ。そこまでご存知だったわけですね」

「ふははは……」

すると、褒められたことに気分を良くしたのか、彼女は高笑いをする。

「当然だろう。私は白狐だぞ」

しかし、夜彦にはそれが、彼女に手柄を持って行かれた気分にな
って、いい気持ちがない。

「ちょっと待てよ。あれは、俺がパトロールしようって言わなかつ
たら、知らなかったことだろ――」

「うるさい。黙れ！」

反論しようとしたが、ぴしゃりと彼女に言われ、夜彦は思わず首
を引っ込める。

全く、この狐の少女ときたら……。

「そうですよ。おいらはねえ、この一週間、この兄ちゃんの練習姿
をずっと店の外から見てきたんです。何だかさ、この兄ちゃんにう
どんを食わしてもらってから、妙に気になってたんだ。この兄ちゃ
んがどこかおいらと似通ってる気がしてさ」

「ふむふむ……」

「でも、その理由がようやく分かったのさ。うどんにひたすら打ち
込む兄ちゃんの姿はさ、おいらの若い頃にそっくりだったんだな。
どうやって人を驚かせようか、がむしゃらに頭を捻ってたあの若い
頃の自分とな」

だから、と力強くのっぺらぼうは言う。

「おいらも、この妖として、もうひと踏ん張り頑張ってみようかな
って思えるようになったんですよ。もしかしたら、また人を驚かせ
るいい方法が見つかるかもしれない。そう考えることも出来ますし
ね」

「そうか。お前がそう思っているのなら、良いではないか」

「い、いいのか？」

少しも引きとめようとする気のない葛葉に不安になって夜彦は聞く。

しかし、彼女はそんな夜彦に逆に呆れたようだった。

「あのな、本人が良いというものを、無理に引き止めても意味が無いだろう。それくらいお前にも分かるだろうに。私の役目はただ可能性の道を示してやるだけだ。だからその道を歩むかどうかは、結局本人の意志に依存する」

そして、彼女はくいつと目を顔のない男に向けて、

「それで、のっぺらぼう。お前はこれから、どこに行くつもりなのだ？」

と、そう優しく問いかけた。

「さあね、そればかりは白狐様、おいらにや、分からねえ。とりあえず、どこに行くのも風の吹くまま流れてくつもりさ」

それは頼りない言葉とは裏腹に、強い自信を感じる言葉だった。のっぺらぼうははくると振り返り、目の前の出来事に呆然としている秋正を見る。

「じゃあな、兄ちゃん。また会えるといいな」

と、手を振った。

そのまま、葛葉の隣を通り過ぎ、店の出口に手をかける。ガラリ、と開け放った戸の向こうから、ふわりと柔らかな夜風が舞い込んできた。その風に包まれるように、のっぺらぼうの後ろ姿が消えてい

く。

その様子を夜彦は見ていた。

彼は、もう、どこかへと行ってしまふのだ。もしかすると、ここには二度と戻ってこないのかもしれない。

しかし、その背中が消える一瞬手前で、

「またいつか、おいらが自信を取り戻した時には、この店に来てもいいかな」

何かを期待するような、そんな声が聞こえた。すると、

一瞬の沈黙の後、

「ええ、もちろん」

はつきりとした返事が夜彦の背後から聞こえた。それは、自信に満ちた秋正の声だった。

「毎度、ありがとうございました！」

彼がそうして深々と頭を下げた後、

「くはははっ……」

そんな愉快気で、ぞっと寒気を感じるような声が、店の中に響いて聞こえた、ような気がした。

それから数日経った後だった。

いつもの夜彦たちが通う高校の教室でのことである。

清々しい春の日差しが溢れる窓辺の机に夜彦と向かい会って座る一人の少年の姿があった。

彼の名は秋正。

あの、のっぺらぼうと出会った少年である。彼はいつものように静かな表情で目の前の夜彦の話に耳を傾けていた。

「……っていうわけよ。だから、葛葉のことは内緒だからな」

秋正の親友である夜彦が話しているのは、数日前の夜のことの真相である。

あの時、唯一、葛葉の正体や、その他の事情を知らなかった秋正に対し、事の全てを話してくれていたのだ。

「そうか、葛葉ちゃんって、やっぱり人間じゃなかったんだ」

全てを知った秋正はようやく納得して頷いた。それで、あの傷を人間業とは思えないスピードで治してくれたのも、理解できる。

「何だよ、お前気がついてたのか？」

「いや……」

秋正は首を振る。

「ただ、なんとなく不思議な感じがする子だな、とは思っていたけれど」

「ふうん、お前って鈍感そうに見えて、そういうことには敏感なんだな」

夜彦は肘をついて顎を手の上に乗せ、斜め下から秋正を見上げていた。午後の授業を控えて、すでに眠たいのか、彼は大きなあくびをする。

それが、秋正には、あの豪快な笑いをしていた妖を思い出させてくれた。

「それで、葛葉ちゃんって、幻門白狐、だっけ？」

「ああ、そうだぜ。大雑把な彼女の言い方からすれば、人と妖のバランスをとる仕事をしている妖と言えはいいのかな」

「ふうん……じゃあ、その幻門白狐は他にもたくさんいるの？」

「そうだな……。俺は出会ったことはないけれど、大抵は、どの町にもいるんじゃないか？」

「そうか。それなら安心だ」

そこでほっと息を吐いた秋正に、夜彦が訊ねる。

「うん、何がだ？」

「だって、それならあののっぺらぼうさんがどこに行ったとしても、きつと無事で、今も元気でいてくれると思うから……」

「……」

すると、ふいに夜彦が秋正を見ながら、沈黙したので、何事かと彼の方を見た。

彼は何か驚いているようだった。

「どうしたの？」

と聞くと、彼はぽかんとした表情で、

「いや、お前ってさ……そんな顔して笑うんだなって思ってたさ」

そう言う。

そう言われてみれば――。

秋正は思う。

自分が、今、自然に笑っているような気もする。

「アハハハ……」

そう笑い出した秋正を夜彦がさらに不思議そうな顔で見ている。

しかし、秋正はそんなことは気にしない。

うん。

何だが、今日は気分がとってもいいな。

そんなことを思い、秋正は窓の外の雲ひとつない、空っぽの青空を見上げた。

其の十一（後書き）

一応、第二話はこれで完結です。

第三話は、一ヶ月後以降の更新となる予定です。それでは、また。

其の一（前書き）

どうも、ヒロユキです。

約一月ぶりの連載となります。お久しぶりです。妖げんげんの第三話です。

今回は第二話のようなのんびりまったりとした物語ではなく、不可解な謎とピリリとしたスリルの混ざり合ったちょうどいい感じのホラー小説になることを思い浮かべながら書いています。

しかし、いかんせん僕が書く物なので、お約束というか、計画通りに事が進まないことはもはや確定的未来と言っても過言ではありません。

そんなこんなで、いやはや、上手くいくのか、いかないのか、第三話の始まりです。

其の一

机上のデジタルの電波時計が正確な時間を伝えている。時刻は、既に町の人々が寝静まっている深夜だった。

高校生の井上良佳は、今日も自宅で黙々と問題集とノートに向かい、次々と問題を解いていた。

普段から予習復習を欠かさない良佳にとっては、学校で出される課題など、物の数ではない。基本問題から応用問題まで、ほとんど流れ作業のように、すらすらとペンを進めている。

そして、気がつけば……。

また一つ、新たなページをめくる。

ふう、楽勝楽勝。

心のなかでガッツポーズを取りつつ、良佳はまたノートの上でペンを動かし始めた。頭の中には既に解法が見えていて、良佳はそこに思い浮かんだ数字をただひたすらに書き込んでいるのだ。

そうよ、集中集中。今はこの問題を解くことを考えるのよ。そして、さつさと終わらせてしましましょう。

だって、どれも、簡単なんだもの。

そんな良佳は、周りのクラスメイトから、いつも尊敬の眼差しを向けられることが多い。成績は優秀で、品行方正、曲がったことが嫌いな正義漢で、礼儀正しく、運動も出来る上、リーダーシップを取る能力に長けている。

そのため、昔から、クラス代表に選ばれたことは数知れない。

皆から信頼される、生徒の中の生徒。優等生の中の優等生である。このため、教師たちからも厚い信頼を置かれ、困ったときには彼女を頼りにする者たちも多い。

おそらく、今通っている高校で、彼女の右に出る者はおるか、名

を知らない生徒はいないだろう。それくらいに、良佳は、素晴らしい人間として周りに見られていた。

そして、また、自身もそれを認識していた。今のまま、真っ直ぐに道を踏み出していけば、人生などおそるるに足らず。

そう、数学の問題を解くように、すらすらと涼しい顔で歩いていける。ペンを走らせながら、良佳は思う。

くれぐれも奢ることなく、常識を弁え、日々精進してゆけば、自分の進む未来は必ずや前途有望なものに違いない。

そう、普通であり、優秀であることが彼女のアイデンティティなのである。

しかし――。

そんな完璧人間の彼女には、たった一つ、誰にも言えない秘密がある。

ふいに、時計の文字が深夜の一時を表示した。ピリリリ、アラームの電子音が鳴る。

良佳はノートから顔を上げた。意識を集中し、ほぼ無表情だった顔に、抑えられない喜びが溢れる。

「あら、もうこんな時間なのね」

そして、解きかけの問題を放置したまま、彼女はいそいそとノートを閉じる。卓上ライトの電源を切り、傍に置いてあったリモコンを握ると、部屋のテレビのスイッチを入れた。同時に、テレビ台の下に設置されたDVDプレイヤーが自動で起動し、録画態勢に入った。

真っ暗だったテレビ画面に、映像が映る。

すると、そこに映しだされたのは、可愛らしい少女のキャラクターだった。

『妖怪少女、一つ目鬼のあようちゃん』

軽やかな音楽と共に、タイトルが流れ、アニメ番組が始まる。それと共に、良佳の目がキラキラと輝き始めた。

「ああ、ようやく始まったわ。一週間これを楽しみにしてたのよね」
彼女は机の椅子から降り、テレビの前の近い場所に座る。知らず、興奮しているのか、近くにあったクッションをぎゅっと腕に抱いている。

すると、テレビ画面には、大きな刀を持った着物姿の少女が現れた。彼女を取り囲む屈強な敵たちと対峙し、大声で啖呵を切っている。

『ふん、これであたいを畏にはめたってかい？』

と、大きく股を開いて、空から降り溢れる月光の残滓のように輝く刀を、小枝のように軽々と振り回した。

『全く、大勢でよってたかって一人を襲うなんて男らしくないねえ。考えが甘い。甘い甘い、ドロ甘さあ！ さあ、最初に斬ってもらいたいのはどいつだい？ いくらでも相手になってやるよ！』

そして、次の瞬間、その少女は、素早い動きでぱっと高く跳躍すると、一番近くにいた敵に斬りかかった。

『せいやっ！！！』

その裂帛れっぱくの気合が込もった一声と共に、何の躊躇もなく、頭から
ぱつぱつと刀で両断する。

『う、ぎゃあああああ！！』

斬られた敵の断末魔が響いた。

真つ二つにされた体から血の花が咲いた……かと思うと、その体
が青い炎に包まれた。

そして、その引き裂かれた肉体がすぐに燃え尽き、砂塵と消え去
る。

その様子を見た、周囲の敵たちからどよめきが上がった。彼女の
その圧倒的な強さは、彼らから戦意を奪ったのである。

刀を振り切ったままの態勢の少女はくると振り返り、宙を刀で
薙ぐ。

グウウウウン――。

鋭利に裂かれた空気が、獣のような咆哮を上げた。

凜、とした少女の声が響く。

『さあ、お次は誰の番だい？ 今宵、我が愛刀「異妖花」ことようかは血に飢
えている。あんたらの温かい血をジュルジュル音立てて飲みたいっ
てよう。まだまだ相手してやれるぜ。さあ、掛かって来な！』

そんな少女の勇姿を見ながら、良佳は何度もため息をついている。
その甘美な刺激に埋もれた表情は、昼間の学校の友人たちの前で、
決して見せない表情だった。

クツシヨンが無茶苦茶に抱きしめつつ、床を転がる。

「ああもつ、可愛いなあ」

と、きゃあきゃあはしゃいだ声を出す。

「このシーンは後から再チェックしなきゃね。それに、今日の衣装はいつも着てる着物と違って、大胆な色でセクシーで素晴らしいわね。他のものとも比較しないと」

と、そんなことを一人ごちていると、廊下を歩く音がした。びくり、と良佳は背中を震わせる。

ゆつくりと、部屋のドアがノックされた。
母親だ。良佳はすぐに居住まいを正す。

「良佳あー。まだ起きてるの？」

ドア越しに寝ぼけた母の声が聞こえた。どうやら、トイレに起きたらしい。

「う、うん。ちょっとね」

「勉強に熱心になるのはいいけれど、あまり寝不足になるのはよくないわよ……ふわあ」

「は、はい。もう寝まーす」

そう返事をする、すぐに足音が遠のいていった。ふっと、安堵のため息を吐いて、良佳は肩を落とす。

「び、びつくりしたあ。まさか、高校生にもなってこんな番組見てるなんてお母さんたちに知れたら、大変だわ」

テレビ画面では、相変わらず、勇猛な少女が敵をなぎ払っている。武器が触れ合う度に激しい効果音が響き、主人公の少女の細い体躯が画面を飛び跳ねた。

それを見ながら、良佳はなんとなく、切ない気持ちになる。

私が、こんなアニメなんて見てるって知ったら、皆どう思うかしら。

親は、友達は、学校の教師は……。

きっと、きっと、変な子って思われるわ。

可愛い女の子の絵ばかり見てるなんて、おかしいもの。きっと、普通じゃないわ。

なんとか、このままバレずにゆけばいいんだけど。

憂鬱な気分が良佳の中に充満する。

ああ、やっぱり、こんな趣味はやめないと駄目かしら。

すると、画面が切り替わり、今度はアニメのエンディングテーマが流れ始めた。いつの間にか三十分も時間が経ってしまったのだ。

物悲しいリズムのその曲と共に、良佳の気持ちもしんみりしたものになる。

ふう、何だか残念。

いつだって、楽しい時間というのはすぐに去ってしまう。良佳にとって、この番組を見る時間は、日常の世界からほんの少しだけ抜け出て、違う自分になれる場所なのである。

でも、それは決して、他人に知られてはならないの。そう、決して――。

と、良佳ははっとして胸に手を当てた。気がつかないうちに自身の鼓動が異常なほど早まっていたのである。

また、まただわ！

その症状に良佳は心当たりがあった。最近、なぜか、夜になると、こんなふうに急に心臓が強く拍動することがあるのである。そして、その症状に見舞われる時は必ず、気持ちが急に落ち込む。

何よ、何なのよ、これ。

とても苦しい、わ。

まるで、そう、まるで、心にぽっかりと見えない暗い穴が開いて、そこに足元から引きこまれていくみたい……。

そして――。

しばらく、そのままぼうつとしていたのだろうか、急に、はっと良佳は我に帰る。

「あれ、私、もしかして眠ってたのかしら」

テレビ画面はもうとつくと別の番組が始まっている。若手芸人たちが、お互いを罵倒しながら、体を粉まみれにして笑いあっていた。

「ふう、もうそろそろ眠らなきゃ、明日も学校だし」

そして、テレビのスイッチを切った時だった。
ガタリ――。

ふいに部屋の窓の方から、物音が聞こえた。びっくり、と反応して、その方向を見る。

すると、窓の外に、何か、服の端のようなものが見えた。

「な、何かしら？」

しかし、それは一瞬で消えて、見えなくなる。

目の錯覚？ 気のせい？

しかし、同時に、良佳は暗い窓ガラスに映った自分のあることに気がつく。

「あれ？」

ちょうど、首筋の辺りだ。

「何の痕だろ、これ」

まるで首輪を嵌められたように、ぐるりと一周赤く細く腫れた部分がある。妙にくつきりとよく目に入る。触れてみるが、特に何とも無い。

「気持ち悪いわ。すぐに消えてくれるといいのだけれど……も、もしかして、最近の体の不調と関係なんて、ないわよね」

そう思っただけで怖くなり、良佳は、すぐにベッドに潜り込む。頭の中にある暗い幻想など、消え去ってほしかった。

明かりを消し、目を閉じると、すぐに眠りはやって来た。そして、眠る前に見つけた、奇妙な首筋の赤い痕など、すぐに忘れてしまった。

しかし、その痕こそが、この後、彼女に訪れた一つの怪事件の発端だったのである。

其の一（後書き）

話の投稿間隔は、他の連載と同様に、前話を投稿して一週間以内という計画で進行させていただきます。今回の場合で説明すると、6月6日までに次話を更新する予定です。

其の二

校庭に植えてある桜の花もすっかり散って、世間は早くも、青葉の香る季節である。

夜彦の通う高校では、近づく大型連休に向けて、クラス全体が抑えられない期待感を膨らませているように見えた。

休みに入れば、山に向かうか海に向かうか、はたまた遊園地に、ショッピング。未だ見ぬ異国の地へと旅行に向かうのもいい。

そんな甘美な空想の中、生徒たちの顔は皆、輝きに満ちていた。

そして、その生徒たちの一員である八守中夜彦もまた、その例に漏れない一人である。

定期的にテストが待ち構えている鬱々たる日々とは違う、その沸き立つような非日常感に、八守中夜彦の脳内は麻酔を打たれたようにふわふわと高揚していた。

そして、その浮かれた気持ちからか、今日の夜彦はいつもと違うテンションで、授業中も落ち着かなかった。

うーん、何か、みんなが驚くようなことをしてみたい。

と、そんなとりとめのないことを、安易に思った夜彦は、思い立ったが吉日と、授業終わりの午後の休憩、自分の周囲にいる生徒たちに呼びかけると、自身の得意分野、怪談を披露することにした。

机の上に顎を寄せ、半分寝ているような目をしているような彼らを前にし、夜彦は周囲に埃が立つのも気にせず、椅子の上に足を乗せ、大声で啖呵を切る。

「いいか、よく聞け。この八守中夜彦が聞かせる怪談話をなあ！」

長閑な午後の空気が充満する教室内に夜彦の声はよく通る。最近

は、葛葉にその子を「馬鹿声」などと罵られたこともあったが、それはそれで夜彦は気にすることもなく、いつものように声を張り上げる。

「今日聞かせる話しはなあ、聞いて驚くなよ。世にも恐ろしき、顔のない妖、のつぺらぼうの話だ！」
「のつぺらぼう？」

気だるい声で顔を上げた生徒が夜彦に言う。

「また古臭い妖怪だな。もったかつこいい妖怪の話はねえのかよ」
すると、それに応じて、周囲も「そうだ、そうだ」と野次を飛ばす。

しかし、夜彦はそんな彼らに残らずギロリと睨みを利かせた。

「うるせえな。妖に古いも新しいもあるかよ。新機種を次々発売する携帯電話とはわけが違うんだよ。いいか？ 妖つてのは昔から変わらず、それでいていつだって最先端で、最高に刺激的なのさ」

まるで、ステージから世間を風刺する歌を歌うロックスターのような気分で、夜彦は唾を飛ばす。

すると、その反応が面白かったのか、聞いていた生徒たちはいやいやとはやし立てた。

「ほう、そんじゃその最高に刺激的な怪談話を聞かせてもらおうか」
などといった煽り文句を飛び交う。

そいつはさぞ皆が飛びつくほど面白い話なんだろう？ というわけだ。

ここまで言われて、今更引くのは男ではない。そう思った夜彦は、自信満々に頷いた。

「ああ、そんじゃ。話そう」

その宣言を聞いて、まばらな拍手が起きる。

夜彦が、喉の調子を整えるため、いくつか咳をして……。

「あれは数週間前のことだった——」

と、それっぽく語りだした。

その一方で――。

そんな夜彦の様子を、遠くから、ちらちらと眺めているとある生徒の瞳があつた。

クラスの中でもずば抜けた成績の優等生として、その地位を築いている、井上良佳である。

彼女は、教卓に近い、比較的生徒たちから嫌われる席に座り、すらつとした綺麗な姿勢で佇んでいる。机の上に教科書を置き、静かにノートに目を通しつつ、次の授業の予習をしていた。それは彼女にとってごく当たり前の習慣で、連休前の休み時間だろうと、他の生徒たちのように、楽しい談笑に交わることはあまりない。

授業の内容はその日の内に完璧にマスターして帰宅する。だからこそ、そのために予習は欠かせない行動であり、それをしないと気持ち悪いくらいに良佳は思っていたのである。

しかし、今、彼女は、不機嫌そうに夜彦を睨み、耳障りな笑い声が聞こえてくるのを予習を中断して我慢していた。

彼の声が、彼女の集中力を削いでいるのである。

ああ、イライラする。

何なのよ、あの声……妙に馬鹿でかくて、癪に障るわ。

だが、同時に、良佳はそう思っていること事態が不思議だった。

なぜなら、普段もこうして騒がしい休憩時間に予習をしているのである。

いつもなら、気にしないはずの周囲の話し声がどうして今日は、こんなにチクチク刺さるのかしら。

ドクン、ドクン、と心臓が強く拍動している。奇妙な喪失感と共に、良佳の感情が、かき乱されていく。

すると、途端に力を込めて持っていたシャープペンスルの芯がぱきりと折れた。同時に彼女の中の堪忍袋の緒も、一緒に切断されたようだった。

もう、我慢出来ないわ。

両手を思い切り机について、良佳は立ち上がる。

そして、脇目もふらず、ずいずいと夜彦たちの方へ向かった。ぐっと机の間に割って入って、思い切り、夜彦を睨みつける。

驚いた夜彦の両目が大きく見開かれた。

「お、何だ？」

「何だ、じゃないわよ。夜彦君」

彼の鼻先に良佳は言葉をぶつける。

すると、その言動から、良佳のただならぬ怒りを感じたのか、周囲の生徒たちがざわつき始めた。これは面白いものが見れると期待しているのがよく分かる。

普段は、こんな風に良佳が急に怒り出すことはないのです、その事

実が彼らの好奇心を刺激したのだろう。

全く、みんなは単純なのよ。物事は楽しければいいわけじゃない。しかしながら、良佳は攻撃を止めることなく、腰に手を当てて、鼻息荒く夜彦を見上げた。

「あのね、いくら休憩時間だからって少し騒ぎすぎじゃない？ この教室にいるのは、あなただけじゃないの。もう少しその口を閉じて静かにしたらどう？ 公共の場でのマナーは分かってるでしょう？」

「お、おお？」

「それに、椅子の上に足までのつけて。汚れるし、埃が立つじゃない。それが迷惑だって分かる？」

「な、何だよ。そんなに怒るなよ」

注意を真面目に聞いていない様子の夜彦に対し、良佳はさらにむつとした。

「怒ってるんじゃないの。基本的なルールを守ってないことを注意しているの」

これはかなり強めに敵意を込めて言ったはずだった。

しかし、目の前の夜彦は、攻撃が効いていないのか、素直に謝るところか、なぜか、にやりと笑みを浮かべる。

「ハハハ、井上、お前素直じゃねえな」

「な、何がよ！」

「俺の怪談を聞きたいならそう言えばいいのに」

と横肘で軽く突いてくる。

これには、良佳も呆れて口をあんぐりと開けた。

「い、一体どこをどう解釈したらそんな結論になった!」

「あれ、違うのかよ」

「違うわ、全然違う。大間違いもいいところよ! 『常識的』に考えて、そんなことありえないわ」

すると、夜彦はしかめっ面になった。うわっ、と不快な物を避けるように、表情を歪める。

「出た、またお得意の常識の話かよ」

「あら、常識の何が悪いの?」

良佳は首を捻った。

「他人に迷惑をかけずに、きちんと自己管理出来るようになるには、まず常識的な考えを持つことが重要だわ。こういうことをしたら誰に迷惑がかかるとか、危ないとか、そういう考え方が出来ないあなたは、それだけ、お子様、なのよ」

「お、おこさまあ!!」

その言い方が気に入らなかったのか、彼はキィーと悲鳴を上げる。先ほど違い、そこには確かな怒りがあった。

しかし、良佳はそれには怯まない。

「そうよ、大体ね、高校生にもなって妖怪だの幽霊だの、浮ついたことを言っていることが、あなたの精神的な未熟さを物語っているわ。そろそろメルヘンな世界とはきっちりお別れしなさいよ」

すると、今度は夜彦の顔がさっと青ざめて、ゆっくりと良佳の顔を指さした。

「な、何だと。井上、お前、まさか……」

「何よ？」

「お前、そういうものは全く信じてないって奴か？」

「はあ？」

思わず、笑ってしまうかと思った。

「夜彦君、それは愚問ね。答える以前の事だわ。幽霊だとか妖精だとか、そんな不可思議な存在はぜつつつつつたい、この世にはいるはずがないの！」

話している内にボルテージが上がり、二人の睨みあいがさらに強くなったことが周囲の野次を沸かせた。

どんどん面白いことになってきた、と思っているのだろう。

いいぞ、やれやれ！

とそんな声が飛んでくる。

正直、うんざりな状況だった。

私、何やってるんだらう。いつもは冷静沈着な生徒なはずなのに。すると、目の前の夜彦が肩を揺らして静かに笑い始める。

「ハハハハハハ……」

「な、何よ」

一体、何がおかしいと言うのか。彼はもしかすると、頭のネジが一、二本ないのかもしれない。良佳は切実にそう思う。

「そうかそうか、分かったよ」

と夜彦は手を叩く。

「分かった？ ああ、なるほど、心を入れ替えて、これから真面目に将来を見据えて勉強に専念するのね」

「全然違うー！」

ずばり、と夜彦が良佳の鼻先を指を向けた。

「俺はそのお前のネジ曲がった考えを正してやろつと言っんだ」
「は？」

「だから、お前に妖の何たるかを教えようと言っわけだ。お前に妖がこの世に存在していることを俺が証明してやろつ」

「えっと、ねえ、申し訳ないけれど、ついに頭がおかしくなったの？」

「馬鹿言え、俺はマジに正気だ。それに本気だぞ。お前に妖を会わせてやろつ。そうすれば、お前だって嫌でも妖の存在を認めるしかないだろう。なんなら勝負にするか？」

「……」

この展開は予想外だった。良佳は次の言葉に迷う。

一体どういふつもりなのかは分からないが、夜彦の勝ち誇ったような表情から察するに、彼は本気らしい。

そして、その勝負における、何らかの勝算もあるようだった。

良佳は首をひねって考えた。

まさか、本当に妖怪を連れて来れるわけがない。そもそもそんな存在はいるはずがないのだ。

それは断じて、そうなの、だが……。

しかし、この夜彦がこれほどの自信を持っていることが良佳を不安にさせる。

有りうるとすれば、彼は何か、良佳に対する巧妙な騙しを計画し

ているに違いない。

うん、ありえない話ではない。

世の中には、幽霊や妖精などの存在を信じさせるために、心霊映像や心霊写真を作る技術なども五万と転がっているのだから、彼がその一つを知っていたとしても、なんら不思議ではないのだ。

けれど、そうだったとして……。

私がそんなものにダマされるもんですか。馬鹿にしないでよ。

良佳は、心のなかで彼をあざ笑った。

「いいわ。その勝負、乗りましょう」

「おお！」

周囲にどよめきが起こる。

その瞬間、戦いの火蓋が落とされたのが、分かった。

同時に、しめしめ、という感じに、夜彦の口端が釣り上がった。

「本気だな、井上。逃げるなよ」

「ええ、じゃあルールを決めましょう」

「いいぜ」

「あなたは私に、その妖とやらが存在することを何らかの方法で証明すること。それが成功すればあなたの勝ち。出来なければ、私の勝ち。単純明快よ、ルールはそれだけ」

でも。

良佳は指を立てる。

「きちんと私が納得出来る証明が出来なければならぬわよ。もし、ほんの少しでも、その存在が否定出来る余地があるなら、私の勝ち。分かるわね」

「いいぜ」

彼は余裕の表情だ。

それを見て、良佳は、彼が本気でルールを分かっているのか疑問に思った。

このルール、どう考えても私の方が圧倒的に有利よね……。

なにしろ、仮に、彼が妖らしき存在を連れてきたとしても、良佳はあだこうだと屁理屈をこね、適当に難癖をつければいいのだ。

そもそも、妖なる存在がどういうものであるか定義付けていないので、良佳の方は言いたい放題やればいいのである。

常識的に考えて、普通の人間ならば、こんな勝負を受けたりはしない。

本当に、どうなっても知らないわよ。
そう思っていると、

「ああ、それから……勝負となると、当然、バツゲームが必要だな」

などとさらに自身を追い詰めることを彼は言い始める。

「バツゲーム？」

「ああ」

「……ええ、そうね」

少々驚きながらも、良佳は頷いた。

夜彦君、本気で勝つつもりなのね。いいわ、それならこっちもそのつもりで、本気で行かせてもらう。

「じゃあ、こっついのはどう？」

「何だ？」

夜彦が耳を傾けてくる。

「負けた方は、勝った方の言う事を何でも一つ聞くの」

「なるほど、そいつは面白いじゃないか。それくらいのスリルがなくちゃ、勝負は楽しくないもんなあ」

「でしょう？ いい、後からあんな勝負はなかった、なんて言うのは却下だからね」

「ああ、もちろんだぜ」

やはり自信満々に夜彦は頷き、

「じゃあ、勝負は明日の夜九時に、学校で」

と、日時の指定をした。

「いいわ。私は特に予定はないし」

「ふふん、じゃあ明日だな。井上、俺の勝負を受けたこそ、絶対に後悔させてやるぜ。首を洗って待っておけよ」

良佳は、その夜彦が何気なく言った『首』という単語に一瞬、ひやりとして、

「それはこっちの台詞だっつーの！」

と、あかんべえをしてやった。

其三

「何が、『というわけ』だ？」

耳の後ろの毛が逆立っている辺り、彼女は少々苛立っているようである。胴体の後ろについている尻尾も張り詰めた緊張を表すように、神経質そうにぴく、ぴく、と動かしていた。

それまで、延々と夜彦が話していたのは、今日の昼間、夜彦と良佳の間に起きた珍騒動の顛末だった。

この世には妖怪なる怪しげな存在がいるはずがない、という彼女の持論に対し、夜彦が異を唱えた件である。

そこから話が発展し、夜彦と良佳は、本当にこの世に妖がいるのか、証明の勝負をすることになったわけであるが、夜彦はその勝負に対し、絶対の自信があった。

というのも、夜彦は、目の前に横たわるこの白狐の少女をあてにして勝負を申し出たのである。

彼女さえ来てくれれば、いくら頭脳明晰な井上良佳でも、その度肝を抜かすことが出来ると思ったのだ。

なぜなら、彼女は疑うことのない真正正銘の妖である。そこには、夜彦の敗北なる文字は、ただの一片も見当たらない。

良佳の前で、一度でもいい、変化の術を見せてやればそれで事足りる。

そう考えた夜彦は、放課後に学校を飛び出し、早速この勝利を絶対的なものにするために、こうして神社に向かい、彼女に頭を下げて頼んでいるのだが……。

何故か先ほどから、葛葉の態度が芳しくない。

「どうか、このわたくしめにお力をお貸し願えませんか？」

夜彦は、再び頭を擦りつけて頼む。

勝利のためなら、彼女の食べたい物を幾つか提供してやってもいいつもりで来たのである。

しかし、返答を求められている葛葉の方はやはり不機嫌そうな態度を変えず、ぽりぽりと前足で頭の上を掻いた。

「嫌だ。断じて断る」

と、何の迷いもなく、すっきりすっぱり言っただけだ。

「即答ですか!？」

「どこかに悩む必要があったか？」

「な、そ、そんな殺生な！ お菓子でも焼肉でも奢るからさあ……」

頼むよ、葛葉あ。

夜彦は、彼女の足に覆いかぶさるようにして、引っ張る。

「うるさい。縋りついてこられても嫌なものは嫌だ。このうつけ者が」

彼女の言葉は素っ気なく冷たい。軽く足蹴にされて突き放されてしまう。

しかし、夜彦には、彼女がどうしてこんな態度を見せているのか夜彦には分からない。

「ど、どういうことだよ。何で協力してくれないんだ？」

と訊ねた。

すると、葛葉はそんな夜彦を見下げるような目で、呆然と見つめ

た。

「何だ？ わざわざ説明しなければ分からないのか？」

と、もぞもぞ鼻を動かしながら、相当面倒くさそうである。

「そ、そんな初歩的なことなのか？」

一体、何のことなのだろう。

「初歩も初歩。そこに気づかぬとは、お前の目は節穴だ」

「お、お願いします、教えてください。ご要望があれば伺いますので」

再び頭を伏せる夜彦に、はあ、と重たい息を吐いて、葛葉こう言う。

「お前は、私に、『見世物』になれというのか？」

「はあ？」

「だから、その小娘に見せるために、サーカスのライオンにでもなれと言っているのか、と聞いている」

そんなつもりは微塵もなかった夜彦は狼狽した。

「ま、まさか、そんなことはしないよ」

ぶんぶん両手を振る。自分の話がそんな風に捉えられるとは、甚だ心外だった。

「どうしてそうなるんだよ」

しかし、葛葉の表情は相変わらず重い。鋭くきつい目付きも一切緩まなかった。

「そんなつもりはなかうと、やっていることはそういうことであろうが。何も知らない小娘に、やれ、これが妖だと私を見せびらかすのであるう」

「で、でも……」

言い返そうとする夜彦にばしつと叩きつけるように言葉を被せた。

「もし、お前が同じ立場であれば、どう思う？」

それを考慮して尚、サーカスのライオンを私に演じろというのか

「？」

「……」

夜彦は、言葉を失った。

もしも、自分が彼女の立場なら……。

そう考えてみる。

世にも珍しい人間として、妖怪たちに見せびらかされ、勝負に利用されたりなんかされたら……。

まさしく、彼女の言うとおりである。不愉快なこと、この上ない。夜彦は、自分の都合ばかり考えて、その都合に利用される葛葉の気持ちを考えていなかったのだ。全く、浅はかな話だった。

がっかりして、頭を垂れた夜彦に彼女は言う。

「とにかく、夜彦、お前には協力できない。利用されるわたしの気持ちを考えて、勝手に勝負に挑んだ罰として、しっかりその娘に頭を下げてくるんだな」

すると、彼女はいつものようにするりと人間の姿に変化する。
白銀の巨体を跳躍で円を描くようにしならせ、宙で一回転するの
である。

それは、目にも留まらぬ変身で、彼女はすでに自慢の銀髪をなび
かせて神社の屋根に立っていた。

そのまま、人間ではとても不可能な、超然たるスピードで木に飛
び移ると、そこで夜彦を振り返った。

「それにそもそも、私は今それなりに忙しいしな。お前の頼みなど
聞いている時間はない」

「え？」

「私はな、忙しいのだ」

そう繰り返した言葉が夜彦の落ち込んだ気持ちを一気に覚醒させ
た。

な、何だって？

「忙しい！？ 葛葉が！？」

まさか、彼女の口からそんな言葉を聞く日が来ようとは。思わず、
夜彦は素っ頓狂な声を出してしまった。

「な、何かの聞き間違いかな？ 今、葛葉、忙しいって」

「ああ、言ったぞ」

自信満々に胸を張る彼女。

「そ、それはどういう……？」

すると、彼女は頭から生えている耳の片方を指で摘むように、一

撫で、二撫でしてから、気難しそうに額に眉を寄せて答えた。

「実は最近、この町の周辺で『妙な気配』を感じているのだ」

「妙な、気配？」

これはまた不穏な話である。なんとなく、夜彦の興味を誘った。

「ああ、そいつがなんとも掴みどころのない奴でな。いきなり現れたり、消えたりと、なんとも神出鬼没なのだ」

「……」

「何度も正体を探ろうとしているのだが、どうにも上手くいかなくてな、全く手こずらせてくれる」

「お、おい葛葉」

「何だ？」

「そいつのこと、俺にも調べさせるよ」

正体不明な気配と聞いて、夜彦は居ても立ってもいられなくなっていた。彼女にそう頼み込むが、彼女は特に逡巡する素振りもなく、即座に首を横に振った。

「馬鹿言え、お前のようなヘナチヨコが仲間になったところで、どうやって、その妖の正体を探るのだ。そもそもそいつの気配を察知することすら出来ないくせに。寝言は寝て言え」

「そ、そんなあ」

「はあ……そもそも、お前は、今は自分のことで手一杯なのではないか？」

半眼で呆れたような目で見られ、夜彦ははっと我に返る。
そうか、大事なことを忘れていた。

「良佳との勝負だ！」

それを思うと、手段が見当たらない焦燥感で、きゅっと心臓が縮んだ気がした。

こ、こうしちゃられないぞ。

「見てみる、まだ尻の青い小僧が他人の仕事に首をつっこむ余裕があるものか」

「ぐ、ぐぬっつう」

「ともかく、自分の尻ぐらいちゃんと拭えるようになってから、出直してこい」

そう言い残して、彼女はその木のでっぺんまで上る。さわりと枝が揺れた。

それから、ゆっくりと方向転換すると、夜彦が呼び止める間もなく、南の森の方角へ、とんでもない跳躍を繰り返して飛んでいき、すぐに見えなくなってしまった。

其の四

そして、神社からの帰り道――。

夜彦は町の大通りをふらふらと当てもなく歩きながら、気もそぞろに物思いに耽っていた。

これで、葛葉からの支援は期待できないことが確定したわけではあるが、その後、明日の良佳との勝負に向けて、なんら有効な代案を見いだせないままなのである。

こうなれば、彼女の言うとおり、良佳に素直に頭を下げるか、もしくは、全く別の他の妖を連れてくるしかない。

うーん、けれど、他の妖ねえ。

夜彦は重いため息をつく。

葛葉が先ほど言っていた、神出鬼没の妖でも首尾よく見つけ、捕らえることが出来れば、それがいいのかもしれないが……。

しかし、果たしてそれが可能かどうかと言われれば、残念ながら、首を横に振るしかない。

そもそも、葛葉が言っていた通り、彼女でさえ手こずる妖に対して、夜彦が立ち向かえるはずがないのである。

それならまだ、葛葉にもう一度頼み込む方がまだ可能性が高いかもしれない。

だが、と夜彦は思う。

一度あれほど手痛く拒まれて尚、彼女にすぎるのは、果たして男らしい行動だろうか。

間違いなく、否。却下だ、却下。

夜彦は首肯する。

男のプライドというものは、いつだって安売りするわけにはいかないのだ。

しかし、一方で、このまま放っておいても、事態が好転することはない。

「こりゃ、マジでヤバイぞ」

夜彦は頭を抱えて焦っている。

「ああ、くそ。あの女が高笑いしている様が目に浮かぶぜ」

夜彦は井上良佳のことを思い出す。

彼女はクラスの中の優等生として、広く校内にその名を知られている有名人である。成績は優秀だし、校内の様々な委員会の重役を担い、常に将来を羨望されるような完璧人間なのだ。

夜彦はそんな彼女を特に意識して見ていたわけではないが、今回のことで、行き当たりばつりに喧嘩を売ってしまい、こうして窮地に立たされたことは非常にまずいと思っていた。

本来ならば、大衆の面前で、あの高々と伸びた彼女の鼻をあかしてやれるとも思っていたのだが、これでは自分の放り投げた石に躓いて、丸っ切り形勢逆転というものだ。

もしもこのまま、彼女との勝負に負ければ、彼女は学校に君臨する絶対的な正義として、その名を馳せ、反対に負けた夜彦としては、そんな高貴な人間に無謀にも牙を向き、敗れ去って行った愚かな生徒として、その名を学校の影の歴史に刻んでしまうことだろう。

そんな不名誉この上ない光景が目に見え、夜彦はゾッとする。ああ、絶対駄目だ。それだけは駄目だ。

万が一、最悪の結果となれば、これから残りの夜彦の有意義な高

校生活に、大きな影を落とす原因になりかねない。

そこから考慮すれば、やはり、彼女に負けるわけにはいかないのだが、とはいえ、それはあまりにも無謀なこと。

とすれば、残された道は一つしかないな。

「ここは素直に、井上の奴に頭を下げて、勝負を無かったことにしてもらうのが一番かなあ」

そう独りごちる。

そうなれば、勝負を逃げた夜彦に対し、その後、臆病者としてのレッテルが貼られることになるかもしれないが、このまま勝負を挑んで、無残にも玉砕するよりはいくらかマシだ。そう思ったのである。

夜彦の望む男らしい生き様を貫き通すのならば、世に名を馳せる勇猛な戦士とはかくや、と思われるような見事な玉砕も已む無しだが、そんなプライド守るための行為とバラ色の未来が光り輝く貴重な高校生活とを天秤にかければ、どちらに傾くかは、言わずもがなだ。

と、そんなことを考えていると――。

「私がどうしたの？」

聞き覚えのある声がして、夜彦は振り向く。

すると、そこには何と、制服姿の井上良佳本人が立っていた。

「あ、あ、あ……」

あまりの展開に、言葉を失い、夜彦は震えながら口を開閉させる。

「あの、夜彦君？」

「……いいやあ、井上じゃないか、奇遇だなー！」

慌ててそう言い繕い、愛想笑いをしてみせる。

ここであからさまに教室の時のような敵意を見せては、会話を続けにくい、そう思ったのである。

偶然とはいえ、ここで彼女と出会えたことは、あの勝負のことを話す十分なきっかけとなったのだ。

あわよくば、ここで先程の勝負を取り消すことが出来るよう、その努力をしなければならぬ。

そう考えた夜彦は、焦りを隠そうと、必死に平静を装う。

「い、井上は、こんなところで何してるんだ？」

そう、まずは自然な会話を成立させていくところから。焦りは禁物だ。

しかし、肝心の良佳から、返事が返って来ないことに夜彦は気がつく。不審に思っ、目の前を見ると、良佳の姿が見えない。

「あ、あれ？ 井上？」

会話の途中だと言うのに、もう帰ってしまったのだろうか。夜彦はきよろきよろと周囲に眼を向ける。

すると、いたいた。

井上良佳は近くの書店のウィンドウをしげしげと覗き込んでいる。彼女のことだから、勉強のための参考書でも買いたいのだろうか。

しかし、ここで彼女との会話を終わらせるわけにはいかない。

「おい、井上」

と近づいて肩を叩く。

「うん？ 何か用？」

「ああ、ええと、その、さっきの話なんだがな」

「さっきの話って何？」

「だから、しょ、勝負のことだよ。ほら、教室で決めたじゃないか？」

しかし、彼女はなぜかきよとした表情で、

「なにそれ、私、覚えてないけど？」

「え！？」

夜彦は耳を疑った。

勝負のことを覚えていない、だって？

これは一体全体どういうことなのか。

夜彦は彼女が何かしらの冗談のつもりでそう言っているのかとも考えたが、少なくとも夜彦が見る限り、彼女がそんな嘘をついているようには見えない。

反応がそれだけナチュラルなのだ。

「ほ、本当に？」

「うん。全然覚えてない」

彼女が真実を言っているのならば、これは願ってもない状況なのだが、夜彦としてはどうにも腑に落ちない。

何かの間違いということはないのだろうか。

夜彦は彼女の肩を掴んで揺さぶる。

「井上、いいか？ もう一度聞くぞ、本当に、教室で話した勝負のことを、全然全く何も覚えていないのか？」

すると、彼女はいやいやと首を振り、うつとおしそうな様子を見せた。

「しつこいなあ、嘘じゃないったら……それよりも夜彦君、こっちに行こうよ」

「え？」

「だから、こっちこっち」

そして、彼女は今まで見たこともないような無邪気な顔をしてにつこり微笑むと、急に夜彦の手を引いて通りを歩きだした。

「お、おい、どこに行くんだよ？」

「いいからいいから……」

其の五

そうして、彼女に手を引かれ、連れて行かれた先は――。

「ここつて、ええと……おもちゃ屋？」

おずおずと訊ねた夜彦に対し、良佳はにっこりと笑って答える。

「フィギュアショップだよ。たくさんフィギュアがあつてすごいでしょ？」

「あ、ああ……」

夜彦は嬉々として商品の陳列棚を見つめる良佳を横目に、ぐるりと店内の様子を見回した。

広い店内は、色とりどりの明るいライトに照らされ、彼女の言うフィギュアが所狭しと飾られている。見覚えのあるロボットや戦艦のプラモデルもあれば、ミニカーや電車の模型なども陳列されていた。皆、精巧な細工がされ、本物と見紛うほどに再現度の高いものもある。

しかし、夜彦と良佳がいる一角は周囲と空気が違った。

夜彦は思わず、生唾を飲み込んで聞く。

「なあ。これつて、いわゆる、美少女フィギュアってやつか？」
「うん」

即答かよ。

夜彦はゆっくり棚にずらりと並ぶフィギュアに目を移す。

まあ、確かにそのものずばりではあるけれど……。

様々な服装でチャーミングポーズを取っているその人形たちは、

やはり、皆一様に丁寧に細工がされている。

柔らかな表情で笑う彼女たちの瞳や眉などの小さなパーツ、微妙な口の形や髪の跳ね具合いまで、不自然さもなく、綺麗に整っている。

しかし、今にも下着が見えてしまいそうな際どいポーズや、過度にバストが強調された角度に、夜彦は目のやり場に困った。

「……あの、お前さ、こういうのに、興味あんの？」

「え、いけない？」

驚いて目を瞬かせた良佳に、夜彦は慌ててぶんぶんと首を振った。

「い、いや、いけないってことはねえよ。好きな物は人それぞれだしな」

「そう？」

「ああ。ただ、その、女子じゃ珍しいなって、そう思ったただけだ」
「ふふ、だよー。私って少し変わってるのかもー」

そして、彼女は無邪気にふわりと笑う。

「わたし、かわいい物とかキャラクターが、大好きなんだよ」

その様子がいつものキリリと凛々しい彼女とどうしても上手く噛み合わず、夜彦は調子が狂ってしまう。

一体全体さつきから彼女はこうしたというのだろう。こんな場所に俺なんか連れてきて。

それに、いつもと違って丸っ切り人が変わったみたいだし。

夜彦は首をひねる。

ああ、そういえば、どうしてあの勝負のことを忘れてたのかも、よく分からなかったな。

うーん、良く解らん。

しかし、そんな夜彦の考えなど露知らず、良佳は脳天気^{なまけ}にフィギュアを指さして夜彦に話しかける。

「ねえ、この子のコスチュームかわいいでしょう？」

「あ、ああ。そうだな」

夜彦は上の空で彼女の話に適当に相槌を打つ。
と、急に良佳があるフィギュアを見つけて指さした。

「あ、あようちゃん見つけたー」

「あよう、ちゃん？」

夜彦が視線を向けると、ショーケースの中に、一つ、純和風な着物に身を包んだ少女のフィギュアがあった。

いや、着物というか、もはや、別の服装と言った方が正しい具合に短くカットされた衣装は、派手な赤色の下地に幾筋もの金色の糸が織り込まれた不思議な模様が施されたもので、それを着こなす少女は、長い刀を携えて、今にも飛び掛ってきそうな決めポーズをとっていた。

しかし、それよりも夜彦の目を引いたのは……。

「こいつ、一つ目だ！」

「そうだよ。一つ目鬼のあようちゃん」

「妖怪……！ それも、阿用の郷^{あようのさと}の一つ目鬼か！」

興奮した夜彦は飛び跳ねる。

「え？ なにそれ？」

「出雲国風土記^{いずものくふうじ}、っていう古い書物に載ってる怪談だよ。昔、出雲

の国、こいつは今の島根県だが、その阿用って地域で、目が一つの鬼が現れたって話がかれてるんだ」

「へえー」

感心したように良佳がため息を漏らす。

「夜彦君って、怪談になるとやたら詳しいよねー」

「へへん、そりゃあもちろんだぜ」

なんていつても、俺は本物の妖と知り合いだしな。

「ま、どうでもいいけど」

しれっと、彼女が言う。

「うん？ 何だか辛辣な一言が聞こえた気がするが……」

と、その時、夜彦の視線がフィギュアの足元に書かれた値段の札を捉えた。

そして、しばし沈黙した後、絶叫する。

「い、一万円！？ こ、このフィギュア、い、一万円もするのか！

？ ちょっと高すぎだろ！？」

「高すぎ？ これくらい普通だよー」

「おいおい、せめてこの半額くらいで売れないのか」

「あれ、もしかして、夜彦君、買ってくれるの？」

良佳はそう言って暢気に目を輝かせる。

「ば、ばばば馬鹿言つなよ！ なんでお前のために俺が買っんだ

よ。いつ話がそんな流れになった。そもそもこんなアニメキャラクター、俺はよく知らないし、たかだか人形にそんな大金が払えるかってんだ！」

「なんだー、残念」

ぷう、と彼女は頬をふくらませる。

そのいかにも憂鬱そうで無防備な仕草が妙に少女っぽくて可愛らしくて、夜彦は少し胸が高鳴った。

そして、そんな自分をすぐに嫌悪する。

何だよ、なんで俺は井上なんかときめいてるんだ？ 勉強のことしが頭のない超インテリ女だぞ。全然可愛くないっつーの。

「そ、そう言えば勉強で思い出したが……お前、塾は行かなくていいのか？」

夜彦は動揺した気持ちを落ち着けながら彼女に聞いた。

「へ、塾？」

「そうだよ、お前、学校が終わったら毎日のように塾に行くじゃないか。今日は休みなのか？」

すると、急に彼女の表情が凍りつく。そのまま、何の反応も見せない。

「……」

「おい」

夜彦は彼女の肩を叩いた。

今度は一体どうしたと言っただろう。

と、

「——とか……」

「へ？」

「塾とか……」

途端に、彼女の肩がわなわなと震え出す。

「塾とか塾とか塾とか塾とか塾とか塾とか塾とか……」

「なん、だよ」

「塾とか、どうでもいいし!!」

まるで、夜彦に今にも掴みかかりそうな勢いで彼女は怒鳴った。
ぎよっとした夜彦は思わず一歩退く。

背中がショーケースに当たって、衝撃で中の商品がぐらりと揺れた。

「お、おい、怒ったのか？」

「別に……」

すると、彼女は視線を落とし、口を閉じて歯ぎしりをした。その表情があまりにも無表情で、異常だったので、夜彦はゾツとする。
こいつ、ほんとに大丈夫かよ？

「私、帰るね」

「え、おい!!」

急に良佳は方向転換し、夜彦の方を見向きもしないで、そそくさと店を出て行く。

夜彦は慌ててその後を追った。

しかし、店を出たところで、すでに彼女の姿はなく、二、三度左

右を見渡した後で、呆然とその場に立ち尽くした。

もう、帰ってしまったのだろうか。それにしても、まるで、その場から跡形もなく消え去ってしまったかのようなスピードだ。

「くそ、あいつ、どういっつもりだ？」

夜彦はそうばやいて、仕方なく、家路につくため進行方向を逆に向ける。

「まあ、明日にでももう一度話しかけてみるか。勝負の事も一応確認しておく必要があるしな」

そう独りごちた。

しかし、その日の異変はそれだけでは終わらなかったのである。

其の六

井上良佳と思わぬ遭遇を果たした後、夜彦は、自宅への道を、なんとなく上の空で、ふらりふらりと歩いていた。

茜色に染まる空を飛んでいく鳥たちを見上げながら、つい先ほどの唐突な出来事を夜彦は、頭の中で回想し、あれが一体何を意味するのか、考えていたのである。

「井上、良佳……」

いつもとは違う、正反対と言っても過言ではないほどに、無邪気な彼女の表情がふわふわとした様子が浮かんでくる。

そして、同時に、別れ際に見せた、あの凍りつくほどの無表情、あれらが意味するのは、一体……。

と、夜彦はそんな考えに夢中になるあまり、間抜けにも、自宅への道ではなく、学校への道を逆戻りしていることに気がつかなかった。

しばらくして、見覚えのある校門が見えてきてから、ようやくそのことに気づき、しまった、と顔をしかめる。

「何やってんだよ、俺」

とばやき、自分で頭にげんこつを入れた。

校舎の方では、もはや、放課後のクラブ活動も終わってしまっているようで、ほとんど人影はない。

昼間には生徒でいっぱいである教室の明かりも今は消え、ただぼつぼつと教員のいる部屋の光だけが、寂しく夕暮れの中に浮かんで見えた。

その時、ふいに、夜彦の目が、横断歩道に数名の生徒の影を捉えた。

ただ、部活や勉強で居残っていた生徒と一緒に下校しているものだと思った夜彦だったが、その中の一人の姿を見て、思わず悲鳴を上げてしまったかと思った。

「な、な、な！」

何と、その少女は、つい先ほど会ったばかりの井上良佳本人だったのである。

彼女は真面目そうな顔をして、何やら友人たちと会話をしながら、こちらに渡ってきていた。

すると、歩道の前で立ち尽くし、絶叫寸前で目を白黒させている夜彦に気がついたのか、良佳は、友人たちに手を振って別れると、駆け寄ってきた。

いつものようにどこか偉そうな堂々とした態度で、話しかけてくる。

「あら、夜彦君じゃない。てっきりとつくに帰ったのかと思ってたけど、まだこんな場所で油売ってたの？」

「え、え、え？」

しかし、夜彦は驚きのあまり、まともに返事を出来ない。

その様子に、良佳は夜彦の異変に気がついたようで、

「何よ、どうしたの？」

と怪訝そうに眉をひそめた。

そんな彼女の腕を夜彦は引っ張り、歩道の先の電柱の影まで連れて行く。

「きゃ、一体何よ？」

「井上、ちよつといいか？」

夜彦は取り乱さないよう、深呼吸をして、気持ちを整える。

「お前、まさかと思うが、今学校から出てきたのか？」

「は？ そう見えなかった？」

何を当たり前のことを、と彼女は言いたげな表情をする。

「それがどうかしたの？」

「い、いや、そう見えたから、こっちは困ってるんだ」

「……？ あ、意味が分からないんだけど？」

「いいか、よく聞けよ」

と夜彦は彼女の肩を掴んで、両目をのぞき込みながら、問い詰める。

「お前、さっきまで俺と一緒にいたよな？」

先程の井上良佳と目の前の彼女が同一人物であるならば、この質問にイエスと答えなければ、いけない。

しかし、良佳はぱかんとした顔で目を瞬かせた。

「何を言ってるの？ 夜彦君、寝ぼけてるんじゃない？ わたしは今まで、学校の会議室で、委員会の話し合いをしてたの。あなたと一緒にいたはずがないじゃない」

「ば、馬鹿な！」

「ちよつと、どういうこと？」

夜彦は頭をぶるぶると振った。

「いや、そんなはずがない。俺は確かにお前といたんだ。そう、町の通りで、一緒にフィギュアシヨップにいた！」

そして、彼女の肩をぐわんぐわんと強く揺さぶる。

自分の記憶に違いがあるはずがなかった。人違いということもない。自分が会って話した彼女は、ちゃんと井上良佳だった。

そこに、

そこに、間違いがあるはずがない。

ただ……ちよつと様子がおかしかったけれど。

夜彦は思い出す。

そう、ちよつと、と言うより、かなり、変だったけど。

まるで、別人のよう、だった、けど。

「ちよつと、夜彦君、いい加減に離して！」

彼女は痛がつているようで、そう叫んだ。

おそらく、手に力を込めすぎたのだろう。夜彦の指が彼女の腕に

食い込んでいた。

それに気づいて慌てて手を離す。

「あ、ああ。悪い」

「一体何なのよ。新手の冗談？」

良佳は事情の分からない上に、あれこれと質問されて、苛立っているようである。

「違うよ。本当に会ってたんだ。けど、お前、いつもと様子が違っ

て、ずいぶん、陽気な奴だった」

「何よそれ。申し訳ないけど、生憎あなたの茶番に付き合ってる暇はないの。これから塾に行かなくちゃならないし」

「あ、塾……」

ふいに、先程の別れ際、彼女が見せた凍てついた表情がフラッシュバックする。

あの、凍てついた、無表情……。

「何よ、まだ何かあるの？」

そんな夜彦を彼女はぶすりとして睨みつける。その顔には、これ以上意味不明なことは聞くな、と書いてあった。

「い、いや、何でも」

「じゃあ、私行くから。いい？ 『明日の勝負』は逃げないでよ」

その言葉に、夜彦は絶句する。

「……！」

勝負のこと、やっぱり、覚えてるのか。

じゃあ、さつき出会った彼女は、一体、何だ？

そんな混乱の極みに至っている夜彦の心境など知るはずもなく、彼女はくるりときびすを返すと、不機嫌そうに目を尖らせて、

「じゃあ、せいぜい明日まで私を騙す算段でも整えておくといいわ」

と吐き捨てるように言って、そのまま走り去ってしまった。

其の七（前書き）

ちよつと予定より遅れ気味ですが、他の連載中の作品が完結すれば安定して投稿出来るようになると思います。

其の七

いったい……。

いったい、どうしたんだろう、私。

早鐘のように脈打つ心臓の鼓動を感じながら、井上良佳は安全地帯に逃げこむように、自室のドアを勢いよく閉めた。

ボタン――。

すると、その振動で部屋が揺れ、机の上に置いてあったお気に入りぬいぐるみがぼとりと落ちる。

「あ……」

思わず、声が漏れた。

その人形は机の横の椅子に当たって跳ね返ると、床を転がり、壁に当たって、顔を良佳の方へ向けた。明かりのない部屋の中で、その人形の瞳はどこか、ドアを背もたれに胸を押さえている良佳を、心配そうに見つめている気がする。

しかし、

しかし、その瞳に、良佳は大丈夫だと答えることは出来なかった。良佳は……自分の中で、何が起きているのか、全く把握出来ないのだ。

この鳴り止まない心臓の音が何を意味しているのか、理解出来ない。ここ数週間に及ぶ、その体の変調が、単なる思い過ごしなのか、まずい状態なのか、判断がつかない。

言葉にし難い不快感が、自室にたどり着いた良佳を襲っていた。

良佳は思い出している。

今日の異変の始まりは、確か……。

「夜彦君と、言い争いをした辺りだったかしら」

そう、あの直前、なぜだが、原因不明の胸騒ぎが良佳を襲い、気持ちを落ち着かなくさせたのだ。

だから、あんな風に普段は気にもとめないことで、彼と馬鹿みたいな勝負をすることになってしまった。

そして、それは収まらず、放課後の委員会の会議中でも……。

「委員会中では、ついイライラしてシャーペンの頭を齧っちゃうし」

こんなみつともないマネ、私らしくないわ。

もし、あんなところを誰かに見られてて、落ち着きがない子って思われたら、どうしよう。

『私は、もつと出来る子じゃないと、いけないのに』

はあ、憂鬱、憂鬱……ド憂鬱だわ。

良佳はそう思っ頭をぶるぶると振り、意気消沈して、ペタン、とその場に座り込んだ。

それにしても、分からない。

この体の不調が、気持ちの揺らぎが……。

なんらかの身体的な病気が怪我の症状であれば、まだ分かりやすいのだが、そうではないことを、良佳は、『確信』していた。

風邪ではないし、頭痛があるのとも違う、足をくじいたわけでもない。

ではそれは、何らかの精神的な疾患から来る症状かと問われれば、それも首を縦に振り難い。

とにかく、正体不明なのだ。

もう、一体なんなのだろう、この胸のもやもやした感じは……。

気持ちが落ち込んで、ふさぎこんでいるのは分かるんだけど、ただ、ストレスの重みがのしかかっているのとは、違う。

そう、違うの。

良佳はそう強く思った。

なんて言うか――。

ぽっかりと大事なものが、無くしてはいけないものが、抜け落ちたような、感じ。

「……」

良佳は無言のまま、落ちたぬいぐるみをだきよせた。むぎゅう、と無理やり頬を寄せるが、満たされた心地はしなかった。むしろ、言い表せない虚しさが明かりのついていない部屋の隅から忍び寄ってきて、良佳の体の中にドクドクと染みこんでいくような気がした。怖くなって、テレビをつける。

そして、リモコンを操作し、録画していたあのアニメを再生した。一つ目鬼のあようちゃん。彼女が画面の端から端を飛び回る彼女を見ていれば、いつだって元気な気持ちになれるはずなのに、今日はちっともその効果はない。

「本当に、なんなのよ」

と、ふいに、良佳は机の上に置いてある鏡に目が入った。はっとする。

そこで、またしても『あれ』に気がついたのである。

「まただわ」

良佳は思わず、首もとに手を伸ばし、恐る恐る『それ』をなぞる。

「本当に何なのよ、これ……」

その首もとには、まるで引っ掻いた後のような、赤い筋状の痕が、ぐるりと首の周りを一周、くつきりについていたのである。

いや、ついていどころではない。

それは、くつきりと、赤く、僅かに、光っていた。

「気持ち、悪いわ……」

昨日見たときには、こんなことにはなっていなかったのに。
恐怖で震える、自分の声。

これじゃ、まるで、誰かに見えない『首輪』をかけられたみたいじゃない。

そう思った時、ぷつん、と良佳の意識は途切れてしまった。

其の八

翌日、夜彦は昨日のとてもない出来事の余韻を残した寝ぼけた頭を引きずって、学校に登校していた。

自分の机に座って、憂鬱そうに肩肘をつき、半眼で窓の外を眺めている。窓の外は、夜彦の今の心境を映しだしたような、どんよりもやもやとした曇り空だった。余計、気に混乱が生じてしまう。

夜彦は眼を閉じてみた。

昨日出会った二人のことを、ゆつくりと思い出してみる。いつも通り、生真面目そうな仏頂面だった彼女と、いつもとは違う、明るい魅力に溢れた彼女。

何度考えても、やっぱり、あれは何かの記憶違いでも、人違いでもないよな……。

しかし、そうだとすると、昨日の放課後、あの優等生少女井上良佳は、この町に二人存在していたことになる。

「うーん……」

それは、誰でも判る明らかな異常事態だった。瞬間移動でも出来ない限り、同じ人間が別々の場所に同時に存在するなどということはないのだ。

夜彦は頭をかかえる。

果たして、彼女は超能力者なのだろうか。彼女が人類の未知なるパワーを秘めた存在だと言うのなら、それも可能だろう。しかし、少なくとも夜彦はそんな人間にこれまでめぐり会ったことはないし、良佳がそんなイメージに当てはまるような少女ではないことは、間違いない。ただし、彼女のテストの点数に限っては、本当に超能力でも使っているのではないかと疑いたくなるほど高いものだが……。

そうだ、こう考えてはどうだろう。

彼女が天才的なマジシャンだという説だ。

例えば、ステージで観客にダイナミックで奇想天外な手品を見せるマジシャンならば、さも同時に二人の同じ人間が別の場所で存在しているような、そんなありえない現象を引き起こすことも可能なのかもしれない。

しかし、思いついてすぐ、その考えには現実味がないことに気がついた。

仮に、そんな大掛かりなことを彼女がしたところで、それに何の意味があるというのか、という疑問が沸いたのだ。

夜彦を驚かすため？ いやいや、あの生真面目で、茶目つ気の欠片もない彼女が、そんな大げさで大したメリットもないイタズラを行うはずがない。

ナンセンスだ。却下だ、却下。

しかし、そうなると必然的に、目の前にある道が見えてくる。夜彦がその他に用意出来る答えはやはり一つだった。

「昨日、俺が見たあいつは、なんらかの怪現象の一つだった」

そうだ、そうに違いない。

その説に確信を持った夜彦は、持っていたシャープペンシルをくると回すと、ノートの新しいページに、こう書いた。

『ドッペルゲンガー』

うん、これはありうるぜ。

ペンの先でこつこつと文字を叩く。

夜彦は、昔、話で聞いたことのある程度の記憶を意識の底から引っ張り出してみる。

「正直、あんまり詳しくは知らないが、自分と瓜二つの人間が、たまに見えたりすることがあるんだよね……」

記憶が明瞭ではないので、情報はあやふやだが、確か、その存在を見た者は――。

「そう……そうだ、死んじまうって聞いたことがあるぞ！」

おいおい。

夜彦は絶句する。

これはただごとではない。早急に手を打たなければ。彼女の命に関わる！

「……お、おそらく、ドッペルゲンガーの疑いが強いのは、最初に会った井上の方だな。あの奇妙に陽気な感じは、いつもの彼女の様子と、明らかに異なっていた」

夜彦は昨日、あの少女を見て、化物、とは思わなかったが、異常と捉えるには十分過ぎるほどの要素があったことを思い出す。

あの、天真爛漫な笑みの後の、ぞっとするような冷たい表情。

ああ、間違いない。きつとあいつがドッペルゲンガーだ。

しかし、そこまで考えて、夜彦は新たに疑問に思う。

あれ？

もしそうだとすると、この場合、どうなるのだ。

何しろ、井上良佳のドッペルゲンガーに出会ったのは、彼女本人ではなく、夜彦の方なのだ。夜彦が自身のドッペルゲンガーを見たというのならはまだ理解できるが、彼女のそれということになれば、事情は変わってくる。

うーん、ドッペルゲンガーって、他人のものも見えるものだったけ？

「うがー、分かん！」

夜彦は頭を掻きむしった。妖についての知識はあるものの、こういう特殊な怪奇現象ともなると、全く対処法などは分からない。

ここは、葛葉に聞いてみるのがいいかな。

と、そこで、教室のドアが開いて、一人の少女が入ってきた。

「井上、良佳！」

いつも通り、その少女は、自信満々に胸を張り、颯爽と教室を歩いていく。周囲の人間が、思わず会話を止めてしまうような、そんなはつとするオーラを振りまきながら、机に腰掛けた。

そして、何をするのかと思えば、彼女はまだホームルームも始まっていない一限目の教科書を取り出し出している。

おそらく、この時間から授業の予習を始めるつもりなのだ。全く、恐ろしく勉強中毒な奴だ。夜彦は見ているだけで嫌になる。今に数学の公式と英語の熟語でしか会話が出来なくなるに違いない。

しかし、そんなことを思いながらも、いつも以上に彼女の様子に注意深く目を走らせる。

顔色は、いつも通り。

どこかに大きな怪我をしているわけでもない。

背中にファスナーは……さすがに無いな。

もしかすると、彼女は外側の皮を脱ぎ、脱皮する形で二人に分裂出来るのではと、想像を巡らせたのだったが、普通に考えて、そんな馬鹿な話があるわけがない。

彼女は一人の人間としてそこに存在していた。

はふん、と夜彦はため息をついた。

何だ、結局いつも通りじゃないか。どこにも異変は認められない。

背後霊のように、ドッペルゲンガーが彼女の後ろに引っ付いていたのなら、一目瞭然なのだけれど。

「あっ！」

そこで、夜彦は急にある事に気がついた。

大事なことを忘れていた。

昨日の怪現象の原因が彼女ではなく、自分にある可能性について、全くもって検討していなかったのだ。

仮にそうだった場合、昨日の奇妙な出来事は全て、夜彦自身が何らかの白昼夢を見ていただけだった、などという結論もありうる。

思えば、最初、妙に陽気な良佳に出会ったとき、夜彦は葛葉に申し出を断られ、意気消沈したまま、現実から目を背けたい欲求に駆られていたのだ。その感情がふいに、夜彦にあんな非現実的な幻想を見せたということも、全く否定できるわけでもない。

まあ、認めたくはないのだが……。

しかし、

しかし、思い出してみると、あの陽気な井上良佳が勝負の記憶を覚えていなかったのも、夜彦に都合の良い展開を心の奥で密かに期待していた結果なのではないだろうか。

それも、夜彦が妄想を見ていたのではないか、という証拠になりうる。ますます、その可能性が夜彦の中で膨らんだ。

そんなことを考えていると、教室のドアが開き、担任教師がそこから姿を見せる。まだ教室内で席についていない生徒に対し、早く席に戻るよう注意を飛ばし、自分は教卓の前に立った。

日直が、号令をかけ、全員が立ち上がり、一礼をする。毎日の決まりきった動作だ。

しかし、礼が終わり、席に着くとした時だった。視界の端に先ほどまで見ていた、井上良佳が映った。

あれ？

夜彦は眉間にシワを寄せた。彼女の様子がおかしいことに気がついたのである。

すでに号令を終えて席に座るべきなのに、なぜか彼女は礼を終えたときの姿勢のまま、直立し、真っ直ぐ前を、虚ろな目で見ているのだ。そして、その横顔から見える頬と額には、びっしりと汗が吹き出している。

「おい、井上？」

夜彦がそう呼びかけた時だった。

彼女は体に繋がっていた糸が切れてしまったように、ふらりと振り子のような動きを見せた後、その場に倒れてしまった。机と椅子がひっくり返り、大きな物音を立てる。

きゃあ、と女子生徒の悲鳴が聞こえ、男子生徒はどうしたどうしたと彼女の元に駆け寄った。

その中で、夜彦は見逃さなかった！

良佳の首もとに、現れた、その印を。

それはまるで、彼女にはめ込まれた首輪のような……。

「あ、赤い……痕だ」

そう呟いた瞬間だっただろうか。夜彦の耳元を何かが横切ったのを感じた。ごお、という風が吹き抜け、窓を超え、町の方へ消えていく。

あれは、何だ？

もしかすると、ドッペルゲンガーの本体か？

窓の向こうへ目を向けるが、既にその何かの姿はどこにもなかった。しかし、間違いなく、夜彦は確信する。

今の『何か』は間違いなく、井上良佳の体から抜け出たものだ。

怪現象の発生だ！

教室に視線を戻し、良佳を見ると、彼女は意識を取り戻したようだった。背中を抱えている教師に向かって弱々しく笑いかけて、「大丈夫」と頷いている。

何が大丈夫なものか。

これを放置しておけば、きっと取り返しの付かない問題になるぞ。夜彦の頬にピリリと緊張が走った。

其の九

その後、体調が回復するまで大事を取るという担任の判断で、井上良佳は数時間保健室で休息を取るという事になった。

彼女はふらつく足取りのままで、数名の保健委員に連れられていき、残った生徒にはそのまま一時間目の授業が待っていた。

しかし、それで夜彦の心の疑念と懸念が消え去るわけもなく、席についた後も、しきりに考えを巡らせていた。

彼女の身に起こっているのは何なのか。彼女の安全を確保するためにはどうすればいいのか。

黒板に書かれた数式もそっちのけで、ペンをくるくる回してばかりいるので、教師に問題の答えを聞かれても答えることが出来ない。ばさつとするな、と注意をされても、周囲の生徒から失笑されても、夜彦は数学をする気にはならなかった。

さっきの井上良佳の首から見えた痕が目には焼き付いて脳裏から離れない。

そして、授業終わりのチャイムが鳴ると同時に、夜彦は我慢できずに教室を飛び出した。保健室に向かうのだ。背後から教師が廊下を走るな、と怒声を飛ばしてきた気がするが、構わず、階段を駆け下りた。

保健室の戸を開け、教師に彼女と話がしたいと告げる。しかし、その若い保健の教師は渋い顔をした。

「さっき寝付いたところなんだから、今は静かにさせてあげたいんだけどねえ」

「すいません。どうしても聞いておきたいことがありまして」

夜彦がペコペコと頭を何度も下げると、諦めさせるのは面倒だと

考えたらしく、カーテンが閉めてある奥のベッドを覗き込み、良佳に了解を取った上で、ようやくオーケーが出た。

「本当に少しだけよ。あんまり無理させないようにね」

「はい、分かりました！」

嬉しさでつい大声で返事をする、教師はたちまちしかめっ面になり、うつとおしそうに口元に人差し指を当てた。

「いい？ し、ず、か、に、よ」

「は、はい」

カーテンの向こう側には、ベッドに弱々しく横たわった井上良佳がいた。制服姿のまま、掛け布団を肩までかけて縮こまっている。そこには、いつもの優等生らしい、堂々とした様子は微塵もない。むしろ、彼女には似つかわしくない、風雨にさらされて小さく鳴いている子犬のような弱さが、そこにはあった。

「夜彦くん……」

と、こちらを見上げて呼ぶ声にも、覇気がない。

「井上、大丈夫かよ」

「う、うん」

彼女は頷く。

「多分ちょっと眠ればすぐに元気になると思うから平気よ。クラスの皆にもそう伝えておいて」

「井上……」

夜彦は髪の毛をくしゃくしゃと掻いた。

全く、こんな時でもこの少女は、自分より他人のことを気にかけているのか、と驚くというより呆れる。

本当に、生徒の鑑だな。

夜彦にはとても真似できそうになかった。彼女にはそれだけの強い心があるのだ。

「それより、何か私に用なの？」

「ああ、それは……」

夜彦は言いかけて、何から聞くべきか、迷う。すると、それより先に彼女が口を開いた。

「分かった、今日の勝負のことでしょ？」

と言う。

「へ？」

「別に私はいいわよ。おじやんにしても。あの時は私もつい勢いであんなこと言っちゃったし、ちょっと調子に乗ってたか——」

「馬鹿、そんなことじゃねえよ」

夜彦は彼女の言葉を遮って首を振る。

「じゃあ、何？」

きょとんとして、不思議そうに見上げる良佳に、夜彦はそつと周囲に目を配り、ちょうど保健教師が用事で部屋を出て行ったのを見計らって彼女に耳元で話しかけた。

「お前、何か隠してることがあるだろ」

「か、隠してること？」

「そうだ。お前、今朝なんで自分がぶったおれたのか、その理由に心当たりがあるんじゃないか？」

「そ、それは、ちょっと寝不足だったのよ。最近、授業の予習に時間がかっててさ」

しかし、その答えに夜彦は納得が出来ない。彼女の顔色がさっと変わったのに気がついたのだ。

「違う、他に心当たりがあるだろう。あまり他人に言えないような奇妙なことだ」

「な、何よ、何を根拠にそんなことを言ってるの？」

明らかに彼女は動揺している。夜彦と話しているのに、視線があらぬ方向を泳いでいるのだ。どうやら図星だな、夜彦は思った。そして、ここで止めを刺そうと顔を近づけた。

「俺はな、井上。見たんだよ」

「な、何のことよ」

「さっきお前が倒れる一瞬のことだ。お前の首もとに首輪みたいな赤い筋が入るのを、はつきりとな」

「え!？」

案の定、彼女は驚きで絶句した。

「やっぱり、その痕に心当たりがあるんだな？」

「……いや、その……」

と良佳は最初、ごまかしの言葉を探してきよろきよろとしていたが、急に諦めたように首をくたんと垂らした。

「誰にも、言わない？」

と小声で聞く。

「お前が、言つて欲しくないなら、誰にも言わねえよ」

「でも、夜彦君、おしゃべりだよ。学校に変な噂が広がるのは嫌なの」

そう言つて警戒するように彼女は瞳を細める。そこには、優等生としての譲れないプライドがあるようだった。

なるほど、な。夜彦は胸中で納得する。

それで今まで誰にも言わずに自分の中に留めていたのか。

もし、彼女の言う通り、首筋に赤い痕が浮かび上がるなどと、そんな妙な話が広まれば、気味悪がられ、彼女は学校での信頼を失う可能性もある。様々な委員会に所属し、成績も優秀、周りの多くの生徒から、特に頼りにされている彼女にしてみれば、それは人一倍切実な思いなのだろう。

「それが不安か？　もし信用出来ないなら、無理をして言わなくてもいいぜ」

「え？」

すると、それまで強気な姿勢を取っていた夜彦が急に引いたことを不思議に思つたのか、彼女が目丸くする。

「ど、どうして？」

「そりゃ、俺はお前にとって、特別仲の良い友達や親密な関係の家

族じゃないんだし、信頼出来ないのは当然のことだ。それに、昨日、口喧嘩したばかりの相手なら、なおさらだろ？ きつと俺だって躊躇するぜ。俺はそんなお前の気持ちを蔑ろにして、無理やり話を聞き出すつもりはない」

「……」

「けれどよ、俺はそれで終わらせるつもりはないぜ。お前のが心配だからさ、話を聞けないなら聞けないで、出来る限りのことをしてやりたいんだ」

「夜彦、君……」

「余計なお世話だつて思われても、ここまでの情報を頼りに俺は自分に来ることをするつもりだ。もしかすると、そんなんじゃ、何の手助けにもならないかもしれない。だけど、このままじつとしてんのは俺の性に合わないんだよ。俺は動いていないと我慢出来ないタイプの人間なんだ。な？ 俺はお前の助けになりてえんだよ」

「あ……ええと」

すると、彼女はなぜか少し頬を赤らめ、

「う、ごめん」

と頭を下げた。

「何だよ、なんで謝るんだよ」

「私、夜彦君のこと、今までいろいろ誤解してたかも」

と、ちらちらこちらを見ながら恥ずかしそうに掛け布団で顔を覆うので、夜彦はすっかり意味が分からない。

「あん？ どうしたんだよ、急に」

「うつん、何でもない。とにかく、夜彦君は私のこと、本当に心配

してくれてるんだよね」

「あのな、井上、聞いてなかったのか？ 今ちゃんとそう言っただろ？」

すると、彼女は、だよね、と静かに頷いた。ほんの少しだけ、嬉しそうに微笑んだようにも、見えた。

「その、夜彦君」

「何だよ」

「わ、私のことを他の人に話すとか疑ったりして、ごめんね」

「だから、んなこと気にすん——え！？ ってことは……」

素っ頓狂な声を上げた夜彦に対し、良佳はこくんと首を動かす。

「うん。ちゃんと話すよ。私の身に何が起こってるのか……」

そして、彼女はベッドに入ったまま、最近自身に起こっていた不思議な現象を語り始めた。

突然、不安な気持ちに襲われること。その原因がはっきりしないこと。体調が悪いわけではないこと。胸にぽっかり穴が開いたような気がする。そして、赤い痕が見え、その途端、気を失うこと。夜彦はその話を静かに耳を傾けていた。

「なるほど。その痕を見ると、気を失うんだな」

とベッドに腰掛けながらふむふむと頷く。

「うん……」

「それで、気持ちが塞ぎこむのが、その赤い痕が浮き出る台図なのか？」

「たぶん、そう……」

そうか、と返事をして、夜彦は考えを巡らせる。これから自分がすべき事を、まとめているのだ。

「井上」

「なに？」

「確認するが、昨日も同じような事があつたんじゃないか？」

その質問に怪訝そうに眉を動かしながらも、彼女は答える。

「え、そ、そうだけど、どうして？」

それだけ聞ければ十分だった。

「そうか、ありがとうな」

と礼を言ってから、夜彦は、

「じゃあ、行ってくる」

とベッドから勢いよく立ち上がった。そろそろ出発しなければならぬ頃合いだ。

すると、それに驚いた様子の良佳は、ぐっと腕を掴んでくる。

「なによ、夜彦君、どこに行くっていうの？」

「どこに行くって、『もう一人のお前』を探しに行くんだよ」

「もう一人の、私？」

理解出来ないのか、目をぱちくりさせる彼女。はあ、と夜彦は溜息をつく。

「そうだ。昨日話しただろう。商店街で妙に陽気なお前を見たって」
「え、ええ」

そう言えばそんな頭の悪そうなことを言っていたわね、という感じで彼女は唇に指を当てている。

「おそらく、そのもう一人の井上は、その不思議な現象が起こった後に現れるはずなんだ。俺の推理では、な」

「私のあの赤い痕が見えた時に、私からもう一人が抜け出てるってこと？」

「ああ、おそらくな」

夜彦は力強く頷く。それは今のところ、確証のないただの勘ではあったが、それなりの自信はあった。

「し、信じられないわ」

「まあ、そうだろうな。大抵の人間はそう反応する」

「……ってことは、夜彦君は、こういうことに慣れてるの？」

「ああ。世の中にはこういう摩訶不思議なことが溢れているのさ。

俺はそういう体験を今まで何度もしてきた」

「何度、も……」

「なあ井上、幽霊や妖怪だのって話がいつまでもこの世に尽きないのにはさ、きちんとそれなりのわけがあるんだぜ」

夜彦が言つと、浅く息を吐いて、彼女は何かを飲み込む仕草を見

せた。脱力し、目を伏せ、急に黙りこむ。

おそらく、自分の中で気持ちを整理しているのだろう。夜彦は思った。

無理もない、今までそんな存在を真っ向から否定してきた彼女にとつては、そんな話は常識が一辺にひっくり返る一大事なのだ。

「大丈夫、か？」

不安になって、思わず声をかける。すると彼女は少し肩を揺らして否定した。

「ええ、心配には及ばないわ。けれど……」

「……？ どうした？」

「ええとね、夜彦君、あなたが言っていることは、とてもすぐには信じられない話だけど、仮にもしも、そのもう一人の私が見つかったとして、その後はどうするの？」

「え？」

「それって、かなり特殊な状況だよ。病院に行って治るものでもなさそうだし……何か、いい方法が——」

「ああ、それなら大丈夫だよ」

夜彦は軽く彼女に笑いかける。

「俺には、そういう怪現象を専門に扱ってる強い味方がいるしな」

「怪現象を扱ってる、味方？」

「ああ、そいつにだけはお前のことを話すが、口が堅い奴だから、心配するな」

「は、はあ……」

「ともかく、安心して寝ておけよ。必ず、俺が解決策を見つけ出してやるから」

「ああ、うん」

彼女は少々納得がいていない表情ではあったものの、そのままベッドに背を付けた。それを確認して夜彦は保健室を飛び出す。

もう、授業なんて受けている場合じゃない。

休み時間が終わってしまう前に、学校を抜けだそう。

一刻も早く、もう一人の井上を見つけ出し、

葛葉に会わなければ！

其の十

学校の教室では、すでに2時間目の授業が始まっているであろう時間――。

八守中夜彦の姿は街中の交差点にあった。

のどかな空気の漂う商店街を行き交う人々の間を縫うようにして、目的の場所へと向かっている。

おそらく、今頃、自分が校舎からいなくなったことが、クラスで問題になっているかもしれないな。

走りながら、夜彦はそんなことを思う。

最悪、担任の教師から親に連絡がいつているかも……。

しかし、それは今考えるべき問題ではない。もしも、夜彦が親や教師からこっぴどく叱られてしまうのであれば、それでもいいと夜彦は考えていた。

それと引き換えに、あの小生意気なクラスメイト、井上良佳の身が守られるのであれば、それで十分いい結果なのだ。

そのいい結果を導くために、夜彦は横断歩道を飛ぶように走る。びゅんびゅんと走る。

と、そこで――。

「ここだ！」

夜彦は叫ぶ。

それは昨日、あの陽気な井上良佳に案内された場所である町のアイギュアシOPPだった。

もう一人の良佳がいるとすればここにいる可能性が高い、と考えたのである。

走ってきた荒い呼吸のままでもう一度店名も確認し、夜彦は自動

ドアをくぐる。平日の昼日中、店内には店員の他には客の姿はほとんどない。

制服姿のまま、息を切らして店の中を目を走らせる夜彦を、店員は怪しんでいるようだが、夜彦は気にもとめない。ずんずんと足を進め、目的の商品売場に向かう。

すると、案の定……見つけた！

井上良佳だ。商品を陳列するショーウィンドーに顔を近づけて、並んだフィギュアを食い入るように凝視している。

「やはり、実在したか……」

夜彦は幻と出会ったような不可思議な気持ちになりながらも、確信する。

自分が昨日見た彼女は幻などではなく、やはり、その場に実体を伴って存在している。思わず、じっと彼女を見つめてしまったが、生憎、ゆっくりしている時間はない。

学校では、本物の井上良佳が自分の助けを待っているのだ。

ともかく、この良佳——偽良佳とでも呼ぶか——に対する検証を行わなければ。

「ごくり、と緊張の唾を飲み込んで、意を決し、夜彦は彼女に歩み行く。」

「おい、井上」

名前を呼ぶと、彼女はぴよこんと驚いたように跳ねて、振り向いた。そして、こちらを見るや、

「あれ、夜彦君じゃない。またまた奇遇だねー」

気が抜けるほど無防備な笑顔で話しかけてくる。しかし、夜彦は

気を抜かず、鋭い視線のままで問いかけた。

「お前、本物の井上良佳だよな」

「うん、そうだけどどうしたの？ そんなに怖い顔してさー」

「お前、昨日俺と別れてから、今までどこで何をしてた？」

すると、彼女はすぐに何かを答えようと口を開いて、開いて……そのままになった。

「……」

口が開いたままで、まるで声の出し方を忘れてしまったかのようにぽかんとしている。

「ええと、昨日、夜彦君と別れてからだよね」

と確認してくる。

「そうだ。これはとても大事な事なんだ。お前は今までどこで何をしていた？」

「ええと、そのう……わたし、忘れちゃったかも」

「全然、全く？」

「えへー、うん。すっかりすつぽり」

「ドッペルゲンガー決定だ！」

夜彦はそう叫ぶと、逃がさないようにすかさず、彼女の腕を掴んだ。当然、彼女は驚いて抵抗する。

「ちょちょい、これはどういうことなのー！？」

「つまり、お前は忘れたんじゃないかって、最初から記憶に無いんだよ。」

なにしろ、ついさっきまで、お前は本物の井上良佳の中にいたんだからよ」

「い、意味が分からないよー!」

ジタバタとわめく彼女を夜彦は無理やり引っ張る。

「いいから俺についてこい。お前にはやるべきことがあるんだ」

しかし、彼女はあくまで強情にいやいやと首を横に振った。

「だ、ダメだよ。今の私にだって、やるべきことがあるんだから」

「やるべきこと?」

「うん。だってここであようちゃんのフィギュア見てないと、誰かに買われちゃうかもだし」

そう言って、再びショーケースの中をじっと凝視し始めるのだ。

夜彦は肩から力がずんと抜ける。おいおい、三歳児かよ。

「あのなー、そんなどうでもいいことより、こっちの用事の方が断然重要なんだよ」

「ええー!?!」

「こっちは一刻を争う事態なの」

しかし、彼女は頑なに口を閉ざし、ぷるぷると頭を振る。その場でさらに深々としゃがみこみ、一步も動かないという意思表示だ。これではまるで子供である。どうしてこちらの偽良佳はこんなにも頭が幼稚なのだろう。

「本物と正反対の性格をしてるのか?」

「私は動きませんー」

ぶいっとそつぽを向く。

「よし分かった、アイス買ってやるから」

「お菓子あげるって言われても知らない人にはついていっちゃいけないもん」

「お前、俺とは面識あるだろうが！」

「わたし、夜彦君なんて知りません」

「おい、いい加減ふざけるなよ！」

そう語気を強めて怒鳴ったが、それでも全く動く素振りを見せない彼女に、夜彦は失望した。

駄目だこいつ。どうして、こんなに言う事を聞かないんだ。いつもの井上なら、こんなに話が通じないなんてことはありえないのに。

「……じゃあ、どうしたら動いてくれるんだ？」

心底困った夜彦は、すっかり途方に暮れた弱々しい口調で呟いた。

「え？」

「こっちは動いてくれないと本当に困るんだ」

「夜彦君が……困る」

すると、さすがに同情したのか、彼女の強く引き締められていた頬が緩む。

そして、

「えっと、それじゃあ……」

と、彼女は遠慮がちにショーケースの向こうを指差した。

その先には、彼女が先ほどから大事そうに眺めている一体のフィギュアがあった。

夜彦はすぐに合点がいった。

「ま、さか、それを買えと」

こくこくと彼女は懸命に頷く。

夜彦はたちまち鳥肌が立った。

うわー。

改めて、そのフィギュアの値札を見て、桁数を数え、血の気が引く。

「いくらなんでも、高いだろ」

「買ってくれる？」

「……ぐう、くそう、何で俺がこんなことを……」

「ダメ？」

「いや、さすがに、これは……」

「夜彦君」

「……」

「ねえ、夜彦君ってば」

「お、おれも男だ……」

「え、それじゃあ！」

「井上、これはお前へのツケだからな、後から必ず返済しろよ」

そして、そう彼女に言い放つや、気に迷いが生じないよう一目散に夜彦は店を出ると、そのまま銀行のATMを目指した。震える手でボタンを押しつつ、自分の預金から金を引き出し、店に戻る。

そして、数分後――。

店の前にはホクホク顔の良佳と悲壮感の漂う表情の夜彦が対照的

な様子で立っていた。夜彦は恨めしそうに自分の薄くなった財布と彼女の持っている紙袋を交互に眺め見ている。

「くそう、俺の貯金だぞ。必ず返さないと俺は泣くからな。井上」
「うわー、ありがとう。夜彦君、あようちゃん大事にするねー」

意気消沈する夜彦とは裏腹に、欲しい物を手に入れた良佳はたまらなく上機嫌である。袋の中身を見ては微笑み、また見ては微笑みを繰り返している。全く、いつまでもキリがない。

飽きないのかよ、と夜彦は思う。

しかし、一方で、少女の無邪気な笑顔というものは、とても可憐で、華やかで、夜彦の心を少なからず、動かした。

本物の彼女も、いつもこんな風に素直に感情を表現すればいいのに。今の真面目すぎる格好をしているより、何倍も歳相応の少女らしいよな。

ともかく今は逃がさないよう、彼女の手を握る。

「よし、井上。これは約束だからな」

「うん？」

「それを買ったら俺の言う事を聞いてくれるだろ？」

「うん。いいよ。どこに行くの？」

「町の北にある稲荷神社だ。知ってるか？」

「ああ、そこなら小さいころによく遊びに行ったよー」

彼女は懐かしそうに言う。

どうやら、昔の記憶はあるようだった。

おそらく、彼女がこうして二つの存在に分離する以前の出来事だからなのだろう。思えば、そうでないと夜彦の記憶があるはずがない。

「そこに何しに行くの？」

「ああ。ちよつと、小生意気な狐に会いに、な」

そう言つて、夜彦は彼女の手を引いて走り出す。

「つたく、予想以上に時間を食つちまつたぜ」

腕時計の針は正午を回っていた。

其の十一

真昼の神社は、やはりいつも通りの、人っ子一人いない、閑散とした空間だった。

夜彦は偽良佳の手を引いて神社の鳥居をくぐるが、何者の気配もしない。この神社の主である葛葉はどうやら留守のようだった。

境内の青々とした木々の枝が風に揺れてさらさら鳴っている音が聞こえる。とても静かだ。

夜彦は誰もいない参道を通り、社殿の階段に足をかけて、無駄とは思いつつ、再び周囲を見渡した。

一方、状況の分かっている偽良佳は、ちょうどいい椅子を見つけたという具合にその階段にちょこんと座る。そして、何をするのかと思えば、空を見上げながら、大あくびをした。全く、暢気なものである。自分の置かれた状況を把握しようと努力するつもりはないらしい。

「おい、葛葉！」

夜彦は一応、神社の奥に向かって呼びかける。しかし、案の定、返事が返ってくることはない。

やっぱり、いないのか。

「まったく、こういう大事な時にどこをほつつき歩いてるんだ？ あいつ」

ふう、と失望のため息をつく。

事は一刻を争うというのに。

夜彦には彼女の居場所に検討がつかなかった。彼女とはそれなりの付き合いではあるが、さすがに平日の昼間となれば、夜彦も普段

は高校にいるわけで、彼女の行動パターンを把握してはいないのだ。まあ、おそらく彼女のことだから、こんな昼日中から職務を全うするために、殊勝にもこの町全体をパトロールしているわけがなく、ただ、目的もなく周辺をうろついているのが関の山だろうが。

しかし、このまま彼女の帰りをぼうつと待っているというのは、夜彦には到底我慢出来ない。一刻も早くこの状況に手を打ちたくてうずうずしているのだ。

学校の良佳は大丈夫だろうか。

状態は悪化していないだろうな。

不安な気持ちたちが胸の隅から足音荒く駆け寄ってくる。でも、今の自分には何も出来ない。それが、もどかしい。

「だあー、もう!」

夜彦は苛立った気持ちを振り払うように大声を上げた。すると、

「全く、うるさいのう」

どこからともなく、そんな声が聞こえた。

と思うと、ふわりと、目の前に白銀の巨獣が姿を表す。神社をひとつ飛びに越えたのであろうその妖は、悠然と半身を翻し、夜彦たちとその美麗な姿を見せつけるように、大きく跳躍し――。

いきなり、夜彦に飛びかかった!

「うわああああ!」

神社の階段にいた夜彦の胸に前足を押し付け、その巨躯で押しつぶすように、のしかかった。

思わぬことに仰天する夜彦に、その妖、白狐の葛葉は狐の姿のまま、口を大きく開け、その大きく鋭く伸びた牙を見せる。

「全く、わしが不在の時にものこのこ現れおって、この人間の小僧ときたら、毎日飽きもせず次から次へと何の用だというのだ」

「う、うわ、ど、どけよ」

「だいたい今は、お前は高校にいるはずの時間だろう。この能天気な不良学生め」

「うわあああ、分かったから、口を閉じろ、その牙が恐ろしい！」

「ふうむ、確か、授業をさぼって遊び歩いている学生は妖に食べられても文句は言えぬのだったな」

「おいおい、誰がそんなこと決めたんだよ！ 頼むからどいてくれ！」

ほとんど悲鳴のような声で叫ぶ夜彦に、葛葉は満足したように怪しくにやりと微笑んだまま、顔を上げた。続けて、押し付けていた前脚をどける。

「ああ、もう、制服に泥が乗っちゃった」

夜彦はすぐさま起き上がり、土を手で払う。しかし、湿った土はしつかり残り、これでは洗濯しなければ落ちそうにない。

「まったく、葛葉。今までどこに行って——」

しかし、彼女は夜彦を見ていなかった。

いじめた後の夜彦には興味がないのか、隣に座っていた偽良佳を矯めつ眇めつ眺めていた。くんくんと匂いを嗅ぎつつ、顔を近づけている。

そして、

「ふむ、やはり『妖』か」

と一言。

「そうそう、こいつはさあ……え、え？　今、お前なんて言った？」
「いや、ただ妖かと。夜彦、お前が見つけてきたのか？」

夜彦はあまりのことに目を瞬かせる。

彼女の放った言葉の意味が分からなかったのだ。

夜彦が呆然としている間に、突然のことにしばらくきょとんとしていた良佳は、何を思ったか、目の前の巨獣を恐れることなくその鼻先を撫で始める。

「うわー、大きいねー。もふもふだ」

「小娘、私に気安く触るな。幻妖界の妖たちがその名を聞いて恐れおののく誇り高き妖狐、幻門白狐の葛葉だぞ」

「えー？　よくわかんない」

「おい、その馬鹿に間延びした声を出すな。気が抜けそうだ」

「なんでー、別にいいでしょー？」

「ええい、黙らすのが面倒だな。この際、喰ってやろうか」

胃の腑に入れてしまえば、とりあえず静かにはなるだろう。
と、彼女は大きく口を開け、凶悪な牙をぎらつかせる。

「おいおい、ちょっと待て」

そこでさすがに夜彦が割って入った。

「こっちの話を聞いてくれ」

「何だ？　いつもの退屈な怪談なら、聞き飽きたぞ」

「そうじゃねえよ。こいつの事だ。お前、今、こいつのことを妖だ
って言ったよな」

「ああ、そう言ったが？」

何でもないことのように、彼女は頷く。

「こいつは、確かにお前たちの仲間の、妖なんだな？」

夜彦は念を押して聞く。すると葛葉は不快そうに眉間に皺を寄せた。

「何度も言わせるな。私を誰だと思っているのだ？　夜彦、どうやらお前は相当私に噛み付かれたいらしいな」

お、おい冗談はよせよ。

夜彦はぶんぶんと横に手を振った。あんな恐ろしい牙をもう一度
間近で拝むなど、まっぴらごめんだ。

「じゃ、じゃあ、葛葉には、この妖の正体分かるか？」

「正体？」

「ああ、俺はドッペルゲンガーかと思ったんだよ」

「どっ、ペル……？」

知らないのか、彼女は合点がいかないようにいつと首を傾げる。

「はて？　それは何だ？」

「ドッペルゲンガーってのは、自分そっくりの幻みたいな存在のことだよ。今ここにるのがその幻で、本物は別の場所にいるんだ。
聞いたところによると、こいつはその本物から時々抜けだしてきて

いるみたいだぜ」

すると、葛葉は夜彦の説明を聞いて、目を細めつつ頷いた。

「……なるほど、なるほど。思い出したぞ。以前どこかで、それと同じような話を聞いたことがある」

「っで？ それとは違うのか？」

「違う」

有無を言わさぬ一刀両断である。

「えええ!!」

「残念ながら、お前の推理は空振りだ」

「じゃ、じゃあ、何だって言うのさ」

「別に、何ということもない。こいつはな、夜彦。お前もよく聞いたことのある有名な妖だ」

「俺もよく知ってる妖？」

そんな馬鹿な。もしそうだったなら、今頃とつくに気がついてい
るはずである。それに、夜彦は昨晚、寝ないで資料まで漁ったのだ。
見落とすはずがない。

「本当に、知ってるのか？」

夜彦は半信半疑だ。

「ああ、妖マニアのお前なら、当然知っているはずの、メジャーな
妖さ」

そして、一呼吸置いてから、

「こいつの正体は、『ろくろっ首』だ」

そう、告げた。

其の十二

いつの間にか、授業は5時間目が終わり、6時間目に入っていた。

教室には午後の時間特有の気だるさが溢れている。生徒たちは皆、だらだらと机の上で教科書と向き合いながら、一刻も早い終了のチャイムを待ち望んでいるようだった。その怠惰な願望が、空気に触れ、淀んだ黄色い流れを生んでいる。

しかし、額に薄い汗を滲ませながら、良佳が待っているのは、そんなものではなかった。良佳が保健室で寝ていた時間から学校を飛び出し、自分が陥った窮地を打破する方法を持ち帰ってくれるはずの八守中夜彦の姿である。

良佳は、彼が保健室から飛び出す前の必死な表情を忘れていない。お前のことが心配なんだ。

そう言ってくれた彼。あの彼なら信頼出来る。きっと私を助けてくれる。

しかし、一体、いま彼はどこにいるのだろう。

彼が語っていた、もう一人の良佳とは会えたのだろうか。そして、彼が頼りにしている怪現象の専門家に話を聞くことは出来たのだろうか。

お願いよ、早く来て。夜彦君。

何も出来ずに待つしかない状況が、良佳の首を締めるように、じりじりと狭まってくる。

良佳は誰にも見られないよう、首もとを触った。今はそれほど感じられないが、確かに何かの痕がある。細い、筋だ。

ほんと、なんなのよ、これ。

心細さで悲鳴を上げてしまいそうだ。

良佳はとても授業に集中できる気分ではなかった。

見れば、黒板には大昔の偉人の名前や、その人物に関する説明が書かれている。

大きな出来事があった年が上から順に並べられており、それが良佳には、自分が終わってしまうまでのカウントダウンにも思えた。あの数字がゆっくりゆっくり遡っていき、そして、0になった時、自分はこの世から消滅してしまうのだ。

それに、何か根拠があるわけではないが、良佳はそう思った。恐ろしい予感だった。

「おい、井上。何をぼうつとしている？」

急に、教師から名前を呼ばれて、驚いた。

「は、はい！」

返事をするが、その初老の男性教師は眉間にしわを寄せた怪訝そうな顔で、良佳を見ている。

「何をしている、井上。いつものお前らしくもない。もしかして、まだ気分が悪いのか？ 何でも、朝のホームルームで倒れたそうじゃないか」

「い、いえ、問題ありません。ちょっと、そ、その、眠たくて……」

つい、咄嗟にそう言い訳してしまった時、良佳ははっとした。しまった、と口を塞ぐ。

しかし、時既に遅し。

良佳がそう口走った途端、ざわり、と教室の空気が変わったのだ。周囲の生徒たちから一斉に視線が向けられるのが分かる。

「おいおい、マジかよー」

「井上、居眠りしてたみたいだぜ」

「あんな完璧な優等生でもそういうことあるんだねー」

「ええー、なんかちよつとガツカリかも」

そんなひそひそ声が聞こえてくる。冷めた感じがするのは、気のせいではない。自分は今、奇異の視線で見られている。

そう思うと、急に寒気が良佳の体を這い上がってきた。

ダメ、ダメよ。自分は、ダメなのよ。こんなんじゃ、ダメなのに。良佳は自分に言い聞かせる。

私は、もつとしっかりしなくちゃいけないの。だって、私は皆から、頼りにされてるんだもの。

「あ、ああ……」

しかし、止めようもなく、体には震えがやってくる。

怖い、怖い、怖い、怖い、助けてよ……。

「どうした、井上？」

心配そうな、教師の顔。しかし、そこには明らかに複数の意味が含まれていることを良佳は気がついた。

「大丈夫か？」

「あ、あの……」

「何だ？」

「ちよつと、顔を洗ってきてもいいですか？」

「顔を、か？」

「ええ。そうすれば、気分がすっきりすると思うので」

良佳が言うと、その初老の教師はしばし訝しげに見つめてきたものの、それくらいなら問題ないと思ったのか、

「いいぞ、行つてきなさい。ただし、すぐに戻ってくるんだぞ」

と軽く睨みながらそう言った。

「は、はい」

了解が出て、良佳はすぐに席を立った。そして、逃げるように教室から出て行く。一刻も早く、あの周囲からの視線のない場所に行きたかったのだ。

廊下に出て、大きくため息をつく。

あの凍てつくような、鋭い視線たち。失望とため息の入り交じったような、あの空気。

もしも、あれ以上あんな場所にいれば、自分はどうなっていたのだろう。とても冷静でいられたとは思えない。

それを考えて良佳は身震いする。

「はあ……」

とにかく、ここでじつと立っているわけにはいかない。

顔、洗いに行こう……。

しかし、そうは言っても、良佳はとても前向きな気持ちにはなれなかった。それでこの気持ちが静まるのならば、容易いものだ。それで終わらないから困っている。

さあ、どうしよう。どこに行こう。

「屋上……」

ふいに良佳は呟いた。

そうだ。あそこなら、誰も来ないし、一人で気持ちが落ち着くまで待ってられる。そして、いつもの自分を取り戻したら、教室に戻ればいいのだ。

それまで時間がかかるかもしれないので、教師には少し渋い顔をされるかもしれないが、この際、仕方ない。

今の自分では、あの『視線』にはとても耐えられない。

そう決断すると、良佳はゆっくりと足を踏み出す。誰もいない廊下を通り、そして、誰も見ていないことを確認しつつ、最上階までの階段を上った。そして、重たい屋上へと通じる扉を開ける。

すると、ぶわっと、外の空気が舞い込んできて、葛葉は思わず目を伏せた。

「風、強いな」

こんなふらふらな自分なんて、簡単に吹き飛ばされそうね。

扉を閉め、すぐに壁を背もたれにして座り込んだ。強い風が頬を打ち、髪が成されるがままに大きくなびいた。空を仰げば、雲が駆けるように流れていく。

お願いだから、もう少し留まってよ。良佳は切実に思う。

ただでさえ、千切れて飛ばされそうな不安定な気持ちなのに。泣き出しそんな気持ちを必死で抑え込む。

そして、しばらく経った時だった。

ふいに――。

何かが見えた。

その雲間に、何かが掠めて行ったのが、見えたのである。小さな、黒い影のようなものだった。

「あれ？」

良佳は思わず声を上げた。
気のせいだったのだろうか。

でも、確かに見えた気がした。目をこすってみる。そして、じつと空の様子に目を凝らした。
と、

また見えた！

今度は見間違いではない。何か黒い影が建物の屋根を次々と飛び移っているのだ。

「何かしら……」

その正体を見極めようとさらに意識を集中させようとした瞬間だった。そこで、良佳の意識は揺らぎ始める。

そ、そんな……また、あの赤い痕なの！

その黒い影は、まだ建物を飛び移っている。そして、その姿がどんどんこちらに近づいてくるのが分かる。

しかし、それに相反して、良佳の背中はずるずると自身の重みに耐えられず落ちていく。例の赤い痕のせいで、すでに体の態勢を支えるだけの力も出ないのだ。

待つて、あれは何なのよ……。

その切なる願いも霧散し、良佳のまぶたは勝手に閉じ始めた。意識が黒い渦を巻き始める。

そして、その何者かの影が、自分の目の前に降り立ったと思った時、再び、良佳の意識は暗黒の中で途絶えた。

其の十三

「ろくろっ首だつて!!」

葛葉の発した言葉を理解出来ないまま、夜彦は目を白黒させて驚いた。神社の階段から転げ落ちる勢いで、飛び上がる。

「そんなはずはないって!」

「何がだ?」

「だつて、だつて……見るよ!」

と、傍らで呆気にとられている偽良佳を、彼女の首もとを、震える指で示す。

「首が長くねえじゃねえか!」

そう、言わずと知れた妖、ろくろっ首と言えば、体から異様に長く伸び縮みする首が一番の特徴の化物なのである。

しかし、この少女、偽良佳の首はどうだ。夜彦が見る限り、それはいたって普通の長さで、以上に細いわけでも、伸び上がるための蛇腹があるわけでもない。

だとすれば、これがあの有名な妖、ろくろっ首だとは、誰が予想出来るのだろうか。そんなはずがないのだ。

少なくとも夜彦はそう思い、葛葉の言葉に驚いていた。

「何かの間違いじゃねえのか?」

だが、葛葉は涼しい顔で、口元の辺りを前脚で擦りながら、ろくろっ首はろくろっ首だと繰り返した。

「まあ、お前がそう驚くのも無理はない。普通、ろくろっ首のイメージと言えば、その長い首が印象的だ」

「それは……実際はそうじゃないっていうことか？」

「いや、そうではない」

彼女は首を振る。

「ろくろっ首には『二つの種類』があるのだ」

「何だって!？」

そんなことなど、夜彦は初耳だった。さらなる驚きで開いた口が塞がらない。

「に、二種類!！」

「一つは、お前が知っているように、首が異様に長く伸びるタイプだ」

葛葉が平坦な口調で説明を始める。

「昔から残る怪異譚でもよく知られているように、どちらかと言えば、メジャーなろくろっ首と言えるだろう」

そして……。

「もう一つは、『抜け首』と呼ばれるタイプのろくろっ首だ」

「抜け、首……」

夜彦はちつとも聞いたことがない。
すると、彼女は夜彦が知らないと分かってか、少し得意げになっ

て話を続ける。

「これは別名、離魂病りこんびょうとも呼ばれるものでな。分かりやすく言うと、人間の体から魂が抜け、それが妖に変化するのだ」

「それが、抜け首……」

「そうだ。もう少し具体的に言うと、睡眠中に体から魂だけが抜け出し、首の形や様々な物の形に変化しつつ、ふわふわと外をさまよい歩く」

今回の場合で言えば、たまたまその娘の魂の一部がこのような少女の姿となって、妖は出現しておるようだ。

彼女は言う。

「まあ、お前は知らなかったようだが、この抜け首、人間の書物にも案外多く記録が載っているとのことだぞ。今度にもゆっくり調べてみるといい」

「お、俺としたことが、まさか勉強不足とは……」

がくりと肩を落とし、本気で落胆した夜彦を横目に、彼女はにやりと笑うと、さらにこう言った。

「そうだ、夜彦。一つ面白いことを教えてやろう」

「な、何だ？」

「実は、その抜け首となった者だがな、これを見分ける方法があるのだよ」

「見分ける方法だって!？」

「そう、抜け首になったものはな——」

そして、おもむろに彼女は、くいつと器用に前脚で首の当たりを示す。

「こう、首の周りに妙な『細い筋』が入るのだよ」
「なんだって！」

それを聞いた途端、夜彦は飛び上がった。今朝の見た光景が鮮明に目の前に蘇ったのである。

あの気味が悪い、首の痕……。

「何だ、どうした？」

「そうだよ、葛葉。確かに井上の首にもそれと同じものがあつたんだ！ 彼女は、その細い筋を見る度に、失神して倒れちゃうんだ！」

すると、今度はそれを聞いた葛葉が「何？」と怪訝そうに表情を固くした。彼女の尾がぶわりと不穏そうに動き、境内の砂を舞い上げる。

「失神とは妙な話だな。それではまるで、その井上とやらの体に過度な負担が掛かっているようだ」

「掛かつてるさ。今朝だって、彼女は顔を青くして倒れたんだ。なんでも、その筋が見えると彼女は気持ち落ち込んで、心臓がドキドキして、そのまま気を失なっちゃうんだって……」

夜彦が詳しく話すと、葛葉はますます表情に影を作る。

嫌な予感がして、夜彦の額から汗が垂れた。一体どういうことなのだろう。

脳天気だった偽良佳も、いつしか夜彦たちの会話を落ち着かない様子で眺めている。

「なるほど、な」

「もしかして、それってやばいのか？」

「いや、今まで聞いたことがない話なので、どう判断したもののか、迷っているのだ」

さすがの葛葉でも分からないのか。夜彦は齒がゆい気持ちになる。彼女は果たして安全なのか、危険なのか。

「……」

「そんな顔をされても知らぬものは知らぬ。しかし、万が一を思えば、早いうちに手を打つべきではあるな」

うつむ、と彼女は難しそうな顔をして唸る。

「とにかく、今の状態を改善するにはどうしたらいい？ どうやって、抜け首から彼女を開放出来るんだ？」

さながら飛びつく勢いで聞いた夜彦に、彼女はたじろいだようだった。二、三步下がる。

「ま、まあ落ち着け。そうだな……魂が離れている状態が異常なのだから、その分離した魂を元に戻し、きちんと体に定着させることが出来れば、問題はないのだろうが……」

「そ、そうするにはどうやって？」

「私の力で無理やりこの離れた魂を体に縛り付けることは出来るぞ」

彼女は自信あり気に頷く。

これは信頼できそうだ。夜彦の中に安堵が広がる。やはり、こういう時の彼女の超自然的な力は頼りになるものである。

しかし、葛葉の表情は浮かないままだ。

「それで一先ずは解決だが……」

と、言葉を濁らせる。

何か問題でもあるのだろうか。

「どうしたんだよ」

「う、うむ。しかし、それでは根本的な解決にはならないのだ」

「……？ それはどういうことだ？」

「その井上という奴が、どうしてもこんな状態に陥ったのか、その原因を探り、それを解決しなければ、この妖はそやつの中に永久に存在し続けることになる」

つまり、葛葉がその妖を封じ込めている力を解けば、またしてもこの抜け首は出現するのだと言う。当然そうなれば、良佳はその度に失神して倒れる羽目になる。

では、ずっと封じ込めていけばいいではないか、と夜彦は考えたが、それは夜彦が思うほどに容易ではないらしい。

というのも、いくら他の妖が恐れるほどに妖力を持った葛葉と言えど、いつまでも継続して一人の少女のために力を使い続けるなどということは現実的に考えて不可能なのである。

「難しい状況だ」

と、彼女は渋い顔をする。

「抜け首となった者は大抵放っておけばそのうち治ることが多いのだが、その少女の場合はそんなに悠長に構えている時間もないかもしれない」

もしも、命に関わる事態なら、なおさらだ。

しかし一方で、夜彦はというと、先ほどまでのじりじりとしたど

うしようもない焦りは消えており、前向きに次なる方法を考え始めていた。少なくとも、何も成すべき事が見つからなかった状態よりは、今は情報が手に入り、向かうべき道筋が定まったのだ。

「じゃあ、全てを丸く収めるには、その根本的な問題を解決すればいいんだな？ よし！」

と拳を突き上げる。

すると、おいおいと葛葉が嘆息混じりに呆れた。

「そう簡単そうに言うが、その問題を解決する当てがあるのか？」

「井上の魂が離れた原因か？」

「そうだ。それは一筋縄ではいかぬ事だぞ。魂が抱えた不穏は目に見えぬ。他人からでは想像も出来ぬことが、今回のような妖出現の引き金となっていることが多いのだ」

それをお前は理解しているのか？

彼女は語気を強めて、夜彦に迫る。しかし、相変わらず夜彦はあつげらかと答えた。

「んな難しいこと、俺に分かるわけないって」

ひらひらと手を横に振る。

「だから、こいつに聞けばいいだろ。抜け首ちゃんによ。どうして井上から抜けだしてきたのかさあ。それが一番手っ取り早いぜ」

「何？」

と葛葉が眉をひそめたのは言うまでもない。

「この何の状況も理解していなさそうに見える、脳天気なこの小娘からか？」

「当たり前だよ」

夜彦は自信満々だ。

その様子が気に食わないのか、葛葉はふん、と鼻息を飛ばし、ならやってみると挑戦的に言い放つ。それに対し、言われなくてもな、と夜彦は返す。

そして、くるりと振り返ると、いつの間にか階段の端に座り、怯えるようにこちらを見ている偽良佳の肩を逃がさないように掴んだ。すると、ひつ、と彼女は小さく悲鳴を上げる。どうやら、二人のただならぬ会話が彼女に関することだと気づいているらしく、これから何が行われるのか、戦々恐々としているらしい。

そこで、夜彦は彼女の警戒を解くために、優しく大丈夫だと語りかけた。

「ちょっと質問に答えて欲しいだけなんだよ」

「し、しつもん？」

「そうそう。なあ、井上、お前は どうして本物の井上から抜けだしてきたんだ？」

しかし、聞かれている意味の分かっていない彼女はきょとんとしたまま首を傾げる。

「ほ、本物って、私は本物だけど？」

「ああ、そうか。あいつの魂の一部だから、本物には変わらないのか」

よしよし、悪かったな。

そして、夜彦はぴんと人差し指を立てる。

「じゃあ、質問を変えよう。どうしてお前は魂だけの姿で井上の体から抜けだしてきたんだ？」

しかし、またしても質問の内容は空振りをしたのか、彼女は困った表情をしながらうつろたえるだけだった。

「……？ わ、わけが分からないよ」

と、肩を小さく縮ませて、夜彦の背後の葛葉をちらちらと見た。どうやら、この話が終われば葛葉に食べられるとも思っているのかも知れない。ぷるぷると彼女は体を震わせている。

これではとても質問に集中できそうにもない。それを悟った夜彦は葛葉にしばらく神社の裏の森にでも姿を隠してもらい、二人以外誰もいなくなったところで、再び彼女に話しかけた。

「なあ、井上」

と驚かせないよう、顔を覗き込みながら笑いかける。

「う、うん？」

「よく思い出すんだ。お前が生まれた時のことを。お前は何か理由があつてろくろっ首になったんだ。でなければ、ここには存在しない」

すると、彼女はろくろっ首という言葉にぴくんと反応を示した。

「ろくろっ首……」

これは脈ありと、夜彦はさらに言葉で畳み掛ける。

「そう、それはお前のことだ。お前にはそうならなければならない理由があった。ゆっくりでもいい、よく思い出せ」

「うーん、うーん、ちよつと待って、なにか分かりそう……」

「本当か！」

「ええつと、ええつと……」

頭を抱えて、彼女が蹲る。そんな彼女を心配した夜彦だったが、思いの外、彼女はすぐに顔を上げた。

「何だ？ 思い出したのか？」

しかし、そこにあつた彼女の表情は先程までの無邪気で脳天気な少女のそれではなく、昨日、彼女が店から飛び出す直前に見せた、凍てつくようなそれだった。

「な！」

たじろいで、二三歩後ずさつた夜彦。それはもしかすると、自分に襲いかかってくるかもしれないと本能的に感じたためだったが、しかし、彼女は何をする様子もなかった。

生気を失つたような瞳で夜彦を見つめているだけで、何も言わずにぼうつと口を開けている。

そして、ふいに、その瞳から――。

涙がこぼれた！

その一筋流れた温かな雫は、彼女の頬を伝い、顎までたどり着く

と、行き場を失ってそこから地面に落ちる。

「え、え？」

「……しいの……」

彼女が、何かを囁いている。夜彦は咄嗟に気づいてすぐに耳を寄せた。

「何だつて？」

「私、苦しいの……だから、抜けだしてきたの」

「苦しい、抜けだした？」

「そうよ。『わたし』の中、とても息苦しいから、だから、私は、抜け首になったの！」

「どうだ、夜彦。何か掴めそうか？」

しばらくして、神社の裏からのそりと葛葉が体を表した。

「ずいぶんその抜け首と話をしていたみたいじゃないか」

しかし、そう聞いたわりには彼女は期待などしていないようで、興味すらない様子だった。

夜彦に、井上良佳の内的な問題を解決することなど、不可能だと思っているのだろう。

しかし、そこで夜彦は肯定の意味で頷いた。

「ああ、なんとなくだけど、分かった気がする」
「うん？」

思わぬ答えに葛葉は眉をひそめる。

「今、何と言った？」

「だから、なんとなく分かったんだ。あいつがどうして抜け首になったのか。その理由が、さ」

「そ、それは本当か？」

「まだ確信は持てねえよ。けれど、足がかりみたいなものは見えた。取っ掛かりはあるぜ」

そして、夜彦は背後を振り返り、涙を拭っている偽良佳の手を握ると、ほら、と一緒に立ち上がる。

しかし、彼女の様子はふらふらとして頼りない。

先ほどまでの笑顔の彼女はどこへやら、今ではしくしくと目を赤くしている様子は、親とはぐれた幼い子供のようで、見ているだけで胸が締め付けられるようだった。

「大丈夫だ、一緒に家に帰ろう」

夜彦が彼女を元気づけるためにそう言うと、彼女はしおらしく頷いて、

「うん」

とか弱い声だけ発した。

とてもこのまま放っておけない。つないだ手をさらに強く握りながら、夜彦は葛葉の正面に立ってこう言う。

「葛葉、学校に行こう」

「お前の学校、にか？」

「そうだ、あいつが俺の帰りを待っている。井上本人に聞けば、きっと本当の理由が分かるはずだ」

だから、さ。

夜彦がそう目で訴えかけると、彼女は狐の姿のまま肩をすくめる。

「全く、お前はいつもいつも厄介事を持ってきおって」

と不満そうに唇を歪めた。

「葛葉……」

ごめん。

「ああもう、分かっている。分かっていると言ったら！」

そして彼女は巨大な足を折りたたむと、その場に蹲る。そして、おもむろに顎で自身の背中を示し、

「ほれ、さっさと乗れ。学校までは一気に飛んでいくぞ。私の背中から振り落とされないよう、せいぜいしっかり掴まることだ」

そう言った。

其の十四

井上良佳が再び目を覚ましたのは、誰かに体を揺さぶられたからだった。底に沈んでいた意識が一気に海面へと引き上げられ、眩しい光が瞼の隙間から流れこんでくるのが分かる。

あれ、私、今までどうしてたんだっけ。

朧気な記憶の断片から、途切れ途切れの映像が見えてきた。

首もとの赤い筋、クラスメイトたちの冷たい視線、そして、眼を閉じる一瞬前に見た、謎の黒い影の人物。

「おい、井上！ 大丈夫か！」

と、誰かの声に呼ばれる。

曖昧模^{あいまいも}糊とした回想から、良佳ははっと我に帰ると、目の前の人物に飛びかかった。

「あ、あなた、一体誰なのよ！」

と無我夢中で叫ぶ。

良佳は、てつきり目の前にいる人物こそが、先ほど見た謎の黒い影の正体だと思っていたのだ。

しかし、そこにいたのは、別に謎でも何でもない、自身がよく知る少年である。

八守中夜彦、だ。

彼は良佳がいきなり飛びついてきたことに驚き、思い切り尻餅をついてしまったようで、その痛みに涙目になっていた。

「いてて……おい、びっくりさせるなって」

だが、良佳にはそんな彼に謝る余裕も、彼が腰を強打した事に対して心配する余裕もなかった。

「そ、そんなことより、さっきまでここにいた人は？」

と彼に掴みかかる勢いで訊ねる。

「さっきまでここにいた人？」

はて？ という具合に夜彦は首を傾げた。そして、キヨロキヨロと辺りを見渡して、不審げに目を細める。

「一体誰のことだ？ 井上の友達でもここにいたのか？」

良佳はぶんぶんと首を振る。

「違うわよ。友達なんかじゃない。全然知らないわ。でもさっき気を失う直前に、私、見たのよ。すごい速さで町の建物を飛び移ってこっちに向かってくる人を」

「何だそれ？ っていうか、やっぱりお前、朝と同じように気絶してたのか」

心配そうに顔色を覗き込んでくる夜彦に、良佳は構わず質を続ける。

「ねえ、あなたは見たの？」

「あん？ その、建物を飛び移って来るって奴か？ 俺は見えないけど、ええと、スーパーマンじゃないか？」

「ふざけないで、そうじゃないわよ。でも、それに少し近いかも。建物の屋上を次々に飛び移るなんて常人には出来ないことだし、あ

まりに素早く姿形もはつきりしなかった。でも、確かにこの目で見たのよ」

あの、奇妙な黒い影を。

しかし、夜彦は眉を曲げて半信半疑の様子だ。

「鳥か何かを見間違えたんじゃない……」

「もう、違ったら！」

良佳の言葉をまともに受け止めず、適当に返答する彼に良佳は腹が立った。つい、声を荒らげてしまう。

「私の話をちゃんと聞いてよ！」

ちつとも話が進まない齒がゆさに良佳は苛立つ。ああ、あの映像を何かに録画できていたら良かったのに、と思う。

そうすれば、彼も絶対に信用してくれるだろう。そんな、普通ではありえない存在を。

すると、なぜだか、急に良佳は泣きなくなってきた。胸がいつぱいで、涙が溢れそうになる。

もう訳がわからない。どうして私にはこんな理解不能で理不尽なことばかり起こるの。おかしい首の痕に悩まされたり、いきなり気を失って倒れてしまったり、奇妙な黒い影を見てしまったり――。

良佳の中で黒い渦がぐるぐると回る。真っ黒な濁流が良佳の心を砕いていく。

もう、たくさんよ！

「井上！」

いきなりだった。

夜彦の一喝が学校の屋上に響いた。あまりのことに良佳はビクリとその場に固まってしまふ。彼があまりにも真剣な表情をしてこちらを見つめていたのだ。

「な、何よ」

「少し落ち着け。お前は今、混乱してるんだよ。お前の魂がろくろっ首になっているせいだな」

彼の口から出たとんでもない言葉に、一瞬呼吸を忘れてしまうかと思った。

何ですって？

「ろくろっ首！？」

「そうだ。今日までのお前の体に起こっていた異変は、そのろくろっ首のせいだったんだよ。いいか？ 失神する度にお前の体から魂の一部が抜け出し、それがドッペルゲンガーみたく丸っ切りお前の姿そのもので町を歩いてたんだよ。でも、あれはドッペルゲンガーじゃない。だから俺にも見えなんだ！」

「ちよ、ちよっと待ってよ夜彦君。そんなことをいきなり言われても信じられないったら。ねえ、それって私の魂が、お化けになったってこと？」

良佳の混乱などよそに、さらに口調荒く説明している夜彦。どうにも止めようもない勢いである。

しかし、そこで、別の何者かの声が割って入った。

「夜彦、お前の方こそ落ち着いたらどうだ？」

良佳はそれに一瞬、慄然とする。

声の質は確かに少女のそれなのに、どこか老成した叡智の気配を

漂わせている重厚な声に、否が応にも緊張したのである。

ざり、とコンクリートの地面を踏む音がして振り返ると、そこには一人の人物が立っていた。

だ、れ？ 女の子なの？

良佳の視線が瞬時にその人物の容姿を確認する。そして、その異質さに唖然とした。

まず眼に入るのは、絹が風に靡いているのかと見紛うほどの上品な光を放つ銀髪、そして、降り積もった雪にも似た夢のように白い肌、さらに、時代錯誤も甚だしい帯で締めただけの簡素で古風な着物。

ここまででもその謎めいた様子が十分にも伝わるだろうが、しかし、彼女にはさらに他人の目を引く特徴があった。

それは、その頭の髪の間から覗いている、ふさふさと動く、二つのモノ……。

「き、キツネ耳！」

「む？」

すると、その少女が不愉快そうに良佳に目を向けてきた。目と目があった瞬間、感じたことのない怖気が良佳を襲う。怖い。この子、一体何者なの。まるで人間ではないみたい。

と、その少女がおもむろに口を開く。

「この耳がそんなに奇妙か？」

くすり、と悪魔的に笑う。

「ならば、これはどうだ？」

そして、その少女は今度は背中の方こうからさらにふわりと大きな狐の尾を揺らしてみせた。それを見るや、良佳は自分の目がましますまん丸に見開かれるのが分かった。

「あ、あ、あ、あなた！」

「むう？」

「あ、あなた何者よ！　ここは学校なのよ、そんなふざけた格好して！　服装のルールは守りなさい！」

そして、そう怒鳴るや否や、良佳はすかさず彼女の背後に駆け寄った。とにかく、その少女の長く突き出た尻尾を引っこ抜こうと掴んでみたのである。

ぎゅっと、強く。思い切り。

しかし、

「え？」

その途端、なぜか、良佳の体は宙に舞っていた。まるで、そうであることが当然のように、何の違和感もなく、ふわりと浮いていた。あれ？

どうして、私。

「このバカ娘が、私の自慢の尾に許可無く触るとは！」

そんな空気を裂くような怒声を風の中で聞きながら、訳もわからないまま、良佳の体にもるみる地面が近づいてくる。

ああ、私、落ちてる。落ちる、落ちる、落ちる、落ち――
――

ぼすん。

あれ、落ちてない？

良佳は不思議に思うが、どうやら、何か柔らかい物が良佳の体に当たり、激突の衝撃を和らげてくれたようだった。

すぐに振り返ると、良佳の下敷きになっていたのは、夜彦である。慌てて良佳は立ち上がる。

「夜彦君！」

「い、井上、大丈夫か？」

「あ、うん。私は大丈夫だけど……。夜彦君こそ大丈夫なの？」
「あ、ああ」

青い顔をしてぶるぶると震えながら、彼はぐつと親指を突き出す。

「問題ないぜ」

「ご、ごめんなさい。っていうか……。私、飛んだの！？」

「正確には、飛ばされた、が正しいな。井上、あいつの尻尾の力を舐めちゃいけないぜ。その気になればコンクリートだって紙切れ同然で吹き飛ばすらしいからな」

「ちょ、ちよつと待ってよ。それってまさか、もしかしてあの尻尾つて、付けてるんじゃないかって、ほ、本当に本物！？」

すると、彼はごく当然のように頷く。

「ああ。だってあいつは本物の妖だし」

きた、また妖だ。

良佳はもはやリアクションを取る気も起こらなかった。どうして今日はこんなに訳の分からないことが次から次へと起こるわけ。

しかし、良佳はそう思いながらも、もはやその類の話に、奇妙な親しみのようなものを自分の内側で感じ始めていることに、気がつ

いた。今までの自分ならば、「ありえない」の一言ですっぱり断ち切れるものが、今はそうもいかない。断ち切ることに躊躇してしまっているのである。

ありえる、のかしら。

良佳はたった今触ったばかりのあの少女の尾の感触を思い出した。あれはとんでもなくふわふわで暖かくて、間違いなく生きているものの感触だった。どう考えても作り物には思えない。

ということは……。

やっぱり、妖は存在するのか。

「そうだ。存在する」

少女から厳然とした声が響く。

「え？」

「自己紹介がまだだったな。人間の娘よ、私の名は葛葉」

しゃん、と彼女は自慢の尾を膨らませ、風に大きく揺らす。

「この世とは別の世界、幻妖界からやってきた妖狐だ」

其の十五

「よ、妖狐……」

聞きなれない違和感のある言葉を、良佳は繰り返す。

「そんな存在が……」

果たして、あるのだろうか。良佳の疑惑の念は尽きない。信じて
も、いいの？

しかし、しかしだ。

その妖狐と名乗る少女が放つ、一種独特な空気は、良佳がこれまで
で出会ってきた人々の中で、どれにも当てはまらない異質なものだ
った。

見た目が小柄な少女の姿でも、彼女にはその身の内に虎や龍の一、
二匹でも飼っているような、そんな超然とした気配がある。耳を澄ま
せば、ふいにそんな彼らの唸り声まで聞こえてしまいそう……。

と、そんな彼女が口を開く。

もしかすると獣の声で吼えるのか、と思いきや、そこから出たの
は、先程と同じ少女の声だった。

「確か、井上良佳と言ったか？」

「あ……は、はい」

良佳は吃りながら答える。どうにも、彼女に見つめられるのは苦
手だ。やはり、背筋がぞくりとしてしまうのである。

「なんででしょう？」

「先ほどは済まぬことをしたな」

すると、意外にも、彼女はいきなり謝った。

「え？」

「ちよつとした悪ふざけくらいのつもりでわしの尾を見せてみたのが、まさかお前があればどの反応をするとは予想しなんだ。思わず、怒りで吹き飛ばしてしまった。いや、本当に申し訳ない」

「あ、別に……」

「まだ説明していなかったが、私は他人に尾を触られるのがすごく苦手でな。尾のないお前たち人間には理解出来ないかもしれないが、そこは体の中でも敏感な場所の一つなのだ。だから、扱いもデリケートにしなくてはいけない。他者に触れさせるなど以ての外だ。分かるな？」

「は、はい」

まるで、先生と話しているような気持ちになり、良佳はいつの間にか、ぺこぺこ頭を下げていた。それにはつと気がつき、やはり、自分をそんな気持ちにさせる彼女は、普通ではない存在なのだと、再認識する。

すると、葛葉、という名のその妖狐はそこでまたふさり、と尾を動かした。

「さて、それはさておき」

と言葉を置く。

「そろそろ本題に入るぞ」

「本題、ですか？」

「そつだ、お前のろくろつ首の件だ。それを綺麗にちゃっちゃと片

付けなくてはならない。私はそのために来たのだからな」

「え、じゃ、じゃあ、もしかして、あなたが夜彦君が言っていた怪現象の専門家の……」

「専門家？ まあ、妖に関する知識はお前たち人間とは比べ物にならないくらいに持っておるし、そういうものと言われれば、そうかもしれないが……」

そこで難しそうに眉をひそめつつ、彼女は一つ言っておくぞ、と人差し指を立てた。

「勘違いする前に言っておくが、私は別に人間の手助けをするためにこの世に来ているのではないぞ。私は便利なお助けマンでも正義のヒーローでもない。あくまで、妖と人間のバランスを取り戻すという使命を遂行するためにいるに過ぎないのだ」

「妖と人のバランスを……？」

そうだ、それはとてもとても重要な仕事だ。彼女はそう強く繰り返す。

「井上とやら。賢そうな顔をしているお前なら理解出来ると思うが、そのような大事を成すためには、多少の細かいことは気にしてられない。分かるな？」

「え、ええ」

「例えば、ろくろつ首が一匹出たからと言って、いちいち大急ぎで現場に直行しているのは、ナンセンスだ。そんなことを繰り返しては、私の身がもたない。だから、一先ずは放っておいて様子を見る。いつもの私ならばきつと、そのように判断するだろう」

「は、はあ」

「しかし、しかしだ。今回わざわざこうして直々に私が顔を出したのは、他でもない、このお前のどうしようもないクソったれ友人、

略して、クソ友の夜彦に頼まれたからだ」

「夜彦君、が……」

葛葉は不機嫌そうに耳を揺らす。こころなしか、舌打ちもしたように見えた。

「全く、今は特に忙しいというのに、こいつが哀れな顔でめそめそ頼んでくるから、仕方無しに、わざわざ出向いてやったのだ。本当は一刻も早く、すぐにでも、こんな事を終わらせて他の仕事に取り掛かりたいところなのだぞ」

ひどく面倒そうに彼女は溜息をつく。

「本当に、毎度毎度、この男は性懲りも無く私の元に厄介事を持ち込んできおつて。こいつは私にとっての疫病神以外の何者でもないな。ああもう、一刻も早くこいつと縁が切れることを私は祈ってやまないぞ」

「あ、あの……」

まるで、憎き宿敵に向けるような鋭利な視線で背後の夜彦を睨む葛葉に、良佳はおずおずと言葉を挟んだ。

「何だ？」

「夜彦君のこと、あんまり怒らないであげてください」

「うん？」

「その、私が、彼に頼んだんです。私の体に起こっている異変を解決してくれって」

「ほう……」

すると、彼女は良佳がそんなことを言い出すとは思わなかったの

か、意外そうに目を細めて良佳をまじまじと見た。

「だから……だから、夜彦君、授業中だつていうのに学校を抜けだしてしまって、私を助けるために町中を走りまわってくれたみたいで、その、お忙しい葛葉さんを無理やり連れてきてもらったのは、そういうわけで……。だから、全部私が悪いんです」

「ごめんなさい。」

そう良佳が頭を下げると、背後に立っていた夜彦が間髪入れずに反論してきた。

「おい、井上、それは違うだろ。これは俺が勝手にやったことだ。お前は俺に一言もこうしてくれなんて頼んでない。俺が悪いんだ。お前が悪いはずがない」

「うっん、私のせいよ。これは私の問題なんだから……私の責任よ、夜彦君。そう、私の……」

「井上……」

「だから、葛葉さん。怒るなら、この私を」

良佳は覚悟をして、頭を下げたままぎゅっと目をつぶった。一体、怒った葛葉からどんな仕置きがあるのかと思うと、とてつもない恐怖だったが、今更四の五の言うつもりはなかった。

これは、私が悪いのだから。全てを背負うのが私の役目。甘んじて、罰を受けよう。

しかし――。

待てども待てども、葛葉は何も言わない。良佳の耳を思い切り抓ることもなければ、大声で怒鳴ることもない。

ただ、沈黙しているのだ。

どういふつもりかしら？

良佳が耐え切れなくなつて顔をあげると、彼女はぶすつと不貞腐れたような顔をして、良佳を見ていた。
そして、

「ふん、私は怒る気も失せた」

と、言う。

「あーあ、これでは丸っ切り興ざめだ。ああ、つまらない」

良佳は意味が分からない。

「え、あの、どういう……」

「私はてつきり夜彦に新たな借りを作つて、またこいつをいじめる良い口実になると思つていたのに……井上とやら、お前の言い分が正しいとすれば、それは、夜彦ではなく、お前への借りになつてしまふ。これでは面白くない。そうだろう?」

まあ……。

「お前が夜彦並にいじめ甲斐のあるやつなら、話は別だが?」

にやり、と笑つて、葛葉は鋭く尖つた犬歯を口元から覗かせる。
またしても、あの悪魔的な笑みだ。良佳はぞつとした。

「え、ええと」

と逃げるように愛想笑いをしてみせると、狐の少女はそれに満足したように少し笑つて、こう言った。

「しかし、井上とやら。お前が案外元気そうで安心したぞ。屋上でお前が倒れているのを夜彦が発見し、私に告げた時はさすがに不安に思ったが、こうしてさらに近づいてみて分かった。お前には特に逼迫した命の危険はない。これなら、夜彦にも任せられるな」

「命の、危険？ それに、任せるって……」

一体どうということなのだろう。

振り返って夜彦を見ると、彼は心配するなと自信有りげに頷いていた。その瞳には、先ほど保健室から出て行く時に見せたような強い光がある。

葛葉が言う。

「さて、私はここからじつくりとこの後の展開を見させてもらおう。この男がこの怪事件をどう解決するのか見ものだしな。それで、今の興ざめ分を少しでも取りかえし、ちょっとでも私の手間が省けてくれればいいが……」

そして、彼女は何をするのかと思いきや、屋上の入り口のドアの方へ向けて声をかけた。

「よし、もういいぞ。出てこい」

出てこい？ 誰のこと？

良佳はさつと身構える。これだけありえないことが起こっているのだ、もうどんな人物が現れてもおかしくはない。

すると、おもむろにドアノブが周り、金属が擦れる重めかしい音と共に、ゆっくりとドアが開く。良佳の方へ向けて、開いていく。闇の向こうに光が差し込み、そして、そこに立っていたのは――。

「うそ……そ、そんな、私？」

その人物を見たたん、良佳は絶句した。そして、これが、夜彦の言っていたドッペルゲンガーなのだと、理解する。

「こんにちわ、わたし。会いに来たよ」

そこに立っていた『私』が、無邪気な笑顔で言った。

其の十六

「嫌よ、いや。こっちに来ないで！」

井上良佳は屋上のフェンス際まで後ずさりをしながら、必死に訴えた。

「近づいて来ないでよ！」

しかし、その声が聞こえても尚、その少女は良佳への歩みを止めない。じりじり、じりじりと確実に良佳との距離を狭めてくる。

その表情はどこか悲しげで、しかし、その虚ろな目で良佳だけをしっかりと見据えながら一歩、また一歩と足を踏み出してくる。

まるで、無感情で、どこまでも命令に忠実なロボットのようだ。

良佳はそう感じて身震いする。

それだけでも良佳には十分な恐怖であるのに、それをさらに煽るのは、歩いて来る少女が良佳そのものという事実だった。

よく双子で全く瓜二つの顔をしている人間がいるが、この相似は、そのレベルすら超えている。そっくりそのまま良佳なのだ。偽物とか作り物とか、そういう類のものではない。

これが、本当に、ろくろっ首とかいう妖だって言うの？

がしやり、と背中がフェンスにぶつかり、頬から冷や汗が垂れ、コンクリートに染みを作った。

まるで、悪夢を見ているみたいだわ。

誰か、誰か、助けて！

すると、そこに夜彦の声が聞こえてきた。彼はもう一人の良佳の背後に立っている。

「何だよ、井上。そんなに怖がることないじゃないか」

彼の声は既に全ての事情を了解しているかのように、やけに冷静だ。

「さっきも説明した通り、こいつはお前の魂の一部。紛れもないお前自身だろう。どうしてそんなに逃げまわる必要があるんだよ」

どうして、って……。

すると、それに対して、目の前のもう一人の良佳が相槌を打つ。

「そうだよ、この人の言う通り。私はあなたに何の害も与えない。逃げないでよ。ただ私はまた元通り、わたしの中に戻りたいだけだもの」

しかし、そう言われても良佳は首を縦に振る気持ちにならなかった。

それがこの理解不能な状況下に自分が置かれているせいなのか、首にある赤い痕からのなんらかの影響なのか、分からない。

だが、良佳は確かに、この自分に瓜二つな少女に対して、恐怖感以上に、吐き気を催すほどの強烈な嫌悪感を抱いていたのである。

私はこいつが嫌い。私は、こいつが憎い。大嫌いだ。

何としても、どんな手段を使っても逃げなくては。

だって、私は……。

私は……。

ドクンドクンと心臓が胸を叩き、体に血を巡らす音がする。いつしか、全力疾走をした後のように、呼吸が荒くなっていた。

良佳は、背中をフェンスにつけたまま、そこからそれ伝いに、また別の場所に逃げようと考えた。

このままフェンスで屋上の端を辿り、元来た屋上の扉から階下に降りよう。そう決めて、よるめきながらも無理やり走りだそうとする。

が、しかし、足元を見ていなかったために、すぐに転んでしまった。

「きゃあ！」

頬がコンクリートとぶつかって痛み、膝からは溢れ出した温かい血の感触がした。

「ねえ、逃げないで」

もう一人の良佳が懇願する。その声はひたすらに切なく、悲痛で、良佳の心を絞めつけたが、それで意思が変わることはない。

「お断りだったら！」

と跳ね除けて、もう一度立ち上がろうとする。

「絶対に、あんたなんか！」

「それは、どうして？」

もう一人の良佳の透明な瞳が良佳を覗き込む。

「え？」

「どうして、私を拒否するの？」

「ど、どうしてって……」

そこに重要な理由があった気がするけれど、やはり、今の良佳に

は分からない。

でも、とにかくダメなの！

「井上！」

するとそこで、先程のように夜彦が叫んだ。世界の時間が止まったように、良佳は体の動きが静止するのが分かる。

「何よ……」

と、唯一口だけが動いた。

「もう、終わりにしようぜ」

「お、終わりって……」

「お前が望んで生み出した妖から逃げるのはよ」

いきなり、何を突拍子もないことを言い出すのか。良佳は啞然とした。そして、目を見張って夜彦をまじまじと見つめる。

「わ、私が生み出した妖！？」

訳がわからない。

「おかしいと言わないでよ！」

「いや、おかしくない。こいつはお前がそう望んだからこそ、生み出された妖だ。お前自らが望んで切り離したお前の魂だ」

「ど、どういうことよ」

少なくとも良佳は自分からそんなことを願った覚えはない。そもそも何でそんなことをしなければいけないのだ。自分から化

物を作り出したいと望むなど。分からない、分からない。
しかし、

「そのままの意味だよ」

と、夜彦は言った。

「ここに来るまではまだ確信が持てなかったが、お前のこいつから逃げようとするその行動でよく分かった。やっぱり、そうなんだな」

「そうなんだなって……」

「あんな、井上。こいつは、お前が『心の底で嫌いなお前』なんだよ」

何よ、それ。

「私が、嫌いな私……？」

「そうだ。お前が嫌って自分の中から排除したがってるお前自身なんだよ。だから……行き場のないこいつは、妖になるしかなかった」

どこかもの悲しげに、彼は目を伏せる。そして、ちらりともう一人の良佳の方を見て、何かを決意したように頷くと、

「いいか、井上、俺の質問に答えろ」

と、言った。

「しつもん？」

唐突に、何を言い出すのだろう。

「そつだ。お前、学校生活は楽しいか？」

「な、いきなり何よ、ふざけてるの？ そんな事、今なんの関係が――」

「あるから聞いている。イエスカノーか。二択で答えるんだ」

彼の表情は厳しい。そこには良佳に有無を言わせない迫力があつた。例え、このまま反論したとしても、その迫力で弾き返されてしまいそうである。

そう思つた良佳は、一体この質問がどういう意図があるのか、半信半疑ではあつたものの、とりあえず、

「た、楽しいわよ」

と答える。

「委員会活動は充実してるし、勉強も順調、友達はたくさんいるし、別に不安な事があるわけじゃない」

とても、実りある学校生活よ。

自信を持つてそう言い切る。それこそが今の自分に一番誇れる部分でもあつた。

しかし、見つめている夜彦の目の色は、良佳に対する懐疑的な鈍い灰色を帯びていた。

「本当に？」

「本当よ。どうして嘘をつく必要があるの？ 私は今の生活に満足してる。お陰さまで皆から頼りにされて、いろいろな仕事を任されてるし、それに応えるために私も全力を尽くしているわ。そこに何の不満があるっていうの？」

「井上。確かに今のお前は学校の皆が憧れるような立派な生徒だろ

う」

「そ、そんなことまで言っただつもりはないけど」

「しかし、それは果たして、『自分が心から望んだこと』なのか？」
「え？」

思わぬところに触れられた気がして、良佳は驚いた。

「何ですって？」

「お前、さっき俺を庇ってくれた時、言っただよな。『私の責任』だつて、妙に強調して」

そう言われて、良佳は先程のやりとりを思い出す。そして、頷いた。

「え、ええ。言っただわ」

ほとんど無意識だったけど。

「それがどうかしたの？」

すると、夜彦はそこでまたしても悲しげで苦々しげな表情になった。強く結ばれていた口元が緩み、そこから力ないため息が漏れる。

「そう言った時のお前の顔、何だか無理してるみたいだった」

「……無理、してる？」

「俺を助けようとしてくれたのは、分かる。けれど、その言葉のせいなのか、お前は酷く重たい物を担いでいるような、そんな疲労した顔をしていたんだ。俺には、そう見えただ」

「だから？ 何が言いたいなの？」

答えの見えない彼の言葉に良佳はイライラしていた。昔から、回りくどいことは嫌いなのだ。早く、結論が欲しい。

「もったいぶらずに、ちゃんと言いなさいよ！」

そう痺れを切らすと、ようやく夜彦は話す気になったのか、「分かった」とゆっくり言った。

「お前、仮面を被って生活するのにもう疲れてるんだろう」

「え？」

「だから、『優等生』っていう重たい仮面を被って生きてるってことにさ。本当のお前は、別にそんな存在になりたいわけじゃない。本来のお前のままでいたいのに、そうなれないのは、周りが優等生であるお前を望むからだ。勤勉家で、品行方正、責任感があり、リーダーシップに優れ、誰とでも打ち解けられる、そんな完璧な優等生としてのお前を」

「な、何を！」

良佳は言い返そうと声を上げるが、

「違うのか？」

と夜彦に険しい視線で睨まれ、なぜか、良佳は彼に繰り出すはずだった「違う！」という言葉を飲み込んだ。ごくろ、と。

そんなはずはない、と思ったのに、不思議なことに彼の言葉が良佳の中に、すんと、とはまり込んだのである。妙に、納得してしまった。

その理由が分からず、口を閉ざしてしまう。

私、一体、どうしちゃったんだろう。

ふいに、目の前の少女と目が合う。その淋しげな瞳の奥に引きこ

まれそうになる良佳がいて、はっと気がついて、逃げるように目を逸らした。

「井上」

「な、何よ」

「お前、本当は、薄々気づいてたんじゃないか？ 自分がそういう生き方をしているって。そんな本来の自分をねじ曲げるような生き方をしてるって。本当はそんな生き方は辞めたいって」

「ち、ちが——」

「でも、お前はそれを止めることが出来なかった。なぜなら、それはお前がこれまで手に入れた皆からの信頼を無にってしまう行為だからだ。お前はそれが怖かった。今の優等生であるお前を辞めてしまったら、もう二度と皆が自分に振り向いてくれないんじゃないかって、そう思っただろう」

それが、お前は怖かったんだ。

彼の言葉が、じわじわと心に沁み込んでくるのが分かる。

良佳はなぜか反論出来ない。彼に対して言い返そうとする度に、その勢いが自分に跳ね返ってくるのだ。

そして、その跳ね返りのエネルギーは、良佳が触れたくない心のひび割れた部分に吸い込まれ、そこが次第に、じんじんと痛み出す。深く、強く、きりきりと。

「夜彦君……」

やめて、それ以上、やめて。
思わず、耳を塞ぎたくなる。

「お前はそれを恐怖するあまり、優等生らしくないとお前が思う『お前の一面』をも、ひた隠しにしてきた。それを見せると、誰から

も相手にされなくなってしまうと思ったんだろう。だから、いつしかお前はそれお前自身を強く心の隅に押さえ込んだ」

そして……。

「こいつらは、そんなお前がいつしか押し出した心の欠片だ。浮遊するだけの魂、そんな抜け首になっちまってた」

「わ、わたし……」

私は違う。

そう言いかけて、ようやく、気がついた。

そうか、その行為に、私、心当たりがある。

彼の言う通りだ。私は、そうだった。

先ほど見た、クラスメイトたちからの冷たい視線を思い出す。

私は、それが昔から、嫌だった。

誰かに嫌われるのが、一人になるのが、怖かった。孤独が、怖かった。

だから、誰からも好かれるように、強く、完璧な人間になろうとしたんだ。

誰からでも望まれる自分でありさえすれば、不安にならずに済むから、そうしていれば、一人ぼっちにならずに済むから、それが、一番、楽だから。

だから、だから……。

いつしか私は、私の嫌いな私に『刃』を突きつけた。

そして、私は私が余分だと思う魂を、その首を、見えないナイフで自分の体から、ざっくりと、切り落としたのだ！

涙が、じわり、と溢れる。それはきつと、心から飛び散った血の

色をしているに違いないと良佳は思った。

今、全てを、了解したわ。

これまでの私は、ただの、作り物だったんだ。

本物であって、本物ではない、そういう存在だったのだ。

そこでふいに、良佳は自分の首もとを思い出したように触る。うつすらとあの赤い痕の感触が指から伝わってくる。今なら、その痕の意味が分かる。

これは、ただの赤い痕じゃなかったんだ。良佳は静かに頷いた。

これは、これは……私が自分自身に付けた——。

「まさに、『首輪』、だわ」

そう、優等生であり続けるために、自分を飼いならすための首輪。虚像の自分を現実繋ぎ止めるための鎖。

その瞬間、全てがガラガラと足元から崩れ去ってしまいそんな感覚に襲われる。涙が後から後から溢れてきて、良佳の頬をどんどん濡らした。

「あ、ああ——」

いつしか、良佳は目を腫らして、ぐじゃぐじゃに泣いていた。

そこにはもはや、恥ずかしいとか、みつともないなどという意識はなかった。

ただ、遅れてやってきた自分自身を傷つけた痛み、ようやく気がつけた事が、悲しくもあり嬉しくもあった。

「うわあああああああ——」

そんな良佳を夜彦はこれまでにないほどに、優しい瞳で見ている。雨に濡れている子犬にそつと毛布をかけ、その疲労を労るように、

じつと見ていた。

彼は、ずっと、何も言わなかった。

そして、もう一人の私も何もせずに、良佳の涙がおさまるのを、ただ待っていた。

其の十七

そうして、どれくらいの時間が経ったのだろうか。

良佳はいつしか、体を仰向けにして寝転がっていた。両手両足を投げ出し、高い空を仰いでいる。

熱い雫は相変わらず、嗚咽と共に押し出されるようにして、良佳の臉の内から溢れてきていた。

しかし、それも先ほどよりはかなり収まっている。それが、もはや、泣くことに疲れてしまったからなのか、それとも、もう流すだけの涙がないのか、分からない。

「こんなに泣いたのって久しぶり」

僅かに震える声で、呟く。

ただ、悲しい気持ちかと言えばそうではなく、不思議と清々しい気分だった。まるで、それまで自分を包囲していた見えない壁から開放されたような心地である。

と、そこに学校のチャイムの音が鳴り始めた。

キンコンカン——。

放送マイクから聞こえる、聴き慣れた、その音。

それがすっかりがらんどろになってしまった良佳の心の中に響いた。そこには先程のような悲しみや恐怖の影はない。

なんとなく、良佳は涙を拭ってそれをぺろりと舐めてみる。すると、その味はじゅんとしよっぱくて、少しだけほろ苦いものだった。

ああ、泣いた。

あーあ、泣いちゃった。

さらりとした夕風が屋上を吹き抜け、太陽の熱に焼かれて火照っ

た良佳の頬を少しだけ冷ましていく。

ふいに隣を見ると、そこにいたのは体育座りをした夜彦だった。彼はやはり何も言わずに、夕陽が町の向こう、山並みの背後に消えていくのを見ている。

彼の他には誰もいなかった。

もう一人の良佳の姿は見えない。周囲を見渡しても、見つからない。

どこに行ったのか、と彼に聞こうとして、ふいに首もとに手をやって、そして、理解した。

いつの間にか、離れていた首と体は、元通りに繋がっていた。それが分かったただけで後は十分だった。

「ごめんね。それから、おかえり……」

そう呟いて、もう一度涙を拭った。

ゆっくりと上半身を起こす。それに気がついて夜彦が顔を覗き込んできた。

「もう、大丈夫か？」

「うん」

良佳は自信を持って頷いた。

真っ赤に目を腫らした顔を彼に見せていると思うと恥ずかしかったが、しかし、彼になら、まあいいか、とも思えた。もそもぞと体を動かして、良佳も彼と同じように体育座りをしてみる。

「ねえ」

「何だ？」

「私、これから、どうすればいいのかな？」

そう訊ねると、彼は相変わらず真つ直ぐ夕陽を見ながら答える。

「さあな。よく分かんねえけど。でも、とりあえず、辞めちまえばいいんじゃないか？」

「え？」

「ゆうとうせー」

「……」

「皆の期待を何もかも背負ってやろうなんて、もう考えんなよ。お前はお前のままでいいんだ。出来ることがあって、出来ないことがある。それでいい。無茶や無理をして、お前自身を削る必要はねえ。世の中適当でいいんだよ、適当で」

夜彦はそこでにやりと笑い、

「無理なことは少しくらい、他人に押し付けるくらいでもいいのさ」
などと言う。

あまりにもあつさりとした口調で彼が言うので、良佳は戸惑ってしまった。心のなかで尻込みをして、口ごもってしまう。

「そんなこと、出来るのかな」

今までの、私を捨てるなんてこと……。

空っぽの心が、淋しげに、からからと音を立てるのが分かった。

私には、そんな自信がない。

しかし、

「別に全部捨てる必要はねえんだぜ」

夜彦はまだ余裕で笑っている。

「へ？」

「優等生でいることも本当のお前なんだ。だから、それもお前の中で大事に持っておけ。けれど、今度からはそこも含めて本当のお前になるんだ」

な？ そう考えると、怖くないだろ？

「……」

彼の励ましの言葉は、確かに空っぽの良佳にとって、これからの弾みになるエネルギーをくれるものだった。

しかし、そうであったとしても、良佳には一抹の不安が残る。これまでと違う生き方を始めるということは、それまで自身を支えていた重要な柱を失うことだ。つまり、もしもの時の心の拠り所、逃げ場も失うことである。

物事をやり直すということは、とても難しく、厄介なのだ。そんな不安が口を衝いて出る。

「もしも……もしも、本当の私が皆に拒否されたら、どうしよう」

だって、本当の私は、怠け者だし、わがままだし、怒りっぽいし、根暗だし、アニメオタクだし……挙げていけばキリがない。

それに続けて、面倒くさい、気持ち悪い、と皆が唇を歪めて良佳を見ている映像が浮かぶ。それを思うとゾツとした。

しかし、それでも夜彦は何も気にしていないようだった。

「もし、そうになったら、俺のところに来い」

と、どんと胸を叩く。

「へ？」

「俺が味方になってやるからよ。愚痴でも、世間話でも、冗談でも、趣味の話でも、何でも聞いてやるさ。誰にも言えないようなことでも、俺に話せよ。ちゃんと最後まで聞いてやる。お前のことを見捨てたりしない。だから、怖くなったら、俺のところに、来い」

彼は満面の笑みで良佳を見ていた。しかし、彼がいきなりそんなことをためらいもなく言うものだから、良佳は驚いてしまう。

「え、え、え？」

「どうした？」

「い、いや、その……」

良佳は何だか彼の顔をまともに見れなくなって、頭の中がしどろもどろになって、無理やり彼から目をそらし、ぶっきらぼうに感謝を告げる。

「あ、あ、ありがとう」

すると、彼はそんな良佳を見て、怪訝そうに目を細めた。

「何で赤くなってるんだか。変な奴だな」

と、眉間にしわを寄せる。

「熱でもあるのか？」

「な、ないわよ！」

なぜだかパニックになってしまい、彼を突き放すように、大声を出してしまった。

ああもう、何だかとても恥ずかしいわ。

涙とは違う熱いものが良佳の中から沸き上がっているようだった。

「い、井上？」

「ば、ば……」

「あん？」

「夜彦君の、馬鹿……！」

思わず、そう叫んでしまった。

「馬鹿、馬鹿、この、大馬鹿ヤロー！」

それは、これまでの優等生の自分ではありえない、一方的な乱暴な言葉である。

「おいおい、俺は罵声まで大人しく聞いてやるなんて言っていないぞ」

しかし、構わず良佳は彼を罵り続けた。まるで、心の箍^{たが}が外れたように、次々と言葉が溢れてくる。

「馬鹿、アホ、唐変木、あんばんだん、この、ろくでなし！」

ますます怪訝そうに目を丸くして困惑する夜彦に対し、良佳はなぜか、知らず、自身が笑っていることに気がついた。

ああ、私って最低かも。助けてもらった人にこんなこと言っちゃって。しかも、笑ってるなんて。

でも……。

でも、ま、いいか。

そう思ってた、もう一度彼に馬鹿と言ってやった。

其の十七（後書き）

次回、第三話完結です。

其の十八

「これで、一件落着つてところかな」

東の山際には昼間の太陽と入れ替わりに、朧気な光をまとった月がのぼっている。

夜彦は神社の鳥居の柱に寄りかかりながら、そんな薄暗い空を見上げていた。刻々と時間が移ろうにつれ、闇はその色を濃くしていくのが分かった。

「そうだな」

と、何者かの返事が聞こえる。

これは、鳥居の上に腰掛けている葛葉のものだった。彼女の方からは、微かに物を咀嚼するような音が聞こえているが、それは先ほど夜彦が彼女に今回の事件のお礼として買ってやったたこ焼きだろう。食欲をそそるソースの香りが風に乗ってやってくる。

「もうあの娘が再び抜け首に悩まされることはないだろう」

彼女は呟く。

あの後、放課後の学校の屋上で行われたことは、大したことではなかった。

いったいどこに姿を隠していたのか、急に二人の間に現れた葛葉が良佳の顔をまじまじと眺めながら、くんと匂いを嗅ぎ始めたのである。夜彦から見れば、それは葛葉にとって良佳がおいしい獲物であるかどうか、嗅ぎ分けているように見えたのだが、彼女によれば、良佳の魂がきちんと元通りになったのかを確認していたのだ

と言っ。

そして、その結果がどうだったのかと言うと、『問題なし』という最良の状態であることが分かった。

もう何も心配することはない、と葛葉が良佳に告げ、簡単に今回の怪事件について説明して、そのまま解散という運びになった。

良佳はまだ自分に起こったことがどういうものなのか、完全に理解出来ておらず、葛葉の説明にもどこかぼかんとしている様子だったが（時折、なぜか葛葉の耳や尻尾をどこか触りたそうにしていたような気もする）、少なくとも、未だに重たい悩みを抱え込んでいる気配はなかった。

そして、彼女はそこではっと思い出したように、涙に濡れた頬を拭いながら、夜彦たちに頭を下げ、丁寧にお礼を言った。

夜彦はその直前の彼女からの罵倒の意味を考えている最中だったので、その態度の一変ぶりに動揺した。なんだかんだ言いつつも、良佳のその礼儀正しさとか、真面目さとかいうものは、彼女の中に常にあるものらしい。

「しかし、あの後、二人で先生に見つかってこっぴどく怒られるとはな」

夜彦は苦笑いしながら思い出す。

実はその後、屋上に上ってきた担任の教師と夜彦たちは八合わせてしまったのである。

どうやら、あの時間、良佳が教室から出て行っただけ、戻らないということ、その教師が校内を探しまわっていたらしい。

そのため、その教師は夜彦たちを見るや、顔を真っ赤にして、凄まじい剣幕で怒りだしたのだ。

「間一髪、私は屋上から逃げていたがな」

すると、葛葉がけけらと笑う。

「早めに気配を察知していて良かったぞ」
「ったく、ずるいぜ、自分だけ」

夜彦は齒ぎしりをして彼女を睨んだが、彼女は何を言う、と目を尖らせた。

「私は元々あの学校の生徒ではないであろうが。授業時間に屋上にいたところで怒られる筋合いはない」

それに、部外者に私の姿を見せるわけにはいかないからな。
彼女は言う。

「しかし、それにしてもお前たちの怒られっぷりは滑稽であったな。特に、お前が地面に額を擦りつけ、もうしませんと謝っている姿など、私は腹を抱えて笑ってしまった」

「お、お前見てたのかよ」
「ああ、実に興味深い見せ物だった」

そう満足気に言うのが、夜彦には恥ずかしく、腹立たしかった。

「う、うるせえ！」
「ところで、話は変わるが……」
「な、何だよ急に」

彼女の声のトーンがいきなり落ちる。

「お前、今回の件で、奇妙な点があったのを覚えているか？」
「き、奇妙な点？」

急に問いかけられたので、夜彦は言葉に窮した。

「……何のことだ？」

「よく思い出せ。昼間に私が言っただろう。あの娘が何度も頻繁に失神するのは妙だと」

「……」

そう言われれば、聞いた覚えがある。夜彦はあれから良佳を救うのに必死であつたために、そんな言葉など忘れていたのだ。

「私はそれをただの抜け首の症状にしては重すぎると考えた」

「で、でも、結果的に今の彼女には問題はないんだろう？」

夜彦は指摘する。

あの後、無事に元通り一つになった彼女に異変がないかどうか、葛葉は入念にチェックしていたのである。

それで何事もなかったのだから、大丈夫なのではないだろうか。しかし、彼女は厳しい顔を変えない。

「そうは言っても、もしかすると、何かを見落としていたのではないかと今になって不安になったのだ」

それに、妙なことはそれだけではない……、

「あの娘が失神する直前に見たという黒い影についてもまだ解明出来ていない」

ああ、それか。

夜彦はすぐに合点がいった。

「それは何かの幻なんじゃないか？ あの時井上も精神的に疲れていただろうし、そういうものが見えてしまっても不思議じゃないだろう？」

「果たして、そうだろうか？」

彼女はまるで齒の間に物が挟まっているかのように、もどかしそうだった。ふさふさの尾を右へ左へ忙しく動かしている。

「気にしすぎだと思うけどなー」

「しかし、気になるものは気になるのだ。はふっ——もふもふ」

彼女はそのもやもやを無理やり飲み込むようにたこ焼きを口に入れた。ゆっくりとそれを咀嚼している。

「——ゴクン、とにかく、しばらくはあの娘の経過観察を行うことにしよう」

「経過観察？」

「そうだ」

「葛葉が？」

「うむ」

「……そっか」

夜彦は彼女のその念入りな行動を意外に思いながらも頷いた。彼女がそうするというのなら、良いではないか。夜彦が別に困ることではない。むしろ、彼女に良佳が見守られているのであれば、夜彦も安心だ。

「うむ……。それで、時に夜彦よ」

「うん？」

今度はどうしたのだろう。彼女を見ると、彼女は夜彦の手元の方へ視線を向けているようだった。

「その大事そうに持っている紙袋はあの娘のものではなかったのか？」

「え？」

驚いて、その袋を持っていた事に気が付き、中身を見ると、そこに入っていたのは……。

「あ、あいつのフィギュアだ！」

彼女が愛おしそうに店内で眺めていたあの一つ目鬼の人形がケースに入っている。

「ふいぎゆあ？」

「こうしちゃいられない、これを井上のところに届けて、お金を返してもらわなくちゃ」

夜彦はそそくさと自転車にまたがると、葛葉に別れを告げて、彼女の家の方角へと、ペダルを漕ぎ始めた。

走りながら、すっかり薄くなってしまった自分の財布をポケットから取り出す。

「くそう、給料のねえ高校生には小遣いは魂よりも大事だったのに」

そうばやいて、自転車のペダルを踏み込んで、加速した。

青信号の交差点をつっぱしり、人通りの多い駅前を通り抜け、その先の住宅街に向かう坂道を上る。

町中から離れていくために、周囲には次第に闇が増えていく。林の枝々が、不穏気にざわざわと鳴った。冷えた夜気が夜彦の体から熱を奪っていく。

「何だか、妙な感じだな」

と、その時だった！

ふいに、道端の繁みの影から、何かが飛び出した。

「うわっ！」

と叫んで、急ブレーキをかける。自転車が甲高い音を発して止まった。

夜彦は慌てて、その飛び出してきた何かを探す。

すると……いた！

夜彦の自転車の先、ほんの数メートル先に、何者かが立っている。

「な、何だよ……」

すると、その黒い人影のようなものは、驚いた夜彦に脇目もふらずに、コンクリートの地面から信じられない跳躍を見せると、一気に隣の民家の屋根の上に降り立った。

「え！？」

それも、つかの間で、すぐさままた別の家に飛び移る。また、飛び移る。また、飛ぶ。瞬く間に姿が見えなくなってしまった。

あまりの事に言葉を失った夜彦は何も出来ないまま、しばらく、

その場で立ち尽くしていた。

やけにうるさい自分の心臓の音と荒い呼吸音だけが聞こえている。

「あ、あいつが、井上が言っていた……」

黒い、影――。

「……なのか？」

その正体は、もはや、知ることは出来ない。

濃密な闇が目隠しをするように、夜彦の周囲を囲い始めていた。

其の十八（後書き）

どうも、ヒロユキです。

妖げんげんの第三話、如何でしたでしょうか。少しでも楽しんでもらえたのなら幸甚であります。第四話の連載開始時期に関しては今のところ未定ではありますが、なるべく早いうちに始めたいと考えています。

其の一

ゴロゴロ、ゴロゴロ――。

遠くの山から、まるで追いかけてくるように雷鳴が轟く。一瞬の閃光が空を走るたび、乾いていたはずの空気がまとわりつくような湿り気を増す。

辺りは、闇に満ちていた。

一度その中に紛れ込めば、二度と光を見いだせないのではないか、と思うほどの黒い闇である。

男は、走っていた。

人気のない、深夜の路地。

進むたびに狭まっていくような印象のある、心細い道を、ただひたすらに男は駆けていた。

ひょうひょうと不吉に風が鳴る。それに合わせるようにして、周囲の外灯の光が、まるでロウソクの火のようにか細く揺れた。男の周囲を夜がその密度を急速に濃くしていく。

と、また空が割れた。

光と共に、追い立てるような雷の音が聞こえる。

男は自分が走りながら、その音に悲鳴を上げていることに気がついた。必死に足を動かしながら、自分は恐怖しているのだ、と気がつく。

何を、恐れているのか。

それは自分でも分からない。

しかし、男はその何かから、必死に逃げていた。

そうでなければ、きつと、きつと、

コロサレル。

そんな根拠不明の確信だけがあった。

何度目の雷鳴を聞いた時だろうか。

男は走りながら疲れてしまったのか、足元に躓いて、倒れこんでしまう。早く起き上がらなくては、と体に力を入れたとき、急に男の視界に入る暗い路地はぐねぐねとまるでこんにやくのように曲がって見えた。

一瞬、目の錯覚か、と思うが、そうではない。ぼたり、と頬を汗が伝った。

空気が、熱い。

何かが燃えているのだ。

周囲の景色が歪んで見えるのは、その熱がもたらす陽炎のせいなのだ。

男は背中に視線を感じる。

その、なにかは、もう真後ろに来ている！

思わず気絶してしまいそうな恐怖がこみ上げた。必死に立ち上がるうとするが、焦る気持ちとは裏腹に足がもつれ、再び地面に突っ伏してしまった。ごっん、とコンクリートで顎を打ち、目から火花が散る。

朦朧とした意識の中、男はもはや、自分が立ち上がる気力さえなくなっていることに気がついた。

おそらく、これ以上逃げても無駄だ。男は悟った。すぐ背後で、奇妙な獣の鳴き声がこだました。

嗚呼――。

「た、頼む。助けてくれ。お願いだ!」

男は必死に叫ぶ。両手を組んで、祈りを捧げる。
見えない何かに対し、背中越しに。

「命だけは、どうか!」

しかし、その何かは返事をしない。
そして、次の瞬間、男は自身の指先から炎が迸るのを見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1676r/>

妖げんげん

2011年11月4日06時19分発行